

常開眼目坐也。若坐久疲勞。改右改左亦無妨。此乃從佛直下僅五十世正傳有證也。

拜問。日本國并本朝疑者云。今禪院禪師之所弘通坐禪。頗小乘聲聞之法。此難云何遮耶。

堂頭和尚慈誨云。大宋日本疑者所難。實未曉了佛法也。元子須知。如來正法。出過大小兩乘之表。雖然古佛慈悲落草。遂施大乘小乘之授手方便也。元子須知。大乘者七枚菜餅也。小乘者三枚胡餅也。況復佛祖本無空拳之誑。小兒也。黃葉黃金。隨宜授手。拈筋弄匙。無空度光陰也。

堂頭和尚慈誨云。吾見。偏在僧堂被位。晝夜不眠坐禪。得甚好。偏向後必聞美妙香氣。世間無比者也。此乃吉祥也。或見當面前如滴油落地者。祥瑞也。若發種種觸。亦乃祥瑞也。直須救頭然坐禪辨道。

堂頭和尚示云。世尊言。聞思猶如處門外。坐禪直乃歸家穩坐。所以坐禪乃至一須臾。一刹那。功德無量。我三十餘年。與時功夫辨道。未曾生退。今年六十五歲。至老彌堅。偏還如是辨道功夫。宛是佛祖金口之記也。

堂頭和尚慈誨云。坐禪時。莫倚壁及屏風禪椅等。若倚教。人生病也。直須正身端坐。如坐禪儀。慎莫違背。

堂頭和尚慈誨云。起從坐禪。欲經行者。不得邁步。直須直步。若二三十許步。欲迴必右迴。莫左迴。欲移步。先移右足。左足乃次。

堂頭和尚慈誨云。如來起從坐禪。而經行之跡。今現在于西天竺。鄢莫那國。淨名居士室。猶今現在。祇園精舍。礎石未泯。如是聖跡。若人到此度量之時。或脩或短。或延或促。未有其定。乃佛法之關。聒聒也。須知。今日東漸鉢盂。袈裟。拳頭。鼻孔。亦乃人之不可測度之者也。道元起座。速禮叩頭於地。歡喜落淚。

堂頭和尚慈誨云。大凡坐禪時。安心諸處。皆有定處。又坐禪時。安心於左掌上。乃佛祖正傳之法也。

堂頭和尚慈誨云。藥山高沙彌。不具比丘具足戒也。非不受佛祖正傳之佛戒也。然而搭僧伽梨衣。持鉢多羅器。是菩薩沙彌也。排列之時。依菩薩戒之臘。不依沙彌戒之臘也。此乃正傳之稟受也。偏有求法之志操。吾之



所懽喜也。洞宗之所託者。儼乃是也。

道元拜問。參學古今。佛祖之勝躅也。初心發明之時。雖似有道。集衆開法之時。如無佛法。又初發心時。雖似無所悟。開法演道之時。頗有超古之志氣。然則爲用初心得道。爲用後心得道耶。

堂頭和尚慈誨云。儼之所問。是世尊在世。菩薩聲聞。問於世尊之間也。所謂若法不增不減。云何得菩提。唯佛能爾。何關菩薩。是疑問也。又西天東地。古今正傳之指示有之。佛佛祖祖正傳云。不但初心。不離初心。爲甚。恁麼。若但初心得道。則菩薩初發心。便應是佛。是不可也。若無初心。云何得有第二第三心。第二第三法。然則後以初爲本。初以後爲期。今以現喻。喻此初後。譬如燈焦炷。非初不離初。非後不離後。不退不轉。非新非古。非自非他也。燈喻菩薩道。炷喻無明焰。恰如初心相應智慧。佛祖修習一行三昧。相應智慧。焦無明惑。非初非後。不離初後。乃佛祖正傳之宗旨也。

建長五年十二月十日。在於越前吉祥山永平寺方丈。而書寫之。右於先師遺書之中。在之。草始之。猶有餘殘歟。恨者不終功。悲淚千萬端。

懷奘

正安元年己亥十一月二十三日。於越州大野寶慶寺。初拜見之。開山存日。雖許之。于今延遲。今正是時也。而今得聖王醫中之明珠。大幸中之大幸也。懽喜千萬。感淚濕襟而已。

義雲

寶慶記終



## 傘松道詠

寛元三年九月二十五日初雪の一尺はかり降ける時  
長月の紅葉の上に雪ふりぬ見る人たれか言の葉のなき

寶治元年相州鎌倉にいまして最明寺道崇禪門の請  
によりて詠み給りける歌十首

### 教外別傳

あら磯の波もえよせぬ高岩に蠅もつくへきのりならはこそ

### 不立文字

いひ捨しその言の葉の外なれば筆にも跡をとゝめさりけり

### 正法眼藏

波もひき風もつなかね捨をふね月こそ夜半のさかりなりけれ

### 涅槃妙心

いつもたゝ我ふる里の花なれば色もかはらす過し春かな



本來面目

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり

即心即佛

かもめともをしともいまたみえわかす立る波間にうき沈むかな

應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たえてされとも道はわすれさりけり

父母所生身即證大覺位

尋ね入るみやまの奥のさとそもと我住馴し都なりける

盡十方界眞實人體

世中にまことの人やなかるらむかきりも見えぬ大空の色

靈雲見桃花

春風にほころひにけり桃の花枝葉にのこるうたかひもなし

鏡清雨滴聲

聞まゝにまた心なき身にしあればおのれなりけり軒の玉水

聲つから耳にきこゆる時しれは我か友ならんかたらひそなき

牛過窓櫺

世中はまとより出る牛の尾の引ぬにとまる心はかりそ

夢中說夢

本末もみな偽のつくも髪おもひ亂るゝ夢をこそとけ

十二時中不虛過

過來つる四十あまりは大空のうさぎからすの道にぞありける

誰とても日影の駒は嫌はぬを法の道うる人そすくなき

人しれすめてし心は世中のたゝ山かつのあきのゆうくれ

坐禪

守るとも思はずなから小山田のいたつらならぬかゝしなりけり

頂に鶺鴒の巢やつくるらん眉にかゝれるさゝかにの糸

濁りなき心の水にすむ月は波もくたけて光とそなる

この心天津空にも花そなふ三世の佛に奉らはや



禮拜

冬草も見えぬ雪野のしらさきはおのが姿に身をかくしけり

佛教

あなたふと七の佛の古言を學ふに六の道を越えけり  
嬉しくも釋迦の御法にあふひ艸かけても外の道を踏まめや

詠法華經

夜もすから終日になす法の道みなこの經の聲とこゝろと  
溪の響嶺に鳴く猿たえくゝにたゝこの經をとくとこそまけ  
此經の心を得れば世中のうりかふ聲も法をとくなり  
峯の色溪の響もみななから我釋迦牟尼の聲と姿と  
四つの馬三つの車にのらぬ人まことの道をいかでしらまし

草菴雜詠

とゝまらぬ日影の駒の行すゑにのりの道うる人そすくなき  
さなへとる夏のはしめの祈には廣瀬龍田の祭をそする

草の庵に立ちても居ても祈ること我より先に人をわたさむ  
おろかなる心ひとつの行末を六の道とや人のふむらん  
草の庵にねてもさめてもまをすと南無釋迦牟尼佛憐みたまへ  
山深み峯にも尾にも聲たてゝけふもくれぬと日くらしのなく  
我庵は越のしらやま冬こもり凍も雪も雲かゝりけり  
都には紅葉しぬらんおく山は夕へも今朝もあられ降りけり  
夏冬のさかひもわかぬ越のやま降るしら雪もなる雷も  
梓弓春の嵐に咲ぬらん峯にも尾にも花匂ひけり  
あし引の山鳥の尾の長さよのやみちへたてゝくらしけるかな  
頼みこし昔あるしやゆうたすきあはれをかけよ麻の袖にも  
梓弓はるくれはつるけふの日を引とゝめつゝをしみもやらむ  
徒に過す月日はおほけれと道をもとむる時そすくなき  
草の庵夏のはしめのころもかへすゝきすたれのかゝるはかりそ  
心とて人に見すへき色そなきたゝ露霜のむすふのみにて



いかなるか佛といひて人とゝはかひ屋かもとにつらゝいにけり  
こゝろなき草木も秋は凋むなり目に見たる人愁ひさらめや  
をやみなく雪はふりけり谷の戸に春來にけりと鶯のなく  
六の道遠近まよふともからは我父そかし我母そかし  
賤の男の垣ねに春の立しより古野に生ふる若菜をそつむ  
大空に心の月をながむるもやみにまよひて色にめてけり  
春風に我ことの葉のちりけるを花の歌とや人のみるらん  
愚なる我は佛にならずとも衆生を渡す僧の身ならん  
山のはのほのめくよひの月影に光もうすくとふほたるかな  
花紅葉冬の白雪見しこともおもへは悔し色にめてけり

越前路より都におもむきし時木芽山といふ所にて  
草の葉に首途せる身の木の目山雲に路ある心地こそすれ  
無常

朝日待つ草葉の露のほとなきにいそきなたちそ野邊の秋風

世中は何にたとへん水鳥のはしふる露にやとる月影

建長五年中秋

また見んとおもひし時の秋たにも今宵の月にねられやはする

傘松道詠終



# 正法眼藏隨聞記第一

侍者 懷 奘 編

一日示して云く。續高僧傳の中に。或る禪師の會下に一僧あり。金像の佛と亦佛舍利とをあがめ用ゐて。衆寮等にありても。常に燒香禮拜し。恭敬供養しき。或る時禪師の云く。汝が崇むる所の佛像舍利は。後には汝がために不是あらんと。其の僧うけがはず。師云く。是れ天魔波旬の作す所なり。早く是れを棄つべし。其の僧憤然として出てぬれば。師すなはち僧の後に云ひ懸けて云く。汝箱を開いて是れを見るべし。其の僧いかりながら是れを開いてみれば。毒蛇わだかまりて臥せりと。是れを以て思ふに。佛像舍利は如來の遺像遺骨なれば。恭敬すべしといへども。また偏に是れを仰いて得悟すべしと思はゞ。還て邪見なり。天魔毒蛇の所領となる因縁なり。佛説の功德は定まれる事なれば。人天の福分となること。生身と等しかるべし。總じて三寶の境界を恭敬供養すれば。罪滅び功德を得。また惡趣の業



をも消し人天の果をも感ずることは實なり。是れによりて法の悟を得んと思ふは僻見なり。佛子と云ふは佛教に順じて直に佛位に到る爲めなれば。只教に随ひて工夫辨道すべきなり。其の教に順ずる實の行と云ふは。即ち今の叢林の宗とする只管打坐なり。是れ思ふべし。

亦云く。戒行持齋を守護すべければとて。強ひて宗として是れを修行に立て。是れによりて得道すべしと思ふも亦これ非なり。只是れ納僧の行履佛子の家風なれば随ひ行ふなり。是れを能事と云へばとて。必ずしも宗とすることなかれ。然あればとて。破戒放逸なれと云ふには非ず。若し亦かの如く執せば邪見なり。外道なり。只佛家の儀式叢林の家風なれば随順しゆくなり。是れを宗とする事。宋土の寺院に寓せし時に衆僧にも見え來らず。實の得道のためには。唯坐禪工夫佛祖の相傳なり。是れによりて一門の同學。五眼房故葉上僧正の弟子が。唐土の禪院にて持齋をかたく守りて。戒經を終日誦せ

しをば教へて捨てしめたりしなり。

懷奘問うて云く。叢林學道の儀式は百丈の清規を守るべきか。然あれば彼れはじめに受戒護戒を以て先きとすと見えたり。亦今の傳來相承は根本戒をさづく見えたり。當家の口訣面授にも。西來相傳の戒を學人にさづく。是れ便ち今の菩薩戒なり。然あるに今の戒經に日夜に是れを誦せよと云へり。何ぞ是れを誦ずるを捨てしむるや。

師云く。しかなり。學人最も百丈の規繩を守るべし。然あるに其の儀式は受戒護戒坐禪等なり。晝夜に戒經を誦し。専ら戒を護持すと云ふは。古人の行履に随ひて。祇管打坐すべきなり。坐禪の時何れの戒か持たざる。何れの功德か來らざる。古人行じおける所の行履皆深き心なり。私の意樂を存せずして。衆に随ひ古人の行履に任せて行じゆくべきなり。

或る時示して云く。佛照禪師の會下に一僧ありて。病患のとき肉食



を思ふ。照是れを許して食せしむ。ある夜自ら延壽堂に行きて見たまへば。燈火幽にして。病僧亦肉を食す。時に一鬼。病僧の頭の上のりゐて。件の肉を食す。僧は我が口に入ると思へども。我れは食せずして。頭上の鬼が食するなり。然しより後は。病僧の肉食を好むをば。鬼に領せられたりと知りて。是れを許しきと。是れについて思ふに。許すべきか。許すべからざるか。斟酌あるべし。五祖演の會にも肉食のことあり。許すも制するも。古人の心皆其の意趣あるべきなり。一日示して云く。人其の家に生れ。其の道に入らば。先づ其の家業を修すべしと知るべきなり。我が道にあらず。己が分にあらざらんことを知り。修するは即ち非なり。今も出家人として。便ち佛家に入り。僧侶とならば。須く其の業を習ふべし。其の業を習ひ。其の儀を守る。と云ふは。我執をすて。知識の教に隨ふなり。其の大意は。貪欲無きなり。貪欲なからんと思は。先づ須く吾我を離るべきなり。吾我を離るゝには。無常を觀ずる。是れ第一の用心なり。世人多く我れはも

とより。人にもよしと云はれ。思はれんと思ふなり。然あれども。よくも云はれ。思はれざるなり。次第に我執を捨て。知識の言に隨ひゆけば。精進するなり。理をば心得たるやうに云うて。さはさにあれども。我れは其の事を捨てゑぬと云うて。執し好み修するは。彌よ沈淪するなり。禪僧のよくなる第一の用心は。只管打坐すべきなり。利鈍賢愚を論ぜず。坐禪すれば自然によくなるなり。

示して云く。廣學博覽は。かなふべからざることなり。一向に思ひ切りて止むべし。唯一事について。用心故實をも習ひ。先達の行履をも尋ねて。一行を専らはげみて。人師先達の氣色すまじきなり。

或る時。契問うて云く。如何是不昧因果底道理。師云く。不動因果なり。云く。なんとしてか脱落せん。師云く。因果歷然なり。云く。かくの如くならば。因果を引き起すや。師云く。總べてかくの如くならば。かの南泉の猫兒を斬るがごとき。大衆既に道ひ得ず。便ち猫兒を斬卻しを。はりぬ。後に趙州頭に草鞋を戴きて出でたりし。亦一段の儀式なり。



亦云く。我れ若し南泉なりせば即ち云ふべし。道ひ得たりとも便ち斬卻せん。道ひ得ずとも便ち斬卻せん。何人か猫兒をあらそふ。何人か猫兒を救ふと。大衆に代つて云はん。既に道ひ得ず。和尚猫兒を斬卻せよと。亦大衆に代つて云はん。和尚只一刀兩段を知りて。一刀一段を知らずと。樊云く。如何是一刀一段。師云く。猫兒是亦云く。大衆不對の時。我れ南泉なれば。大衆既に道不得と云うて。便ち猫兒を放下してまじ。古人の云く。大用現前して軌則を存せずと。亦云く。今の斬猫は。是れ便ち佛法の大用現前なり。或は一轉語なり。若し一轉語にあらずば。山河大地妙淨明心と云ふべからず。亦即心是佛とも云ふべからず。便ち此の一轉語の言下にて。猫兒即佛身と見よ。亦此の詞を聽いて。學人も頓に悟入すべし。亦云く。此斬猫兒即是佛行なり。喚んで何とか云ふべき。云く。喚んで斬猫と云ふべし。樊云く。是れ罪相なりや否や。云く。罪相なり。樊云く。なにしてか脱落せん。云く。別別無見なり。云く。別解脱戒とはかくの如きを云ふか。云く。然り。亦云く。

たゞしかくの如きの料簡。たとひ好事なりとも無からんにはしかじ。樊問うて云く。犯戒の語は。受戒已後の所犯を云ふか。唯亦未受已前の罪相をも犯戒と云ふべきか。如何。

師答へて云く。犯戒の名は。受後の所犯を云ふべし。未受已前所作の罪相をば。只罪相罪業と云うて。犯戒と云ふべからず。

問うて云く。四十八輕戒の中に。未受戒の所犯を犯と名くと見ゆ。如何。

答へて云く。然らず。彼れは未受戒の者。今受戒せんとする時。所造のつみを懺悔するに。今の戒にのぞめて。前に十戒等を授かりて犯し。後亦輕戒を犯するをも犯戒と云ふなり。以前所造の罪を。犯戒と云ふにはあらず。

問うて云く。今受戒せんとする時。前に造りし所の罪を懺悔せんが爲めに。未受戒の者に十重四十八輕戒を教へて讀誦せしむべしと見えたり。亦下の文に。未受戒の前にして説戒すべからずと。此の二



處の相違如何。

答へて云く。受戒と誦戒とは別なり。懺悔のために戒經を誦するは猶ほ是れ念經なり。故に未受者戒經を誦せんとす。彼れが爲めに戒經を説かんこと。咎あるべからず。下の文に。利養の爲めのゆゑに。未受戒の前にして是れを説くことを制するなり。今受戒の者に懺悔せしめん爲めには。最も是れを教ふべし。

問うて云く。受戒の時は。七逆の受戒を許さず。先の戒の中には。逆罪も懺悔すべしと見ゆ。如何。

答へて云く。實に懺悔すべし。受戒の時許さざることは。且く抑止門とて。抑ゆる義なり。亦上の文は。破戒なりとも還得受せば清淨なるべし。懺悔すれば清淨なり。未受に同じからず。

問うて云く。七逆すでに懺悔を許さば。亦受戒すべきか。如何。

答へて云く。然り。故僧正自ら所立の義なり。既に懺悔を許す。亦是れ受戒すべし。逆罪なりとも悔いて。受戒せば授くべし。況や菩薩は。た

とひ自身は破戒の罪を受くとも。他の爲めには受戒せしむべきなり。

夜話に云く。惡口を以て僧を呵嘖し。毀譽すること莫かれ。設ひ惡人不當なりとも。左右なく惡み毀ることなかれ。先づいかにわるしと云ふとも。四人已上集會しぬれば。これ僧體にて國の重寶なり。最も歸敬すべきものなり。若くは住持長老にてもあれ。若くは師匠知識にてもあれ。弟子不當ならば。慈悲心老婆心にて教訓誘引すべし。其の時設ひ打つべきをば打ち。呵嘖すべきをば呵嘖すとも。毀譽謗言の心を發すべからず。先師天童淨和尚住持のとき。僧堂にて衆僧坐禪の時。眠を誡むるに。腹を以て打ち。謗言呵嘖せしかども。衆僧皆打たるゝを喜び讚歎しき。或る時亦上堂の次に云く。我れ既に老後。今は衆を辭し菴に住して。老を扶けて居るべけれども。衆の知識として。各の迷を破り。道を授けんがために住持人たり。是れに依りて。或は呵嘖の詞を出だし。竹篋打擲等のことを行ず。是れ頗る怖れあり。



然あれども佛に代て化儀を揚る式なり。諸兄弟慈悲を以て是れを許し給へと言へば。衆僧皆流涕しき。此くの如きの心を以てこそ衆をも接し化をも宣ふべけれ。住持長老なればとて。亂りに衆を領し我が物に思うて。呵噴するは非なり。況や其の人にあらざして。人の短處を云ひ。他の非を謗るは非なり。能くく用心すべきなり。他の非を見て。悪しと思うて。慈悲を以て化せんと思は。腹立まじきやうに方便して。傍ら事を云ふやうにて。こしらふべきなり。亦物語に云く。故鎌倉の右大將。始め兵衛佐にて有りし時。内裡の邊に。一口はれの會に出仕の時。一人の不當人ありき。其の時の大納言。おほせて云く。是れを制すべしと。大將の云く。六波羅に仰せらるべし。平家の將軍なりと。大納言の云く。近か近かなればなりと。大將の云く。其の人に非ずと。是れ美言なり。此の心にて。後には世をも治められしなり。今の學人も其の心あるべし。其の人にあらざして。人を呵すること莫かれ。

夜話に云く。昔魯仲連と云ふ將軍ありき。平原君が國に在りて。能く朝敵をたひらぐ。平原君賞して。數多の金銀等を與へしかば。魯仲連辭して云く。只た將軍のみちなれば。敵を能く討つのみなり。賞を得て物をとらん爲めに非ずと云ひて。敢て取らずと云ふ。魯仲連が廉直とて名譽のことなり。俗猶ほ賢なるは我れ其の人として。其の道の能をなすばかりなり。かはりを得んと思はず。學人の用心もかくの如くなるべし。佛道に入り。佛法の爲めに諸事を行じて。代りに所得あらんと思ふべからず。内外の諸教に皆無所得なれとのみ勸むるなり。

法談の次に示して云く。設使我れは道理を以て云ふに。人はひがみて。僻事を云ふを理を攻めて云ひ。勝つはあしきなり。亦我れは現に道理と思へども。吾が非にこそと云うて。はやくまけてのくもあればやなり。只人をも云ひ折らず。我が僻ことにも謂はず。無爲にして止みぬるが好きなり。耳に聴き入れぬやうにして忘るれば。人も忘



れて嗔らざるなり。第一の用心なり。

示して云く。無常迅速なり。生死事大なり。且つ存命の際。業を修し學を好まば。只佛道を行じ佛法を學すべきなり。文筆詩歌等。其の詮なき事なれば。捨つべき道理なり。佛法を學し佛道を修するにも。猶ほ多般を兼學すべからず。況や教家の顯密の聖教。一向にさしかくべきなり。佛祖の言語すら。多般を好み學すべからず。一事を専らにせんすら。鈍根劣器の者は。かなふべからず。況や多事を兼ねて。心操をととのへざらんは。不可なり。

示して云く。昔智覺禪師と云ひし人の發心出家のこと。此の師は初めは官人なり。才幹に富み。正直の賢人なり。國司たりし時。官錢をぬすみて施行す。傍人は是れを帝に奏す。帝聞いて大いに驚怪す。諸臣も皆あやしむ。罪過すてに輕からず。死罪におこなはるべしと定まりぬ。爰に帝議して云く。此の臣は才人なり。賢者なり。今ことさらに此の罪を犯す。若し深き心あるか。頸を截らんとし。悲み愁ひたる氣色

あらば。速に截るべし。若し其の氣色なくんば。定めて深き心あらん。截るべからずと。敕使引き去りて截らんとする時。少しも愁ふる氣色なし。還りて喜ぶ氣色あり。自ら云く。今生の命は一切衆生に施すと。敕使驚き怪みて。帝に奏聞す。帝云く。然り。定めて深き心有らん。此の事あるべしと。兼ねて是れを知ると。依りて其の志を問ふ。師云く。官を辭して。命を捨て施を行じて。衆生に縁を結び。生を佛家に受けて。一向に佛道を行ぜんと。思ふと。帝是れを感じて許して出家せしむ。故に延壽と名を賜ふ。殺すべきをとどむる故なり。今の衲子も。是れほどの心を一度發すべきなり。命を輕んじ。衆生を憐む心深くして。身を佛制に任ぜんと。思ふ心を發すべし。若し先きより此の心一念も有らば。失はじと保つべし。是れほどの心一度おこさずして。佛法を悟ること。有るべからざるなり。

夜話に云く。祖席に禪話をこゝろえる故實は。我が本より知り思ふ心。次第次第に知識の詞に隨ひて改めもて行くなり。假令佛と云ふ



は。我が本より知りたりつるやうは。相好光明具足し。說法利生の徳ありし釋迦彌陀等を佛と知りたりとも。知識若し佛と云ふは。蝦蟇蚯蚓ぞと云は。蝦蟇蚯蚓を是れぞ佛と信じて。日比の知解を捨つべきなり。此の蚯蚓の上に佛の相好光明種種の佛の所具の徳を求むるも。猶ほ情見あらたまらざるなり。只當時の見ゆる處を佛と知るなり。若し此くの如く詞に隨ひて情見本執をあらためて行かば。自ら契ふ處あるべきなり。然あるに近代の學者。自らの情見を執し。己見を本として。佛とはかうこそあるべけれと思ひ。亦吾が存ずるやうに差へば。さはあるまじいなど。云うて。自らが情量に似たることやあらんと迷ひありくほどに。大方佛道の精進なきなり。亦身を惜まずして。百尺の竿頭に上りて。手足を放て。一步を進めよと云ふ時は。命ありてこそ佛道も學すべけれと云うて。眞實に知識に隨順せざるなり。能くく。思量すべきなり。

夜話に云く。世間の人も衆事を兼學して。いづれも能くせざらんよ

りは。只一事を能くして。人前にしても。しつべきほどに學すべきなり。況や出世の佛法は。無始より以來修習せざる法なり。故に今もうとし。我か性も拙し。高廣なる佛法に。ことの多般を兼ぬれば。一事をも成すべからず。一事を専らにせんすら。本性味劣の根器。今生に窮め難し。拏力學人一事を専らにすべし。

契問うて云く。若し然らば。何ごといかなる行か。佛法に専ら好み修すべき。師云く。機に隨ひ根に順ふべしといへども。今祖席に相傳して。専らする所は坐禪なり。此の行能く衆機を兼ね。上中下根ひとしく修し得べき法なり。我れ大宋天童先師の會下にして。此の道理を聞いて後。晝夜に定坐して。極熱極寒には發病しつべしとて。諸僧しばらく放下しき。我れ其の時自ら思はく。設ひ發病して死すべくとも。猶ほ只是れを修すべし。病無うして修せず。此の身をいたはり用ゐてなんの用ぞ。病ひして死せば本意なり。大宋國の善知識の會下にて。修し死に死して。よき僧にさばくられたらんは。先づ勝縁なり。



日本にて死せば是れほどの人に如法佛家の儀式にて沙汰すべからず修行していまだ契悟せざらん先に死せば結縁として生を佛家に受くべし修行せずして身を久く持ちても詮無きなり。なんの用ぞ。況や身を全うし病起らじと思はんほどに知らず亦海にも入り横死にもあはん時は後悔いかん。此くの如く案じつゞけて思ひ切りて晝夜端坐せしに一切に病發らず。今各も一向に思ひきりて修して見よ。十人は十人ながら得道すべきなり。先師天童の勸めかくの如し。

示して云く。人は思ひ切りて命をも棄て。身肉手足をも截ることは中々せらるゝなり。然あれば世間の事を思ふに。名利執心の爲めにも多くかくの如く思ひ切るなり。只依り來る時に事に觸れ物に隨ひて心品を調ふること難きなり。學者身命を捨てると思うて且くおしゝづめて云ふべきことをも修すべきことをも。道理に順ずるか順ぜざるかと案じて。道理に順せば云ひ若くは行じもすべきな

り。示して云く。學道の人衣糧を煩ふこと莫かれ。只佛制を守りて世事を營むこと莫かれ。佛の言く。衣服に糞掃衣あり。食に常乞食あり。いづれの世にか此の二事の盡くること有らん。無常迅速なるを忘れて徒らに世事に煩ふこと莫かれ。露命の且く存せるあひだ。佛道を思うて餘事をことゝすること莫かれ。

或人問うて云く。名利の二道は捨離し難しといへども。行道の大いなる礙りなれば捨てずんばあるべからず。故に是れを捨つ。衣糧の二事は小縁なりといへども。行者の大事なり。糞掃衣常乞食は是れ上根の所行。亦是れ西天の風流なり。神丹の叢林には常住物等あり。故に其の煩ひ無し。我が國の寺院には常住物なし。乞食の儀も即ち絶えて傳はらず。下根不堪の身いかゞせん。然あれば予が如きは檀信の信施を貪らんとするも。虚受の罪隨ひ來る。田商土工を營むは是れ邪命食なり。只天運に任せんとすれば。果報亦貧道なり。飢寒來らん時。是れを愁ひとして行道を礙へつべし。或る人諫めて云く。備



が行儀はなはだし。時を知らず。機をかへりみざるに似たり。下根なり。末世なり。かくの如く修行せば。亦退轉の因縁となりぬべし。或は一檀那をも相かたらひ。若くは一外護をもちぎりて。閑居靜處にして。一身をたすけて。衣糧に煩ふこと無く。靜に佛道を行すべし。是れ便ち財物等を貪るに非ず。暫時の活計を具して修行すべしと。此の詞を聞くといへども。いまだ信用せず。かくの如きの用心いかん。答へて云く。但夫れ衲子の行履。佛祖の家風を學ぶべし。三國ことなりといへども。眞實學道の者。いまだ此くの如きの事あらず。只心を世事に執着すること莫かれ。一向に道を學すべきなり。佛の言く。衣鉢の外は寸分も貯へざれ。乞食の餘分は飢ゑたる衆生に施せ。設ひ受け來るとも寸分も貯ふべからず。況や馳走あらんや。外典に云く。朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと。設ひ飢ゑ死に寒え死にすとも。一日一時なりとも佛教に隨ふべし。萬劫千生幾回か生じ幾度か死せん。皆是れ世縁妄執の故なり。今生一度佛制に隨ひて餓死せ

ん。是れ永劫の安樂なるべし。いかに況や未だ一大藏經の中にも三國傳來の佛祖。一人も飢ゑ死にし。寒え死にしたる人ありときかず。世間衣糧の資具は。生得の命分ありて。求めに依りても來らず。求めざれども來らざるにも非ず。只任運にして心に挟むこと莫かれ。末法なりと謂うて。今生に道心發さずば。何れの生にか得道せん。設ひ空生迦葉の如くにあらずとも。只隨分に學道すべきなり。外典に云く。西施毛嬙にあらざれども。色を好む者は色を好む。飛兔綠耳にあらざれども。馬を好む者は馬を好む。龍肝鳳髓にあらざれども。味を好む者は味を好む。只隨分の賢を用ゐるのみなり。俗なほ此の儀あり。佛家亦かくの如くなるべし。況や亦佛二十年の福分を以て。末法の我らに施す。是れに依りて。天下の叢林。人天の供養絶えず。如來神通の福德自在なるも。馬麥を食して夏を過ごしましき。末法の弟子豈に是れを慕はざらんや。問うて云く。破戒にして虚しく人天の供養を受け。無道心にして徒



らに如來の福分を費やさんより。在家人に隨うて在家の事をなして。命ながらへて能く修道せんこと如何。

答へて云く。誰か云ひし破戒無道心なれと。只強ひて道心を發し。佛法を行すべきなり。いかに況や持戒破戒を論ぜず。初心後心を分たず。齊しく如來の福分を與ふとは見えたれども。破戒ならば還俗すべし。無道心ならば修行せざれとは見えず。誰人か初めより道心ある。只かくの如く發し難きを發し。行じがたきを行ずれば。自然に増進するなり。人々皆佛性あり。徒らに卑下すること莫かれ。亦文選に云く。一國爲一人興。先賢爲後愚廢と言ふこゝろは。國に賢者一人出來れば其の國興る。愚人ひとり出來れば先賢のあと廢るゝなり。是れを思ふべし。

雑話の次に云く。世間の男女老少多く交會姪色等の事を談ず。是れを以て心を慰むるとし。興言とすることあり。一旦意をも遊戯し。徒然も慰むるに似たりといふとも。僧はもつとも禁斷すべきことな

り。俗猶ほよき人。まことしき人の禮儀をも存じ。げにげにしき談の時。出來らざることなり。只亂醉放逸なる時の談なり。況や僧は専ら佛道を思ふべし。雑話は希有異體の亂僧の云ふことなり。宋土の寺院などには。都べて雑談をせざれば。其のやうなることをも云はざるなり。吾が國も近ごろ建仁寺の僧正存生の時は。一向あからさまにも此くの如きの言語出來らず。滅後にも。在世の時の門弟子等。少々残りといふまじりたりし時は。一切に云はざりき。近ごろ此の七八年より以來。今出の若き人たち時々談ずるなり。存外の次第なり。聖教の中にも。龐強惡業。令人覺悟。無利言說。能障正道とありて。只うち出して云ふ所の言葉すら。無利の言說は障道の因縁なり。況やかくの如きの言語は。ことばに引かれて。即ち心も起りつべし。最も川心すべきなり。故らにかくなん云はじとせずとも。惡しきことゝ知りなば。漸々に對治すべきなり。

夜話に云く。世人多く善事を作す時は。人に知られんと思ひ。惡事を



作す時は人に知れじと思ふに依りて。此の心冥衆の心に合はざるに依りて。所作の善事には感應なく。密に作す所の悪事には罰あるなり。是れによりて。還りて自ら謂く。善事には驗なし。佛法の利益すくなしと思へるなり。是れ即ち邪見なり。最も改むべし。人も知らざる時に密に善事をなし。悪事を錯りて。後には發露して。とがを悔ゆ。かくの如くすれば。便ち密々になす所の善事には感應あり。露るゝ悪事は。懺悔せられて罪滅する故に。自然に現益もあるなり。當果をも亦知るべし。

爰に或る在家人來りて。問うて云く。近代在家人。衆僧を供養し。佛法を歸敬するに。多く不吉のこと出來るに依つて。邪見起り。三寶に歸せじと思ふ。いかんと。

答へて云く。是れは衆僧佛法の咎にはあらず。便ち在家人自らの錯なり。其の故は。假令人目ばかりに持戒持齋の僧をば貴び供養し。破戒無慚の飲酒食肉等するをば不當なりと思つて。供養せず。此の差別の心。寔に佛意にそむけり。故に歸敬の功もむなし。感應もなきなり。戒の中にも處々に此の心を誡めたり。僧ならば。徳の有無を擇らばず。只供養すべきなり。殊に其の外相を以て。内徳の有無を決定すべからず。末世の比丘いさゝか外相尋常ならぬ處見ゆれども。亦是れにまされる悪心も悪事もあるなり。然る間よき僧あしき僧を差別し。思ふこと無うして。佛弟子なれば。貴びて。平常の心にて。供養歸敬もせば。必ず佛意に契うて。利益もひろかるべし。亦冥機冥應顯機顯應等の四句あることを思ふべし。亦現生後報等の三時業のこともあり。是れらの道理。能くく學すべきなり。

夜話に云く。若し人來りて用事を云ふ中に。或は人にもものをこひ。或は訴訟等のことをも云はんとて。一通の狀をも所望すること出て來ること有らんに。其の時我れは非人なり。遁世籠居の身なれば。在家等の人に非分のことを云はんは非なりとて。眼前の人の所望をかなへずば。實に非人の法には似たれども。其の心中をさぐるに。猶



ほ我れは遁世非人なり。非分のことを人に云は、人定めてわらく思ひけんと云ふ道理を思うて聽かずんば、なほ是れ我執名聞なり。只其の時に臨んで能く、思量して眼前の人の爲めに一分の利益となるべき事をば、人のあしく思はんことをも願はずすべきなり。此のこと非分なり。わるとして疎みもし中をもたがはんも、かくの如くの不覺の知音、中たがはん事何か苦しかるべき。外には非分の僻事をする。人に見ゆるとも。内には我執を破り、名聞を捨つる第一の用心なり。佛菩薩は人の來りて請ふときは、身肉手足をも截れり。況や人來りて一通の狀をこはん。に名聞計りを思うて、其の事を聞かぬは、是れ我執深きなり。人人ひじりならず、非分の事を云ふ人かなと。所詮なく思ふとも。我れは名聞をすて、一分の人の利益とならば、眞實の道に相應すべきなり。古人も其の義あるかと思ふこと多し。我れも其の義を思うて、少々檀那知音の思ひかけざる事を人に申し傳へて給はれと云ふ事は、文一通遣りて、一分の

利益を作すは易きことなり。

柴問うて云く。此のこと寔に然り。たゞし善事にて人の利益とならんことを。人にも云ひ傳へんは最もなるべし。若し僻事を以て人の所帶を取らんと思ひ。或は人の爲めにあしき事を云はんをば、云ひ傳ふべきや。如何ん。

師云く。理非等のことは。我が知るべきに非ず。只一通の狀を乞へば。與ふれども。理非に任せて沙汰あるべき由をこそ人にも云ひ。狀にも載すべけれ。請け取りて沙汰せん人こそ。理非をば明らむべけれ。吾が分上にあらぬ。此くの如きことを理を枉げて。その人に云はんことも亦非なり。亦現の僻事なれども。我れを大事にも思ふ人にて。此の人の云はんことは善惡たがへじと思ふほどの知音ありて。檀那の處へ。ひがことを以て不得心の所望をなさば。其れを只今その人より所望のことを一往聞くと。彼の狀には去り難く申せば。申すばかりなり。道理に任せて沙汰あるべしと書くべきなり。一切



に是なれば。彼れも是れも遺恨あるべからざるなり。此くの如くのこと。人に對面をもし。出來ることにつきて。能くく。思量すべきなり。所詮は事に觸れて名聞我執を捨つべきなり。夜話に云く。今世出世間の人。多分は善事をなしては。かまへて人に知られんと思ひ。惡事を作しては人に知られじと思ふ。是れに依りて。内外相應のこと出來たる。あひかまへて内外相應し。錯りを悔い。實徳をかくして外相をかざらず。好事をば他人にゆづり。惡事をば己れにむかふる志氣あるべきなり。

問うて云く。實徳を藏し。外相を飾らざらんこと。寔に然るべし。但し佛菩薩は大悲利生を以て本とす。無智の道俗等。外相の不善を見て。是れを誇り難せば。謗僧の罪を感じん。實徳を知らずとも。外相を見て。貴び供養せば。一分の福分たるべし。是れらの斟酌いかなるべきぞ。

答へて云く。外相を飾らずとて。即ち放逸ならば。亦是れ道理に差ふ。

實徳を藏すと云うて。在家等の前にて惡行を現ぜん。亦是れ破戒の甚しきなり。只希有の道心者。道者の由を人に知られんと思ひ。身にある失を人に知られじと思へども。諸天善神及び三寶の冥に知見する所なり。夫れをば愧ぢずして。世人に貴びられんと思ふ意を。誠むるなり。只時にのぞみ。事に觸れて。興法の爲め利生の爲めに。諸事を斟酌すべきなり。擬して後に云ひ。思うて後に行じて。卒業なること莫かれとなり。一切のこと。にのぞんで。道理を案すべきなり。念々止まらず。日々遷流して。無常迅速なること。眼前の道理なり。知識經卷の教を待つべからず。只念々に明日を期することなく。當日當時ばかりを思うて。後日は太だ不定なり。知り難ければ。只今日ばかり。存命のほど佛道に隨はんと。思ふべきなり。佛道に隨ふと云ふは。興法利生の爲めに。身命を捨て。諸事を行じもて。ゆくなり。問うて曰く。佛敎のすゝめに隨は。乞食等を行すべきか。如何。答ふ。然あるべし。たゞ是れは土風に隨ひて。斟酌あるべし。なに、



ても利生も廣く。我が行もすゝまなかたにつくべきなり。是れらの作法。道路不淨にして。佛衣を着して。經行せば。けがれつべし。亦人民貧窮にして。次第乞食もかなふべからず。行道も退きつべく。利益も廣からざらんか。只土風をまもり。尋常に佛道を行じ居たらば。上下の輩自ら供養を作し。自行化他成就せん。此くの如きの事も。時に臨み事に觸れて。道理を思量して。人目を思はず。自らの益を忘れて。佛道利生の爲めに。能きやうに計らふべし。

示して云く。學道の人。世情を捨つべきについて。重々の用心あるべし。世をすて。家をすて。身をすて。心を捨つるなり。能くく。思量すべきなり。世を遁れて。山林に隱居すれども。吾が重代の家を絶やさず。家門親族のことを思ふもあり。亦世をものがれ。家をもすて。親族境界をも遠離すれども。我が身を思うて。苦しからんことをばせじ。病起るべからん事は。佛道なりとも行ぜしと思ふも。いまだ身を捨てざるなり。亦身をも惜まず。難行苦行すれども。心佛道に入らずし

て。我が心にも差ふことをば。佛道なれどもせじと思ふは。心を捨てざるなり。

正法眼藏隨聞記第一終



# 正法眼藏隨聞記第二

侍者 懷奘 編

示して云く。行者先づ心をだにも調伏しつれば。身をも世をも捨つることは易きなり。只言語につけ。行儀につけて。人目を思ひて。此の事は悪事なれば。人あしく思ふべしとて。なさず。我れ此の事をせんこそ。佛法者と人は見んとて。事に觸れて善きことをせんとするも。猶ほ世情なり。然あればとて。亦恣に我が心に任せて悪事をするは。一向の悪人なり。所詮悪心を忘れ。我が身を忘れて。只一向に佛法の爲めにすべきなり。向ひ來らんとに隨ひて用心すべきなり。初心の行者は。先づ世情なりとも。人情なりとも。悪事をば心に制し。善事をば身に行ずるが。便ち身心を捨つるにて有るなり。示して云く。故僧正建仁寺におはせし時。一人の貧人來りて云く。我が家貧うして。絶煙數日におよぶ。夫婦子息兩三人餓死しなんとす。慈悲を以て是れを救ひ給へと云ふ。其の時。房中に都て衣食財物等

無し。思慮をめぐらすに。計畧つきぬ。時に藥師の像を造らんとて。光の料に打ちのべたる銅少分ありき。是れを取りて自ら打ちをり。束ねまるめて。彼の貧客にあたへて云く。是れを以て食物にかへて。餓をふさぐべしと。彼の俗よるこんで退出しぬ。時に門弟子等難じて云く。正しく是れ佛像の光なり。これを以て俗人に與ふ。佛物已用の罪如何。僧正の云く。誠に然り。但し佛意を思ふに。佛は身肉手足を割きて衆生に施せり。現に餓死すべき衆生には。設ひ佛の全體を以て與ふるとも。佛意に合ふべし。亦云く。我れは此の罪に依りて。惡趣に墮すべくとも。只衆生の飢を救ふべしと云云。先達の心中のたけ。今の學人も思ふべし。忘るゝこと莫かれ。

亦或る時。僧正の門弟の僧等の云く。今の建仁寺の寺屋敷。川原に近し。後代に水難ありぬべしと。僧正の云く。我れ寺の後代の亡失。是れを思ふべからず。西天の祇園精舍も。いしずるばかりとどまれり。然あれども。寺院建立の功德失すべからず。亦當時一年半年の行道。其



の功德莫大なるべしと。今是れを思ふに。寺院の建立。寔に一期の大  
事なれば。未來際をも兼ねて難無きやうにとこそ思ふべけれども。  
さる心中にも亦此くの如きの道理存せられたる心のたけ。寔に是  
れを思ふべし。

夜話に云く。唐の太宗の時。魏徵奏して云く。土民等帝を謗すること  
ありと。帝云く。寡人仁ありて。人に謗せられれば。愁とすべからず。仁無  
うして。人に讃せられれば。是れを愁ふべしと。俗猶ほかくの如し。僧は  
最も此の心あるべし。慈悲あり道心ありて。愚癡人に誹謗せられん  
は。苦しかるべからず。無道心にて。人に有道と思はれん。是れを能く  
くつゝしむべし。

亦示して云く。隋の文帝の云く。密々に徳を修して飽けるをまつ。言  
ふ心は。よき道德を修して。あけるをまちて民をいつくしうすると  
なり。僧猶ほ是れに及ばずんば。もつとも用心すべきなり。只内に道  
業を修すれば。自然に道德外にあらはれて。人に知れんことを期せ

ず。のぞまずして。只もつはら佛教にしたがひ。祖道に随ひゆけば。人  
自ら道德に歸するなり。こゝに學人の錯り出て來るやうは。人にた  
つとばれ。財寶いで來るを以つて。道德のあらはれたると自らも思  
ひ。人も知り思ふなり。是れ即ち天魔波旬のつきたると心にしりて。  
最も思量すべし。教の中には是れは魔の所爲と云ふなり。いまだ聞か  
ず。三國の例。財寶にとみ。愚人の歸敬をもつて。道德とすべきことを。  
道心者と云ふは。昔より三國みな貧にして。身をくるしくし。一切を  
省約して。慈あり道あるをまことの行者と云ふなり。徳のあらはる  
ゝと云ふも。財寶にゆたかに。供養にほこるを云ふに。あらず。徳の顯  
はるゝに三重あるべし。先づは其の人。其の道を修むるなりと知ら  
るゝなり。次には其の道を慕ふ者いで來る。後には其の道をおなじ  
く學し。同じく行ずる。是れを道德のあらはるゝと云ふなり。  
夜話に云く。學道の人。人情を棄つべきなり。人情をすつると云ふ  
は。佛法に随ひ行くなり。世人おほく小乘根性にて。善惡をわきまへ。



是非を分ちて。是をとり非をすつるは。みな是れ小乘根性なり。只先づ世情をすて、佛道に入るべし。佛道に入るには。我がこゝろに善悪を分けて。よしと思ひ。あしゝと思ふことをすて、我が身よからん。我が意なにとあらんと思ふ心をわすれて。善くもあれ。悪しくもあれ。佛祖の言語行履に随ひゆくなり。吾が心に善しと思ひ。亦世人のよしと思ふこと。必ずしも善からず。然あれば人めもわすれ。吾が意をもすて、佛教に随ひゆくなり。身もくるしく。心も愁ふるとも。我が身心をば一向にすてたるものなればと思うて。苦しくうれひつべきことなりとも。佛祖先徳の行履ならばなすべきなり。此の事はよきこと。佛道にかなひたらめと思うて。なしたく。行じたくとも。もし佛祖の行履に無からん事はなすべからず。是れ必ず法門をもよくこゝろえたるにてあるなり。吾が心にも亦本より習ひ來たる法門の思量をば棄て、只今見る所の祖師の言語行履に次第に心を移しもてゆくなり。かくのごとくすれば。智慧もすゝみ。悟も開く

るなり。本より學せし所の教家文字の功もすつべき道理あらば棄て、今の義につきて見るべきなり。法門を學する事は。本より出離得道のためなり。我が所學多年の功つめり。なんぞたやすく捨てんと。猶ほ心深く思ふ。即ち此の心を生死繫縛の心と云ふなり。能くく思量すべし。

夜話に云く。故建仁寺僧正の傳をば顯兼中納言入道の書かれたるなり。其の時辭することばに云く。儒者に書かせらるべきなり。そのゆゑは。儒者はもとより身をわすれて。幼き時より長となるまで學問を本とす。故にかき出したるものに誤り無きなり。直の人は。身の出仕交衆を本として。かたはらことに學問をもするあひだ。自ら好人あれども。文筆のみちにも誤り出て來るなりと。是れを思ふに。昔の人は。外典の學問も。身をわすれて學するなり。

亦云く。故公胤僧正の云く。道心と云ふは。一念三千の法門などを。胸の中に學し入れてもちたるを。道心と云ふなり。なにと無く笠を



頸に懸けて迷ひありくをば天狗魔縁の行と云ふなり。  
夜話に云く。故僧正の云く。衆僧各所用の衣糧等の事予があたふると思ふことなかれ。皆是れ諸天の供する所なり。吾れは取り次ぎ人にあたへたるばかりなり。亦各一期の命分具足す。奔走すること莫かれ。吾が恩と思ふこと莫かれと。常にすゝめられける。是れ第一の美言とおほゆるなり。亦大宋宏智禪師の會下。天童は常住物千人の用途なり。然あれば堂中七百人。堂外三百人にて千人につもる常住物なるに。好き長老の住したる故に。諸方の僧雲集して。堂中千人なり。其の外に五六百人あるなり。知事の人。宏智に訴へて云く。常住物は千人の分なり。衆僧多く集まりて。用途不足なり。枉けてはなたれんと申しゝかば。宏智云く。人人みな口あり。汝が事にあづからず。歎くこと莫かれと云云。今是れを思ふに。人人皆生得の衣食あり。思念によりても出で來らず。求めざれば來らざるにもあらず。在家人すら。なほ運に任せて忠を思ひ孝を學す。いかに況や出家人は。すべて

他事を管せんや。釋尊遺付の福分あり。諸天應供の衣食あり。亦天然生得の命分あり。求めず思はずとも。任運に命分あるべきなり。直饒ひ走り求めて寶をもちたりとも。無常忽ちに來らん時如何。故に學人は只須く餘事を心にとゞめず。一向に學道すべきなり。亦或る人の云く。末世邊土の佛法興隆は。閑居靜處をかまへ。衣食等の外護にわづらひなく。衣食具足して佛法修行せば。利益も廣かるべしと。今これを思ふに。然らず。それに附いては。有相著我の諸人あつまり學せんほどに。その中には一人も發心の人は出來るまじ。利養につき。財欲にふけりて。縦ひ千萬人集りたらんも。一人無からんに猶ほおとるべし。惡道の業因のみ自ら積みて。佛法の氣分なきゆゑなり。もし清貧艱難にして。或は乞食しあるひは果蘇等を食して。常に飢饉して學道せん。是れを聞いて。若し一人も來り學せんと思ふ人あらんこそ。誠の道心者。佛法興隆ならめとおほゆれ。艱難清貧によりても。もし一人もなからんと。衣食ゆたかにして。諸人あつまりて。佛法



の無からんとは。只八兩と半斤となり。  
亦云く。當世の人。多く造像起塔等の事を。佛法興隆と思へり。是れ亦  
非なり。直饒ひ高堂大觀。玉をみかき金をのべたりとも。是れに依り  
て。得道の者あるべからず。只在家人の財寶を。佛界に入れて。善事を  
なす福分なり。亦小因大果を感ずることあれども。僧徒の此の事を  
いとなむは。佛法興隆にはあらざるなり。たとひ草菴樹下にて。もあ  
れ。法門の一句をも思量し。一時の坐禪をも行ぜんこそ。誠の佛法興  
隆にてあらめ。今僧堂を立てんとて。勸進をもし。隨分にいとなむ事  
は。必ずしも佛法興隆と思はず。只當時學道する人もなく。いたづら  
に日月を送るあひだ。只あらんよりはと思うて。迷徒の結縁ともな  
れかし。亦當時學道の徒の坐禪の道場のためなり。亦思ひ始めたる  
事の成らぬとても。恨あるべからず。只柱一本なりとも立て。置き  
たらば。後來もかく思ひくは。だてたれども。成らざりけりと見んも。  
苦しかるべからずと思ふなり。

亦或る人勸めて云く。佛法興隆のために。關東に下向すべしと。  
答へて云く。然らず。若し佛法に志あらば。山川江海を渡りても。來り  
て學すべし。其の志無からん人に。往き向うて勸むるとも。聞き入れ  
んこと不定なり。只我が資縁のために。人を誑惑せんか。亦財寶を貪  
らんがためか。其れは身の苦しみなれば。いかでもありなんと覺ゆ  
るなり。

亦云く。學道の人。教家の書籍をよみ。外典等を學すべからず。見るべ  
くんば。語録等を見るべし。其の餘は。しばらく是れを置くべし。近代  
の禪僧。頌を作り。法語を書かんがために。文筆等をこのむ。是れ便ち  
非なり。頌につくらずとも。心に思はんことを書き出し。文筆と。の  
はずとも。法門をかくべきなり。是れをわるしとて。見ざらんほどの  
無道心の人。はよく文筆を調べて。いみじき秀句ありとも。只言語ば  
かりを翫んで。理を得べからず。我れもと幼少の時より。好み學せし  
ことなれば。今もや。もすれば。外典等の美言案ぜられ。文選等も見



らるゝを詮なき事と存ずれば一向にすつべき由を思ふなり。  
一日示して云く。吾れ在宋の時。禪院にして古人の語録を見し時。ある西川の僧道者にてありしが。我れに問うて云く。語録を見て。なにの用ぞ。答へて云く。古人の行李を知らん。僧の云く。何の用ぞ。云く。郷里にかへりて人を化せん。僧の云く。なにの用ぞ。云く。利生のためなり。僧の云く。畢竟して何の用ぞと。予後に此の理を案ずるに。語録公案等を見て。古人の行履をも知り。あるひは迷者のために説き聽かしめん。皆是れ自行化他のために。畢竟して無用なり。只管打坐して。大事をあきらめなば。後には一字を知らずとも。他に開示せんに。用ゐつくすべからず。故に彼の僧畢竟して。なにの用ぞとは云ひける。是れ眞實の道理なりと思ひて。其の後語録等を見ることをやめて。一向に打坐して。大事を明らかめ得たり。

夜話に云く。眞實内徳なりして。人に貴びらるべからず。此の國の人は。眞實の内徳をば知らずして。外相を以て人を貴ぶほどに。無道心の學人は。即ち惡道にひきおとされて。魔の眷屬となるなり。人に貴びられんは。易き事なり。中々身を捨て。世をそむく由を以てなすは。外相ばかりの假令なり。只なにともなく。世間の人の様にて。内心を調へもてゆくが。是れ實の道心者なり。然あれば。古人の云く。内空しうして外した。がふと。云ふ心は。内心は。我心なりして。外相は。他に隨ひもてゆくなり。我が身我が心と云ふ事を。一向に忘れて。佛法に入りて。佛法のおきてに任せて。行じもてゆけば。内外ともによく。今も後もよきなり。佛法の中にも。そゞろに身をすて。世をすつれば。とて。棄つべからざる事をすつるは。非なり。此の土の佛法者。道心者を立つる人の中にも。身をすつるとて。人はいかにも見よと思ひて。ゆゑ無く身をわるくふるまひ。或は亦世を執せぬとて。雨にもぬれながら。行きなんどするは。内外ともに無益なるを。世間の人は。すなはち此れらを貴き人かな。世を執せぬなんど。思へるなり。中に佛制を守りて。戒律の儀をも存じ。自行化他。佛制にまかせて。行ずるをば。か



へりて名聞利養げなるとて。人も管せざるなり。夫れが却りて吾が  
ためには。佛教にも随ひ。内外の徳も成ずるなり。  
夜話に云く。學道の人。世間の人に。智者もの知りとしられては無用  
なり。眞實求道の人の一人もあらん時は。我が知る所の佛祖の法を  
説かざることあるべからず。直饒ひ我れを殺さんとしたる人なり  
とも。眞實の道を聽かんとて。誠の心を以て問はゞ。怨心をわすれて。  
是れが爲めに説くべきなり。其の外敎家の顯密及び内外の典籍等  
の事。知りたる氣色しては。全く無用なり。人來りて此くの如きの事  
を問はゞ。知らずと答へたらんに。一切に苦しかるべからざるなり。  
其れをもの知らぬは。わるしと人も思ひ。愚人と自らも覺ゆる事を  
傷んで。ものを知らんとて。博く内外典を學し。剩さへ世間世俗の事  
をも知らんと思つて。諸事を好み學し。あるひは人にも知りたる由を  
もてなすは。究めて僻事なり。學道のために眞實に無用なり。知りた  
るを知らざる氣色するも。むつかしく。やうがましければ。却りてあ

たる氣色にてあしきなり。本より知らざらんは。苦しからざること  
なり。我れ幼少の時。外典等を好み學しき。夫れがのち入宋傳法する  
までも。内外の書籍を開き。方語を通ずるまでも。大切の用事。亦世間  
のためにも。尋常ならざる事なり。俗なんども尋常ならざる事に思  
ひたる。かたがたの用事にてありけれども。今熟く思ふに。學道のさ  
はりにてあるなり。只聖敎を見るときも。文に見ゆる所の理を。次第に  
心得てゆかば。其の道理を得つべきなり。然るに先づ文章を見。對句  
韻聲などを。見て。よきぞあしきぞと心に思つて。後に理をば心得  
るなり。然れば。中々知らずして。初めより道理を心得て行かば。よ  
かるべきなり。法語等を書くにも。文章におほせて書かんとし。韻聲  
差へば。礙へられ。なんどするは。知りたる答なり。語言文章はいかに  
もあれ。思ふ儘の理を。顆々と書きたらんは。後來も文は。わろしと思  
ふとも。理だにも聞へたらば。道のためには。大切なり。餘の才學も。此  
くの如し。傳へ聞く。故高野の空阿彌陀佛は。本は顯密の碩徳なりき。



遁世の後。念佛の門に入りて。後に眞言師ありて。來りて密宗の法門を問ひけるに。彼の人答へて云く。皆わすれをばりぬ。一字もおぼえずとて。答へられざりけるなり。是れらこそ道心の手本となるべけれ。などかは少々覺えてはあるべき。然あれども無用なる事をば云はざりけるなり。一向念佛の日は。さこそ有るべけれと覺ゆるなり。今の學者も。此の心あるべし。縦ひもと教家の才學等ありとも。皆忘れたらんは好事なり。況や今學すること。努々あるべからず。宗門の語録等。猶ほ眞實參學の道者は見るべからず。其の餘は是れを以て知るべし。

夜話に云く。今此の國の人は。多分或は行儀につけ。或は言語につけ。善惡是非。世人の見聞識知を思うて。其の事をなさば。人惡しく思ひてん。其の事は人善しと思ひてんと。乃至向後までをも執するなり。是れ全く非なり。世間の人必ずしも善とすることあたはず。人はいかにも思はゞ思へ。狂人とも云へ。我が心に佛道に順じたらんこと

をばなし。佛法に順ぜずんば行ぜずして。一期をも過ごさば。世間の人は。いかに思ふとも。苦しかるべからず。遁世と云ふは。世人の情を心にかけてざるなり。たゞ佛祖の行履。菩薩の慈悲を學して。諸天善神の冥に照す所を慚愧して。佛制に任せて行じもてゆかば。一切苦しかるまじきなり。さればとて。亦人の惡し。と思ひ云はんも。苦しかるべからずとて。放逸にして。惡事を行じて。人を愧ぢざるは。是れ亦非なり。たゞ人目にはよらずして。一向に佛法に依りて行すべきなり。佛法の中には。亦然のごときの放逸無慚をば制するなり。

亦云く。世俗の禮にも。人の見ざる處。あるひは暗室の中なれども。衣服等をきかゆる時も。亦坐臥する時にも。放逸に隱處なんども。藏さず。無禮なるをば。天に慚ぢず。鬼に慚ぢずとて。そしるなり。只人の見る時と同じく。かくすべき處をもかくし。はづべきことをもはづるなり。佛法の中も。亦戒律かくのごとし。然あれば。道者は内外を論ぜず。明暗を擇ばず。佛制を心に存して。人の見ず知らざればとて。惡



事を行ずべからざるなり。一日學人問うて云く。某甲なほ學道を心にかけて。年月を経るといへども。いまだ省悟の分あらず。古人多く道は聰明靈利に依らず。有智明敏を用ゐずと云ふ。然あれば我が身。下根劣器なればとて。卑下すべきにもあらずと。きこへたり。若し故實用心を存すべき様ありや。如何。

示して云く。然あり。有智高才を用ゐず。靈利聰明によらぬは。まことの學道なり。あやまりて盲聾癡人のごとくになれとす。むるは非なり。學道は是れ全く多聞高才を用ゐぬ故に。下根劣器と嫌ふべからず。誠の學道は。やすかるべきなり。然あれども。大宋國の叢林にも。一師の會下の數百千人の中に。まことの得道得法の人。は。わづかに一人二人なり。然あれば。故實用心もあるべきなり。今是れを案ずるに。志の至ると至らざるとなり。眞實の志を發して。隨分に參學する人。得ずといふことなきなり。その用心の様は。何事を専らにし。その行を急にすべしと云ふことは。次のことなり。先づ只欣求の志の切

なるべきなり。譬へば重き寶をぬすまんと思ひ。強き敵をうたんと思ひ。高き色にあはんと思ふ心あらん人は。行住坐臥。ことにふれ。をりに隨ひて。種種の事は。かはり來るとも。其れに隨ひて。隙を求め。心に懸くるなり。この心あながちに切なるものとげずといふことなきなり。此くの如く道を求むる志切になりなば。或は只管打坐の時。或は古人の公案に向はん時。若くは知識に逢はん時。實の志を以て行ずる時。高くとも射つべく。深くとも釣りぬべし。是れほどの心發らずして。佛道の一念に。生死の輪廻をきる大事をば。如何が成ぜん。若し此の心あらん人は。下智劣根をも云はず。愚癡惡人をも論ぜず。必ず悟を得べきなり。亦此の志をおこす事は。切に世間の無常を思ふべきなり。此の事は。亦只假令の觀法などに。すべきことにあらず。亦無きことをつくりて。思ふべきことにもあらず。眞實に眼前の道理なり。人のおしへ。聖教の文。證道の理を待つべからず。朝に生じて夕に死し。昨日みし人。今日はなきこと。眼に遮ぎり耳にちかし。是



れは他のうへにて見聞することなり。我が身にひきあて、道理を思ふに。たとひ七旬八旬に命を期すべくとも。終に死ぬべき道理に依りて死す。其の間の憂ひ樂しみ。恩愛怨敵等を思ひとげは。いかにでもすごしてん。只佛道を信じて。涅槃の眞樂を求むべし。況や年長大せる人。半に過ぎぬる人は。餘年幾く計りなれば。學道ゆるくすべきや。此の道理も。猶ほのびたる事なり。眞實には。今日今時こそ。かくのごとく世間の事をも。佛道の事をも思へ。今夜明日よりいかなる重病をも受けて。東西をも辨へぬ。重苦の身となり。亦いかなる神鬼の怨害をもうけて。頓死をもし。いかなる賊難にもあひ。怨敵も出來て。殺害奪命せらるゝこともやあらん。實に不定なり。然あれは。是れほどにあだなる世に。極めて不定なる死期をいつまで命ながらうべきとて。種種の活計を案じ。剩さへ他人のために惡をたくみ思うて。いたづらに時光を過ごすこと。極めておろかなる事なり。此の道理眞實なればこそ。佛も是れを衆生の爲めに説きたまひ。祖

師の普說法語にも。此の道理のみを説かる。今の上堂請益等にも。無常迅速生死事大と云ふなり。返すくも此の道理を心にわすれずして。只今日今時ばかりと。思つて。時光をうしなはず。學道に心をいべきなり。其の後は眞實にやすきなり。性の上下と。根の利鈍は全く論ずべからざるなり。

夜話に云く。人多く遁世せざることは。我が身をむさぼるに似て。我が身を思はざるなり。是れ便ち遠慮なきなり。亦是れ善知識にあはざるに依りてなり。縦ひ利養を思ふとも。常樂の益を得て。龍天の供養を得んことを願ひ。名聞を思ふとも。佛祖の名を得。古徳の名を得ば。後賢も是れを聞いては慕ふべきなり。

夜話に云く。古人の云く。朝に道を聞いて。夕に死すとも可なりと。いま學道の人も。此の心あるべきなり。曠劫多生の間。いくたびか徒らに生じ。徒らに死せしに。まれに人身を受けて。たまたま佛法にあへる時。此の身を度せずんば。何れの生にか。此の身を度せん。縦ひ身を



惜みたまちたりともかなふべからず。つひに捨て、行く命を一日片時なりとも佛法のために捨てたらんは永劫の樂因なるべし。後の事明日の活計を思うて棄つべき世を捨てず。行ずべき道を行ぜずして。徒らに日夜を過ごすは口惜きことなり。只思ひきりて。明日の活計なくば。飢ゑ死にもせよ。寒え死にもせよ。今日一日道を聞いて。佛意に隨ひて死せんと思ふ心をまづ發すべきなり。然るときんば。道を行じ得んこと一定なり。此の心なければ。世をそむき。道を學する様なれども。猶ほしり足をふみて。夏冬の衣服等のことをした心にかけて。明日猶ほ明年の活命を思うて。佛法を學せんは。萬劫千生學すとも。かなふべしとも。おぼえず。亦さる人もやあらんずらん。存知の意趣。佛祖の教にはあるべしとも。おぼえざるなり。夜話に云く。學人は必ずしぬべきことを思ふべき道理は勿論なり。たとひ其のことをば思はずとも。暫く先づ光陰を徒らに過ごさじと思ひて。無用のことをなして。徒らに時を過ごさず。詮あることを

なして。時を過ごすべきなり。其のなすべきことの中にも。亦一切のこと。いづれか大切なると云ふに。佛祖の行履の外は。みな無用なりと知るべし。

或る時。柴問うて云く。衲子の行履。舊損の衲衣等を綴り補うて。すてざれば。ものを貪惜するに似たり。亦舊きをすて、新しきを隨ひて用ゐれば。新しきを貪求する心あり。兩ながら咎あり。畢竟していかんか用心すべき。

答へて云く。貪惜貪求の二つをだにも離れなば。兩頭ともに失なからん。ただし破れたるを綴りて久しからしめて。新しきをむさぼらずんば。可ならんか。

夜話の次に。柴問うて云く。父母の報恩等の事は作すべきや。

示して云く。孝順は最用なる所なり。然あれども。其の孝順に在家出家の別あり。在家は孝經等の説を守りて。生につかへ。死につかふる。こと世人みな知れり。出家は恩をすて、無爲に入る故に。出家の作



法は恩を報ずるに一人にかきらず。一切衆生をひとしく父母のごとく恩深しと思うて。なす所の善根を法界にめぐらす。別して今世一世の父母にかきらば。無爲の道にそむかん。日日の行道。時時の參學。只佛道に隨順してもゆかば。其れを眞實の孝道とするなり。忌日の追善。中陰の作善。などは。皆在家に用ゐる所なり。衲子は父母の恩の深きことをば。實のごとくしるべし。餘の一切も亦たかくのごとしと知るべし。別して一日を占て。ことに善を修し。別して一人を分けて。廻向するは。佛意にあらざるか。戒經の父母兄弟死亡の日の文は。且く在家に蒙らしむるか。大宋叢林の衆僧。師匠の忌日には。其の儀式あれども。父母の忌日は。是れを修したりとも見えざるなり。一日示して云く。人の利鈍と云ふは。志の至らざる時のことなり。世間の人の馬より落つる時。いまだ地におちつかざる間に。種種の思ひ起る。身をも損じ。命をも失するほどの大事出來る時は。誰人も才學念慮を廻すなり。其の時は利根も鈍根も同じくものを思ひ義を

案ずるなり。然れば今夜死に明日死ぬべしと思ひ。あさましきことに逢ふたる思ひを作して。切にはげまし。志をすゝむるに。悟を得ずといふことなきなり。中々世智辨聰なるよりも。鈍根なるやうにて。切なる志を發する人。速に悟を得るなり。如來在世の周梨槃特のごときは。一偈を讀誦することも難かりしかども。根性切なるによりて。一夏に證を取りき。只今ばかり我が命は存するなり。死せざる先きに悟を得んと切に思うて。佛法を學せんに。一人も得ざるはあるべからざるなり。

一夜示して云く。大宋の禪院に。麥米等をそろへて。惡しきをさけ善きをとりにて飯等にすることあり。是れを或る禪師の云く。直饒ひ我が頭をうち破ること七分にすとも。米をそろふることなかれと。頌につくり戒めたり。此のこゝろは。僧は齋食等をとゝのへて食することなかれ。只有るにしたがひて。よければよくて食し。惡しきをもきはらずして食すべきなり。只檀那の信施。清淨なる常住食を以て



餓を除き命をさへて。行道するばかりなり。味を以て善惡を擇ぶ  
 ことなかれと謂ふなり。今我が會下の徒衆も此の心あるべし。  
 因に問うて云く。學人若し自己これ佛法なり。外に向ひて求むべか  
 らずと聞きて。深く此の言を信じて。向來の修行參學を放下して。本  
 性に任せて善惡の業をなして一期を過ごさん。此の見解いかん。  
 示して云く。此の見解。言と理と相違せり。外に向ひて求むべからず  
 と云うて。行を捨て學を放下せば。此の放下の行を以て所求ありと  
 きこへたり。これ集めざるにはあらず。只行學もとより佛法なりと  
 證して。無所求にして。世事惡業等は。我が心になしたくともなさず。  
 學道修行の懶きをもいとひかへりみず。此の行を以て。打成一片に  
 修して。道成するも。果を得るも。我が心より求むることなうして。行  
 ずるをこそ外に向ひて覓むることなかれと云ふ道理にはかなふ  
 べけれ。南嶽の磚を磨して鏡となせしも。馬祖の作佛を求めしを戒  
 めたり。坐禪を制するにはあらざるなり。坐はすなはち佛行なり。坐

はすなはち不爲なり。是れ便ち自己の正體なり。此の外別に佛法の  
 求むべき無きなり。

一日請益の次に云く。近代の僧侶多く世俗に隨ふべしと云ふ。今思  
 ふに然あらず。世間の賢すらなほ民俗にしたがふことをけがれた  
 ること、云ひて。屈原の如きんば。世は擧げて皆醉へり。我は獨り醒  
 めたりとて。民俗に隨はずして。終に滄浪に没す。況や佛法は。事事み  
 な世俗に違背せるなり。俗は髮を飾る。僧は髮を剃る。俗は多く食す。  
 僧は一食す。皆そむけり。然して後に還りて大安樂の人となるなり。  
 故に僧は一切世俗にそむけるなり。

一日示して云く。治世の法は。上天子より。下庶民に至るまで。各皆其  
 の官に居する者は其の業を修す。其の人にあらずして其の官に居  
 するを。亂天の事と云ふ。政道が天意に合ふ時は。世すみ民やすきな  
 り。故に帝は三更の三點に起きさせ給ひて。治世の時としましませ  
 り。たやすからざることなり。佛の法も只職のかはり。業の異なるば



かりなり。國王は自ら思量を以て政道をはからむ。先規をかんがへ。有道の臣を覓めて。政天意に相合ふ時。是れを治世と云ふなり。若し是れを怠れば。天に背き世亂れ。民苦しむなり。其れより以下。諸の公卿大夫士庶民。皆各司る所の業あり。其れに順ふを人とは云ふなり。其れに背くは天事を亂る故に。天の刑を蒙るなり。然あれば佛法の學人も。世を離れ家を出れば。とて。徒らに身を安せんと思ふこと。片時もあるべからず。初めは利あるに似たれども。後には大いに害あるなり。出家の作法に順ひて。全く其の職を治め。其の業を修すべきなり。世間の治世は。先規有道をかんがへ求むれども。先聖先達のたしかに相傳したる例なければ。自ら其の時の例に隨ふこともあれども。佛子はたしかなる先規教文顯然なり。亦相承傳來の知識。現在せり。我れに思量あり。四威儀の中において。一一に先規を思ひ。先達に隨ひ修行せん。になじかは道を得ざるべき。俗は天意に合はんと思ひ。衲子は佛意に合はんと思ふ。修業ひとしくして。得果すぐれた

れば。一得永得ならん。かくの如く大安樂の爲めに。一世幻化の此の身を苦しめて。佛意に隨んは。唯行者の心にあるべし。然ありといへども。亦そゞろに身を苦しめ。なすべからざることをなせと。佛教には勸むることなきなり。戒行律儀に隨ひもてゆけば。自然に身や少く。行儀も尋常に。人めもやすきなり。ほどに只今案の我見の身の安樂を捨て。一向佛制に順すべきなり。

亦云く。我れ大宋天童禪院に寓居せし時。淨老衲には二更の三點まで坐禪し。曉は四更の二點三點よりおきて坐禪す。長老と共に僧堂裡に坐す。一夜も懈怠なし。其間衆僧多く眠る。長老巡り行いて。睡眠する僧をば。或は拳を以て打ち。或は履をぬいで打ち。恥かしめ進めて。眠を醒ます。猶ほ眠る時は。照堂に行いて鐘を打ち。行者を召し。蠟燭をともし。なんどして。卒時に普説して云く。僧堂裡に集り居て。徒らに眠りて。何の用ぞ。然あらば何ぞ出家して入叢林するや。見ずや。世間の帝王官人。何人か身をたやすくする。君は王道を治め。臣は忠



節を盡し。乃至庶民は田を開き鋤を取るまでも何人かたやすくして世を過ごす。是れをのがれて叢林に入りて空しく時光を過ごして畢竟して何の用ぞ。生死事大なり。無常迅速なりと。教家も禪家も同じく勧む。今夕明旦如何なる死をか受け。如何なる病をかうけん。且く存するほど佛法を行ぜず。睡り臥して空しく時を過ごすこと最も愚なり。かくの如くなる故に佛法は衰へ行くなり。諸方佛法の盛んなりし時は叢林皆坐禪を専らにせしなり。近代諸方坐禪を勧めざれば佛法澆薄しゆくなり。かくの如くの道理を以て衆僧をすゝめて坐禪せしめられしことまのあたり是れを見しなり。今の學人も彼の風を思ふべし。亦或る時近仕の侍者等云く。僧堂裡の衆僧眠りつかれて或は病起り退心も起りつべし。これ坐の久しき故か。坐禪の時刻を縮められればやと申しければ。長老大いに嗔りて云く。然あるべからず。無道心の者の假令に僧堂に居するは。半時片時なりとも猶ほ眠るべし。道心ありて修行の志有らんは。長からんに

つけていよいよ喜び修せんずるなり。我れ弱かゝりし時。諸方の長老を歴觀せしに。ある長老此くの如く勸めて云く。已前は眠る僧はば拳も欠げなんとするほどに打ちたるが。今は老後になりて。ちからよわくなりて。つよくも打ち得ざるほどに。よき僧も出來らざるなり。諸方の長老も坐を緩く勸むる故に。佛法は衰微せるなり。我れは彌よ打つべきなりとのみ示されしなり。

亦云く。道を得ることは。心を以て得るか。身を以て得るか。教家等にも身心一如と云うて。身を以て得るとはいへども。猶ほ一如の故にと云ふ。しかあれば。正しく身の得ることは。たしかならず。今我が家は身心ともに得るなり。其の中に心を以て佛法を計校する間は。萬劫千生得べからず。心を放下して知見解會を捨る時得るなり。見色明心。聞聲悟道の如きも。猶ほ身の得るなり。然あれば心の念慮。知見を一向に捨て。只管打坐すれば。道は親しみ得なり。然あれば道を得ること。は正しく身を以て得るなり。是れに依りて坐を専らにすべ



しと覺えて勸むるなり。

正法眼藏隨聞記第二終

正法眼藏隨聞記第三

侍者 懷奘 編

示して云く。學道の人。身心を放下して。一向に佛法に入るべし。古人云く。百尺竿頭如何進步と。然あれば百尺の竿頭にのぼりて。足をはなれば。死ぬべしと思つて。つよく取りつく心のあるなり。其れを一歩を進めよと云ふは。よもあしからじと思ひ切りて。身命を放下するやうに。度世の業よりはじめて。一身の活計に至るまで。思ひすつべきなり。其れを捨てざらんほどは。いかに頭燃を拂うて。學道するやうなりとも。道を得ること。は。かなふべからざるなり。たゞ思ひ切りて。身心ともに放下すべきなり。或る時さる比丘尼問うて云く。世間の女房などだにも。佛法とて勤學す。比丘尼の身には。少々の不可ありとも。何ぞ佛法にかなはざるべきと覺ゆ。いかんと。示して云く。此の義然ならず。在家の女人は。其の身ながら佛法を學



して得る事はありとも。出家の人。出家の心なからんは得べからず。佛法の人を擇ぶにはあらず。人の佛法に入らざればなり。出家在家の義。其の心異なるべし。在家人の出家人の心あるは。出離すべし。出家人の在家人の心あるは。二重のひがことなり。用心大いに異なるべきことなり。作すことの難きにはあらず。能くすることの難きなり。出離得道の行は。人ごとに心にかけたるには似たれども。能くする人まれなればなり。生死事大なり。無常迅速なり。心を緩くすることなかれ。世を捨ては實に世を捨つべきなり。假名はいかにてもありなんとおぼゆるなり。

夜話に云く。今時世人を見る中に。果報もよく家をも起す人は。皆心の正直に。人の爲めによき人なり。故に家をも保ち。子孫までも昌ゆるなり。心に曲節ありて。人の爲めに悪しき人は。設ひ一旦は果報もよく家を保てる様なれども。終にはあしきなり。設ひ亦一期は無事にして過ごす様なれども。子孫必ず衰微するなり。亦人のために善

きことをして。其の人によしと思はれ。喜びられんと思つてするは。あしきに比すれば。勝ぐれたるに似たれども。猶ほ是れは自身を思つて。人のために真によきにはあらざるなり。其の人には知られざれども。人のために好き事をなし。乃至未來までも。誰れが爲めと思はざれども。人の爲めによからん事をしをきなんどするを。誠の善人とは云ふなり。況や納僧は。是れにこえたる心をもつべきなり。衆生を思ふ事。親疎を分たず。平等に濟度の心を存し。世出世間の利益。すべて自利を思はず。人にも知られず。喜びられずとも。只人の爲めによきことを心の中に作して。我れはかくの如くの心もちたると。人に知られざるなり。此の故實は。まづ世を捨て身を捨つべきなり。我が身をだにも。眞實に捨てぬれば。人によく思はれんといふ心は無きなり。然あればとて。亦人はなにとも思はゞ思へとて。悪しきことを行じ。放逸ならんは。亦佛意に背くなり。只よき事を行じ。人の爲めに善事をなして。代りを得んと思ひ。我が名を顯はさんと思はず



して眞實無所得にして利生の事をなす。即ち吾我を離るゝ第一の用心なり。此の心を存せんと思はゞまづ無常を思ふべし。一期は夢の如し。光陰は早く移る。露の命は消え易し。時は人を待たざるならひなれば。只しばらく存じたるほど。聊のことにつけても人の爲めによく。佛意に順はんと思ふべきなり。

夜話に云く。學道の人。最も貧なるべし。世人を見るに。財ある人は。まづ嗔恚恥辱の二つの難。定めて來るなり。寶あれば。人は是れを奪ひ取らんと思ふ。我れは取られじとする時。嗔恚忽ちに起る。或は是れを論じて。問答對決に及び。つひには鬪爭合戦をいたす。かくの如く。のあひだに。嗔恚も起り。恥辱も來るなり。貧にして。貧らざる時は。先づ此の難を免れて。安樂自在なり。證據眼前なり。教文を待つべからず。余のみならず。古聖先賢。是れを誇り。諸天佛祖。皆是れを恥かしむ。然あるに。愚癡なる人は。財寶を貯へ。そこばくの嗔恚をいやくこと。恥辱の中の恥辱なり。貧うして。道を思ふは。先賢古聖の仰く所。諸佛

諸祖の喜ぶ所なり。近來佛法の衰微しゆくこと。眼前にあり。予始めて建仁寺に入りし時。見しと。後七八年過ぎて。見しと。次第にかはりゆくことは。寺の寮々に塗籠をおき。各々器物を持し。美服を好み。財物を貯へ。放逸の言語を好み。問訊禮拜等の衰微することを以て思ふに。餘所も推察せらるゝなり。佛法者は。衣孟の外に財寶等は一切持つべからず。なにを置かんが爲めに塗籠をしつらふべきぞ。人にかくすほどの物をばもつべからざるなり。盜賊等を怖るゝ故にこそ。かくし置かんと思へ。捨て持たざれば。還りてやすきなり。人をば殺すとも。人には殺されじと思ふ時こそ。身も苦しく。用心もせらるれ。人は我れを殺すとも。我れは報を加へじと思ひ定めつれば。用心もせられず。盜賊も愁ひられざるなり。時として安樂ならずといふことなし。

一日示して云く。宋土の海門禪師。天童の長老たりし時。會下に元首座と云ふ僧ありき。この人は得法悟道の人にて。行持長老にも超え



たり。或る時夜方丈に參じて。燒香禮拜して云く。請すらくは某甲に後堂首座を許せと。時に禪師流涕して云く。我れ小僧たりし時より未だ此くの如きの事を聞かず。汝坐禪僧として。首座長老を所望すること。大いなる錯なり。なんぢ既に悟道せること。我れにも越えたり。然あるに首座を望むこと。是れ昇進の爲めか。許すことは前堂をも乃至長老をも許すべし。その心操卑劣なり。誠に是れを以て餘の未悟の僧は推察せられたり。佛法の衰微せること。是れを以て知りぬべしと云うて。流涕悲泣す。是れに愧ぢて。辭すといへども。猶ほ終に首座に請す。其の後元首座。此の詞を記録して。自らを愧ぢしめて。師の美善を顯はす。今是れを案ずるに。昇進を望み。物のかしらとなり。長老とならんと。思ふことをば。古人是れを慙ぢしむ。只道を悟らんとのみ思うて。餘事あるべからず。

或る夜示して云く。唐の太宗即位の後。故殿に栖み給へり。破損せる故に。濕氣あがり。風霧冷かにして。玉體おかされつべし。臣下等造作

すべき由を奏しければ。帝の言く。時農節なり。民定めて愁ひあるべし。秋を待ちて造るべし。濕氣に侵さるは。地にうけられず。風雨に侵さるは。天に合はざるなり。天地に背かば。身あるべからず。民を煩はさずんば。自ら天地に合ふべし。天地に合はば。身を侵すべからずと云うて。終に新宮を作らず。故殿に栖み給へり。俗すら猶ほかくの如く。民を思ふこと。自身に超えたり。況や佛子は如來の家風を受けて。一切衆生を一子の如くに憐むべし。我れに屬する侍者。所従なれば。とて。呵嘖し。煩はすべからず。いかに況や同學等。侶者。年宿老等をば。恭敬すること。如來の如くすべしと。戒文分明なり。然あれば。今の學人も。人には色にいで。知られずとも。心の内に上下親疎を分たず。人の爲めによからんと。思ふべきなり。大小の事につけて。人を煩はして。人の心を破ぶること有るべからざるなり。如來在世に。外道多く。如來を謗り。惡みき。佛弟子問うて云く。如來はもとより柔和を本とし。慈悲を心とす。一切衆生ひとしく恭敬すべし。何か故にか此く



の如く隨はざる衆生あるや。佛の言く。吾れ昔衆を領せし時。多く呵嘖羯磨を以て弟子をいましめき。是れに依りて今かくの如しと。律の中に見えたり。然あれば則ち設ひ住持長老として衆を領じたりとも。弟子の非をたゞしいさめん時。呵嘖の詞を用ゐるべからず。たゞ柔和の詞を以て誠め勸むとも。隨ふべくんば隨ふべきなり。況や學人親族兄弟等の爲めに。あらしき詞を以て人を惡しく呵嘖するとは。一向にやむべきなり。能くく意を用うべし。

亦示して云く。衲子の用心は。佛社の行履を守るべし。第一には先づ財寶を貪るべからず。其の故は。如來の慈悲深重なること。喩を以ても量り難し。然あるに彼の所爲行履。皆是れ衆生の爲めなり。一微塵計りも衆生の爲めに利益ならざるべき事を行はせ給はず。其の故は佛は是れ輪王太子にてましませば。即位し給ひて一天をも御意にまかさせたまひ。寶を以て弟子を憐み。所領を以て弟子をはごくみ給ふべきに。何故に位を捨て。自ら乞食を行じ給ふや。是れ決定

末世の衆生の爲めにも。弟子の行道のためにも。利益となる因縁あるべき故に。財寶を貯へず。乞食を行じおき給へり。爾しよりこのかた。天竺漢土の祖師のよきと人にも知られしは。みな貧窮乞食なさしめ給ふなり。況や我が門の祖師。皆財寶を貯ふべからずとのみ勸むるなり。教家にも此の宗を讚するには。先づ貧をほめ。傳來の書録にも。貧を記してほむるなり。いまだ財寶に富み豊かにして佛法を行ずるとは。聞かず。皆よき佛法者と云ふは。或は布衲衣常乞食なり。禪門をよき宗と云ひ。禪僧を他に異なりとする初めの興りは。むかし教院律院等に雜居せし時にも。身を捨て。貧人なるを以てなり。宗門の家風。先づ此のことを存知すべし。聖教の文理を待つべきにあらず。我が身も田園等を持ちたる時もありき。亦財寶を領せし時もありき。彼の時の身心と。此のころ貧うして。衣蓋にともしき時とを比するに。當時の心すぐれたり。と覺ゆる。是れ現證なり。亦云く。古人の云く。不似其人。莫語其風と。云ふ心は。其の人の徳を學



ばず知らずして其の人の失あるを見て其の人はよけれども其の事は悪しさよ。悪しき事をよき人もするかなと思ふべからずとなり。只其の人の徳を取りて失を取ることなかれ。君子は徳を取りて失を取らずと云ふは此の心なり。

一日示して云く。人は必ず陰徳を修すべし。陰徳を修すれば必ず冥加顯益あるなり。設ひ泥木塑像の麤惡なりとも。佛像をば敬ふべし。黄卷赤軸の荒品なりとも。經教をば歸敬すべし。破戒無慚の僧侶なりとも。僧體をば仰信すべし。内心に信心を以て敬禮すれば必ず顯福を蒙るなり。破戒無慚の僧。疎相の佛。麤品の經なればとて不信無禮なれば必ず罰を蒙るなり。然あるべき如來の遺法にて。人天の福分となりたる。佛像經卷僧侶なり。故に歸敬すれば必ず益あり。不信なれば罪を受くるなり。いかに希有に淺猿くとも。三寶の境界をば歸敬すべきなり。禪僧は善を修せず。功德を用ゐずと云うて。惡行を好むは。極めたるひが事なり。先規未だ惡行を好む事を聞かず。丹霞

天然禪師は木佛を焼く。是れらこそ惡事と見えたれ共。一段の説法の施設なり。彼の師の行狀の記を見るに。坐するに必ず儀あり。立するに必ず禮あり。常に貴き賓客に向へるが如し。暫時の坐にも必ず跏趺して又手す。常住物を守ること眼睛の如くす。勤修するものあれば必ず是れを賀す。少善なれ共是れを重くす。常途の行狀ことに勝れたり。彼の記をとめて。今の世までも叢林の龜鑑とするなり。爾のみならず諸の有道の師。先規悟道の祖を見聞するに。皆戒行を守り。威儀をととのへ。設ひ少善といへども是れを重くす。いまだ悟道の師の善根を忽諸することを聽かず。故に學人祖道に隨はんと思はゞ。必ず善根を輕しめざれ。信仰を専らにすべし。佛祖の行道は必ず衆善の聚まる處なり。諸法皆佛法なりと通達しつる上は。惡は決定惡にして。佛祖の道に遠ざかり。善は決定善にして。佛道の縁となると知るべし。若しかくの如くならば。なんぞ三寶の境界を重くせざらんや。



亦云く。今佛祖の道を行ぜんと思はゞ。所期も無く。所求も無く。所得もなうして。無利に先聖の道を行じ。祖祖の行履を行すべきなり。所求を斷じ。佛果を望むべからざればとて。修行を止め。本の悪行に住まらば。却りて是れ本の所求にとゞまり。本の窠臼に墮するなり。全く一分の所期を存ぜずして。只人天の福分とならんとて。僧の威儀を守り。濟度利生の行履を思ひ。衆善をこのみ修して。本の惡をすて。今の善にとゞこほらずして。一期行じもてゆかば。是れを古人も打破漆桶底と云ふなり。佛祖の行履と云ふは。此くの如くなり。

一日僧來りて學道の用心を問ふ。次示して云く。學道の人。は先づ須く貧なるべし。財おほければ必ず其の志を失ふ。在家學道のもの。猶ほ財寶にまとはり。居處をむさぼり。眷屬に交はれば。設ひ其の志ありといへども。障道の因縁多し。古來俗人の參學する多けれども。其の中によしといふも。猶ほ僧には及ばず。僧は三衣一鉢の外は。財寶をもたず。居處を思はず。衣食を食らざる間。一向に學道すれば。分分

に皆得益あるなり。其のゆゑは。貧なるが道に親しきなり。龐公は俗人なれども。僧におとらず。禪席に名をとゞめたるは。かの人參禪のはじめ。家の財寶を持ち出して。海に沈めんとす。人は是れを諫めて云く。人にも與へ。佛事にも用ゐらるべしと。時に他に對して云く。我れ已に宛なりと思ひて。是れを捨つ。宛としりて。何ぞ人に與ふべき。寶は身心を愁ひしむるあだなりと云ひて。つひに海に入れりぬ。然うじて後活命の爲めには。簋をつくりて賣りて。過ぎけるなり。俗なれども。かくの如く財寶を捨て。こそ善人とも云はれけれ。いかに況や僧は。一向にすつべきなり。

僧の云く。唐土の寺院には。定まりて僧祇物あり。常住物等ありて置かれたれば。僧の爲めに行道の資縁となりて。其の煩ひなし。此の國は其の義なれば。一向捨棄せられてはなかく。行道の違亂とやならん。斯くの如くの衣食資縁を思ひあて。あらばよしと覺ゆ。いかん。



示して云く。然あらず。なか／＼唐土よりは此の國の人は無理に僧を供養し。非分に人に物を與ふることあるなり。先づ人は知らず。我れは此の事を行じて。道理を得たるなり。一切一物も持たず。思ひあてがふことも無うして。十餘年過ぎりぬ。一分も財を貯へんと思ふこそ大事なれ。僅の命をいくるほどのことはいかにと思ひ貯へざれども。天然としてあるなり。人皆生分あり。天地是れを授く。我れ走り求めざれども。必ず有るなり。況や佛子は如來遺囑の福分あり。不求自得なり。只一向にすて。道を行ぜば。天然これあるべし。是れ現證なり。

亦云く。學道の人。多分云ふ。若し其のことをなさば。世人是れを謗せんかと。此の條。ただ非なり。世間の人いかに謗するとも。佛祖の行履。聖教の道理にてだにもあらば。依行すべし。設ひ世人舉つてほむるとも。聖教の道理ならず。祖師も行ぜざることならば。依行すべからず。其れ故に。世人の親疎。我れをほめ。我れを誹ればとて。彼の人の心

に随ひたりとも。我が命終の時。惡業にも引かれ。惡道へ落ちなん時。彼の人のいかにも救ふべからず。亦設ひ諸人に謗せられ。惡まるゝとも。佛祖の道に依行せば。眞實に我れをたすけられんずれば。人の謗ずればとて。道を行ぜざるべからず。亦かくの如く。謗し讃する人。必ずしも佛祖の行を通達し。證得せるにあらず。なにとしてか。佛祖の道を。世の善惡を以て判ずべき。然あれば。世人の情には順ふべからず。只佛道に依行すべき道理ならば。一向に依行すべきなり。

亦或る僧云く。某甲老母現在せり。我れは即ち一子なり。ひとへに某甲が扶持に依りて。度世す。恩愛もことに深し。孝順の志も深し。是れに依りていさゝか世に随ひ人に隨うて。他の恩力を以て母の衣糧にあつ。我れ若し遁世籠居せば。母は一日の活命も存じ難し。是れに依りて世間にありて。一向佛道に入らざらんことも難事なり。若し猶ほも捨て。道に入るべき道理あらば。其の旨いかなるべきぞ。示して云く。此のこと難事なり。他人のはからひに非ず。たゞ自ら能



くく思惟して。誠に佛道に志有らば。いかなる支度方便をも案じて。母儀の安堵活命をも支度して。佛道に入らば。兩方俱によき事なり。切に思ふことは必ずとぐるなり。強き敵。深き色。重き寶なれども。切に思ふ心ふかければ。必ず方便も出来る様あるべし。是れ天地善神の冥加もありて。必ず成ずるなり。曹溪の六祖は。新州の樵人にて。薪を賣りて母を養ひき。一日市にして。客の金剛經を誦するを聽いて。發心し。母を辭して。黃梅に參ぜし時。銀子十兩を得て。母儀の衣糧にあてたりと見ふたり。是れも切に思ひける故に。天の與へたりけるかと覺ゆ。能くく思惟すべし。是れ最も道理なり。母儀の一期を待ちて。其の後障礙なく佛道に入らば。次第本意の如くにして。神妙なり。しかあれども。亦知らず。老少不定なれば。若し老母は久しくとゞまりて。我れは先きに去ること出来らん時に。支度相違せば。我れは佛道に入らざることをくやみ。老母は是れを許さざる罪に沈みて。兩人俱に益なうして。互に罪を得ん時。いかん。若し今生を捨て

佛道に入りたらば。老母は設ひ餓死すとも。一子を放るして道に入らしめたる功德。豈に得道の良縁にあらざらんや。尤も曠劫多生にも捨て難き恩愛なれども。今生人身を受けて。佛敎にあへる時。捨てたらば。眞實報恩者の道理なり。なんぞ佛意にかなはざらんや。一子出家すれば。七世の父母得道すと見えたり。何ぞ一世の浮生の身を思うて。永劫安樂の因を空しく過ごさんやと云ふ道理もあり。是れらを能くく自ら計らふべし。

## 正法眼藏隨聞記第三終



## 正法眼藏隨聞記第四

侍者 懷奘 編

一日參學の次に示して云く。學道の人。は。自解を執することなかれ。設ひ會する所ありとも。若し亦決定よからざる事もやあらん。亦是れよりもよき義もやあらんと思うて。廣く知識をも訪ひ先人の言をも尋ぬべきなり。亦先人の言なりとも。かたく執することなかれ。若し是れもあしくもやあるらん。信ずるにつけてもと思うて。次第にすぐれたる事あらば。其れにつくべきなり。

亦云く。南陽忠國師。問紫璘供奉。甚處來。奉云。城南來。師云。城南。何色。奉云。作黃色。師乃問童子。城南。何色。子云。作黃色。師云。祇這童子。亦可。籬前賜紫對御談玄。しかあれば。童子も國皇の師として。眞色を答ふべし。汝が見所常途に超えずとなり。後來或る人の云く。供奉が常途に超えざる過。甚れの處にかある。童子も同じく眞色を説く。是れこそ眞の知識たらめと云ひて。國師の義を用ゐず。故に知んぬ。必

ずしも古人の詞を用ゐず。只寔の道理を存すべきなり。疑心はあしき事なれども。亦信すまじきことをかたく執して。尋ぬべき義をも問はざるはあしきなり。

亦示して云く。學人の第一の用心は。先づ我見を離るべし。我見を離るゝと云ふは。此の身を執すべからず。設ひ古人の語話を究め。常坐鐵石の如くなりとも。此の身に著して離れずんば。萬劫千生にも佛祖の道を得べからず。いかに況や權實の教法。顯密の正教を悟り得たりと云ふとも。身を執するこゝろを離れずんば。徒らに他の寶を數へて自ら半錢の分なし。只請ふらくは。學人靜坐して。道理を以て此の身の始終を尋ぬべし。身體髮膚は。父母の二滴。一息とゞまりぬれば。山野に離散して。終に泥土となる。何を持ちてか身と執せん。況や法を以て見れば。十八界の聚散。いづれの法をか決定して。我が身とせん。教内教外別なりとも。我が身の始終不可得なることを。行道の用心とすること。是れ同じ。先づ此の道理に達すれば。寔の佛道



顯然なるものなり。

一日示して云く。古人云く。親近善者。如霧露中行。雖不濕衣。時時有潤。謂ふ心は善人になるれば。覺えざるに善人となるなり。昔俱胝和尚に仕へし一人の童子のごときは。いつ學じいつ修したりとも見えず。覺えざれども久參に近づいたる故に悟道す。坐禪も自然に久しくせば。忽然として大事を發明して。坐禪の正門なることを知るべきなり。

嘉禎二年臘月除夜。始めて懷柴を興聖寺の首座に請す。即ち小參の次。初めて秉拂を首座に請ふ。是れ興聖寺最初の首座なり。小參の趣は。宗門の佛法傳來の事を舉揚するなり。初祖西來して少林に居して。機をまち時を期して。面壁して坐せしに。某の歳の窮臘に。神光來參しき。初祖最上乘の器なりと知りて。接得して。衣法共に相承傳來して。兒孫天下に流布し。正法今日に弘通す。當時始めて首座を請し。今日初めて秉拂を行なはしむ。衆の少きを憂ふること莫かれ。身の

初心なるを顧ることなかれ。汾陽は僅に六七人。藥山は十衆に滿たざるなり。然あれども皆佛祖の道を行じき。是れを叢林の盛んなると云ひき。見ずや。竹の聲に道を悟り。桃の花に心を明らむ。竹豈に利鈍あり。迷悟あらんや。花何ぞ淺深あり。賢愚あらん。花は年年に開くれども。人みな得悟するに非ず。竹は時時に響けども。聞く者盡く證道するにあらず。たゞ久參修持の功により。辨道勤勞の縁を得て。悟道明心するなり。是れ竹の聲の獨り利なるにあらず。亦花の色の殊に深きにあらず。竹の響き妙なりといへども。自ら鳴らず。瓦の縁をまちて聲を起す。花の色美なりといへども。獨り開くるにあらず。春風を得て開くるなり。學道の縁もまたかくの如し。此の道は。人人具足なれども。道を得る事は衆縁による。人人利なれども。道を行ずることは衆力を以てす。ゆゑに今心をひとつにし。志をもつはらにして。參究尋覓すべし。玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。いづれの玉か初めより光ある。誰人か初心より利なる。必



ずすべからくこれ琢磨し練磨すべし。自ら卑下して學道をゆるくすることなかれ。古人の云く。光陰空しくわたることなかれと。今問ふ。時光は惜むによりてとゞまるか。惜めどもとゞまらざるか。すべからくしるべし。时光は空しくわたらず。人は空しくわたることを人も時光とおなじく。いたづらに過ごすことなく。切に學道せよと云ふなり。かくの如く參究を同心にすべし。我れ獨り舉揚するも容易にするにあらざれども。佛祖行道の儀。大概みなかくの如くなり。如來の開示に隨ひて。得道するもの多けれども。亦阿難によりて悟道する人もありき。新首座。非器なりと卑下する事なかれ。洞山の麻三斤を舉揚して。同衆に示すべしと云ひて。座を下りて後ち再び鼓を鳴らして。首座乗拂す。是れ興聖最初の乗拂なり。懷奘三十九の歳なり。

一日示して云く。俗人の云く。何人か好衣を望まざらん。誰人か重味を食らざらん。然あれども道を存せんと思ふ人は。山に入り雲に眠

り。寒きをも忍び。飢ゑをも忍ぶ。先人苦しみなきに非ず。是れを忍びて道を守ればなり。後人は是れを聽いて。道を慕ひ徳を仰ぐな。俗りすら賢なるは猶ほかくの如し。佛道豈に然らざらんや。古人もみな金骨にはあらず。在世も悉く上器にあらず。大小の律藏によりて。諸の比丘をかながふるに。不可思議の不當の心を起すもありき。然あれども。後には皆得道し。羅漢となれり。見えたり。しかあれば我れらも賤しく拙しと云ふとも。發心修行せば。決定得道すべしと知りて。即ち發心するなり。古も皆苦を忍び寒にたへて。愁ひながら修行せしなり。今の學者。苦しく愁ふるとも。只しひて學道すべきなり。示して云く。學道の人。悟を得ざること。は。即ちたゞ舊見を存ずるゆゑなり。本より誰がおしへたりとも。知らざれども。心と云へば。念慮知覺なりと思ひ。心は草木なりと云へば。信ぜず。佛と云へば。相好光明あらんずると思つて。佛は瓦礫と説けば。耳を驚かす。かくのごときの執見。父も相傳せず。母も教授せず。只無理自然に久しく人のことば



につきて信じ來れることなり。然あれば今も佛祖決定の説なれば。あらためて心は艸木と云はば。便ち艸木を心と知り。佛は瓦礫といはゞ。瓦礫を便ち佛なりと信じて。本執をあらため去らば。道を得べきなり。古人の云く。日月あきらかなれども。浮雲是れをおほふ。叢蘭茂せんとすれども。秋風吹いて是れをやぶると。貞觀政要にこれを引いて。賢王と惡臣とに喩ふ。今云く。浮雲おほふとも。久しからず。秋風破るとも。亦開くべし。臣わるくとも。王の賢強くんば。轉ぜらるべからず。今佛道を存せんことも。亦かくの如くなるべし。いかに惡心おこるとも。かたく守り久しく保たは。浮雲もきえ。秋風も止まるべきの道理なり。

一日示して云く。學人初心のときは。道心ありても。無くても。經論聖教等を能くく見るべし。まなぶべし。我れ始めてまさに無常によりて。聊か道心を發し。終に山門を辭して。遍く諸方を訪ひ。道を修せしに。建仁寺に寓せし中間。正師にあはず。善友なき故に。迷りて邪念

を起しき。教道の師も。先づ學問先達にひとしくして。よき人と成り。國家にしられ。天下に名譽せん事を教訓する故に。教法等を學するにも。先づ此の國の上古の賢者にひとしからんことを思ひ。大師等にも同じからんと思ひき。因に高僧傳續高僧傳等を披見して。大唐の高僧佛法者の様子を見しに。今の師のおしへの如くにはあらず。亦我が起せるやうなる心は。皆經論傳記等には。いとひにくみけりと思ひしより。やうやく道理をかんがふれば。名聞を思ふとも。當代下劣の人によしと思はれんよりも。只上古の賢者。向後の善人をはつべし。ひとしからんことを思ふとも。此國の人よりも。唐土天竺の先達高僧をはびて。彼にひとしからんと思ふべし。乃至諸天冥衆諸佛菩薩等にひとしからんところ。思ふべし。この道理を得て後には。此の國の大師等は。土瓦の如くにおぼえて。從來の身心皆あらためき。佛の一期の行儀を見れば。王位をすて。山林に入り。成道の後も。一期乞食すと見えたり。律に云く。知家非家捨家出家と云云。古



人云く。奢りて上賢にひとしからんと思ふことなかれ。賤うして下賤にひとしからんと思ふことなかれと。云ふことろは。共に慢心なり。高うしても下らんことを忘るゝことなかれ。安うしても危からん事を忘るゝことなかれ。今日存するとも。明日もと思ふことなかれ。死の至りてちかくあやうきこと脚下にあり。

示して云く。愚癡なる人は。其の詮なきことを思ひ云ふなり。此こに。つかはるゝ老尼公ありけるが。當時いやしげにして在るをはづる顔にて。ともすれば人に向ひては。昔は上臈にてありしよしを語る。たとひ而今の人にさもありと思はれたりとも。なんの用とも覺えぬ。甚だ無用なりとおほゆるなり。皆人の思はくは。此の心あるかと。覺ゆるなり。道心の無きほども知られたり。是れらの心を改ためて。少し人には似るべきなり。亦或る入道の極めて無道心なるあり。去り難き知音にてある故に。道心おこらんこと。佛神に祈誓せよと云はんと。思ふ。定めて彼れ腹立して。中をたがふことあらん。然あれど

も道心を發さざらんには。得意にてもたがひに詮なかるべし。示して云く。古へに三たび復さふして。後に云へと。云ふ心は。凡そものを云はんとする時も。事を行ぜんとする時も。必ず三たび復さふして。後に言行すべしとなり。先儒のおもはくは。三度思ひかへりみるに。三度ながら善ならば。云ひ行へと云ふなり。宋土の賢人等の心は。三度復さふすと云ふは。幾度も復せといふ心なり。言よりさきに思ひ。行よりさきに思ひ。思ふたびごとに。かならず善ならば。言行すべきとなり。衲子も亦必ず然あるべし。我が思ふことも言ふことも。あしきことあるべき故に。まづ佛道に合ふや否やとかへりみ。自他の爲めに益ありやいなやと能く。思ひかへりみて。後に善なるべくんば。行ひもし言ひもすべきなり。行者若しかくのごとく心を守らば。一期佛意に背かざるべし。予昔年初めて建仁寺に入りし時は。僧衆隨分に三業を守りて。佛道の爲め。利他のために。惡しきことをば。云はじせじと。各各志せしなり。僧正の徳の餘殘ありしほどは。



かくの如くなりき。今時は其の儀なし。今の學者しるべし。決定して自他の爲め。佛道の爲めに詮あるべきことならば。身をわすれても言ひ。もしは行ひもすべきなり。其の詮なきことは。言行すべからず。宿老耆年の言行する時は。末臘の人は。言をまじゆべからず。是れ佛制なり。能く。是れを思ふべし。身をわすれて道を思ふことは。俗なほ此の心あり。むかし趙の藺相如と云ひし者は。下賤の人なりし。かども賢なるによりて。趙王にめしつかはれて。天下の事をおこなひき。趙王の使として。趙璧と云ふ玉を秦の國へつかはさしめたまふ。彼の璧を十五城にかえんと。秦王の云ひし故に。相如にもたせてつかはすに。餘の臣下議して云く。是れほどの寶を相如ごときの賤人に持たせてつかはすこと。國に人なきに似たり。餘臣のはぢなり。後代のそしりなるべし。みちにて此の相如を殺して。璧を奪ひ取らんと議しけるを。ときの人ひそかに相如にかたりて。此のたびの使を辭して。命を保つべしと云ひければ。相如云く。某敢て辭すべから

ず。相如王の使として。璧を持ちて秦にむかふに。佞臣の爲めに殺されたる。と後代に聞へんは。我がためによるこびなり。我が身は死すとも。賢の名は残るべしと云ひて。終にむかひぬ。餘臣も此の言を聽きて。我れら此の人をうちうる。ことあるべからずとて。とまりぬ。相如つひに秦王に見えて。璧を秦王にあたふるに。秦王十五城をあつたふまじき氣色見えたり。時に相如はかりごとを以て。秦王にかたりて云く。その璧にきざりあり。我れ是れを示さんと云ひて。璧をこひ取て。後に相如が云く。王の氣色を見るに。十五城を惜める氣色あり。然あらば。我が頭を以て。此の璧を銅柱にあて。うちわりてんと云ひて。噴れる眼を以て。王を見て。銅柱のもとによる氣色まことに。王をも犯しつべかりし。時に秦王の云く。汝璧をわることなかれ。十五城を與ふべし。あひはからんほど。汝璧を持つべしと云ひしかば。相如ひそかに人をして。璧を本國へかへしぬ。後に亦泄池と云ふ處にて。趙王と秦王とあそびしに。趙王は琵琶の上手なり。秦王命じて



彈ぜしむ。趙王。相如にも云ひ合せずして。即ち琵琶を弾じき。時に相如。趙王の秦王の命に隨へることを嗔りて。我れ行いて秦王に簫を吹かしめんと云ひて。秦王につげて云く。王は簫の上手なり。趙王聞かんことをねがふ。王吹きたまふべしと云ひしかば。秦王是れを辭す。相如が云く。王若し辭せば。王をうつべしと云ふ。時に秦の將軍。劔を以て近づきよる。相如これをにらむに。兩目ほころびさけてけり。將軍恐れて劔をぬかずして歸りしかば。秦王つひに簫を吹くと云へり。亦後に相如。大臣となりて。天下の事を行ひし時に。かたはらの大臣。我れにまかさぬ事をそねみて。相如をうたんと擬する時に。相如は處々ににげかくれ。わざと參内の時も參會せず。おちをそれたる氣色なり。時に相如が家人いはく。かの大臣をうたんこと易きことなり。なんが故にかおぢかくれさせたまふと云ふ。相如が云く。我れ彼れをおそるゝにあらず。我が眼を以て。秦の將軍をも退け。秦の壁をも奪ひき。彼の大臣うつべきこと。云ふにも足らず。然あれども

いくさを起し。つはものを集むることは。敵國を防ぐためなり。今左右の大臣として國を守るもの。若し二人なかをたがひて。いくさを起して一人死せば。一方缺くべし。然あらば隣國喜びて。いくさを起すべし。かるがゆゑに。二人ともに全うして國を守らんと思ふ故に。彼れといくさを起さずと云ふ。かの大臣。此のことばを聞きて。はぢて還て來り拜して。二人共に和して國をおさめしなり。相如身をわすれて道存すること。かくの如し。今佛道を存することも。彼の相如が心の如くなるべし。寧ろ道ありては死すとも道無うして。いくることなかれと云云。

示して云く。善惡と云ふこと定め難し。世間の人は。綾羅錦繡をきたるをよしと云ふ。麤布糞掃衣をわるしと云ふ。佛法には此れをよしとし。清しとし。金銀錦綾をわるしとし。けがれたりとす。かくの如く一切のことにわたりて皆然り。予が如きも聊か韻聲をとゝのへ文字をかきすぐるゝを俗人等は尋常ならぬことに云ふもあり。亦或



る人は出家學道の身としてかくの如きのこと知れると。そしる人もあり。いづれをか定めて善として取り。惡としてすつべきぞ。文に云く。ほめて白品の中にあるを善と云ふ。そしりて黒品の中におくを惡と云ふと。亦云く。苦を受くべきを惡と云ふ。樂をまねくべきを善と云ふと。かくの如く子細に分別して。眞實の善を見て行じ。眞實の惡を見てすつべきなり。僧は清淨の中より來れるものなれば。人の欲を起すまじきものを以てよしとし。きよきとするなり。

示して云く。世間の人多分云く。學道のこゝろざしあれども。世は末世なり。人は下劣なり。如法の修行には。たゆべからず。只隨分にやすきにつきて。結縁を思ひ。他生に開悟を期すべしと。今云ふ此の言は。全く非なり。佛教に正像末を立つること暫く一途の方便なり。在世の比丘必ずしも皆すぐれたるにあらず。不可思議に。希有にあさましく。下根なるもありき。故に佛種々の戒法等をまうけ玉ふこと。皆わるき衆生。下根の爲めなり。人人皆佛法の器なり。かならず非器な

りと思ふことなかれ。依行せば必ず證を得べきなり。既に心あれば善惡を分別しつべし。手あり足あり。合掌歩行にかげたる事あるべからず。しかあれば佛法を行ずるには器をえらぶべきにあらず。人界の生は皆是れ器量なり。餘の畜生等の生にてはかなふべからず。學道の人。只明日を期することなかれ。今日今時ばかり。佛法に隨ひて行じゆくべきなり。

示して云く。俗の云く。城を傾むくることは中にさゝやき言出來るに依るなりと。亦云く。家に兩言ある時は。針をも買ふことなし。家に兩言なき時は。金をも買ふあたひありと。俗猶ほ家をたもち城を守るに。同心ならざれば終にほろぶと云へり。況や出家人は。一師に學して。水乳の和合せるが如くすべし。亦六和敬の法あり。各々寮々をかまへて。身をへだて。心心に學道の用心することなかれ。一船にのりて海をわたるが如し。同心に威儀を同うした。がひに非を改め。是れに隨ひて。同じく學道すべきなり。是れ佛在世より行じ來れる



儀式なり。

示して云く。楊岐山の會禪師はじめ住持の時。寺院舊損して。僧のわづらひありし時。知事申して云く。修理あるべしと。會の云く。堂閣破れたりとも。露地樹下にはまざるべし。一方破れてもらば。一方のもらぬ處に居して坐禪すべし。堂宇造作によりて。僧衆悟を得べくんば。金玉を以てもつくるべし。悟は居所の善惡にはよらず。只坐禪の功の多少にあるべしと。翌日の上堂に云く。楊岐乍住屋壁疎。滿床盡撒雪珍珠。縮卻頂暗嗟。良久云。翻憶古人樹下居と。たゞ佛道のみにあらず。政道も亦かくの如し。唐の太宗はいへをつくらず。龍牙云く。學道先須且學貧。學貧後道方親と云ふ。昔釋尊より今に至るまで。眞實學道の人。たからにゆたかなりとは。聞かず見ざるなり。一日或る客僧問うて云く。近代通世の法は。各各齋料等のことをかまへ。用意して後のわづらひなきやうに支度す。是れ小事なりといへども。學道の資縁なり。かけぬれば。ことの違亂出来る。今師の御様

を承り及ぶには。一切其の支度なく。只天運にまかすと。若し實にかくのごとくならば。後時の違亂あらんか。いかん。

答へて云く。事皆先證あり。敢て私曲を存するにあらず。西天東地の佛祖皆かくの如し。白毫一分の福の盡くる期あるべからず。何ぞ私に活計をいたさん。亦明日の事は。いかにすべしとも。定め圖り難し。此の様は。佛祖のみな行じ來れる所にて私なし。若し事闕如して絶食せば。其の時にのぞんで方便をもめぐらさぬ。兼ねて是れを思ふべきことにはあらざるなり。

示して云く。傳へ聞く。實否は知らざれども。故持明院の中納言入道あるとき。祕藏の太刀を盗まれたりけるに。士の中に犯人ありけるを。餘の士沙汰し出だしてまひらせたりしに。入道の云へらく。此れは我が太刀にあらず。ひがことなりとて。かへされたり。決定その太刀なれども。士の恥辱を思うてかへされたりと。人皆是れを知りけれども。其の時は無爲にしてすぎけり。故に子孫も繁昌せり。俗なほ



心ある人はかくの如し。いはんや出家人。必ず此の心あるべし。出家人はもとより身に財寶なければ。智慧功德を以てたからとす。他の無道心なるひがことななどを直に面にあらはして非におとすべからず。方便を以て彼れのはらたつまじき様に云ふべきなり。暴悪なるは其の法久しからずと云ふ。設ひ法を以て呵嘖するとも。あらしき言葉なるは。法も久しからざるなり。小人下器は。いさゝかも人のあらしき言葉に。必ず即ちはらたち。恥辱を思ふなり。大人上器には似るべからず。大人はしかあらず。設ひ打たるれども報を思はず。今我が國には小人多し。つゝしまずんばあるべからざるなり。

正法眼藏隨聞記第四終

正法眼藏隨聞記第五

侍者 懷奘 編

一日示して云く。佛法の爲めには。身命を惜むことなかれ。俗猶ほ道の爲めには。身命をすて親族をかへりみず。忠を盡し節を守る。是れを忠臣とも云ひ。賢者とも云ふなり。昔漢の高祖隣國といくさを起す時。ある臣下の母。敵國にありき。官軍も二た心有らんかと疑ひき。高祖も彼れ若し母を思ひて。敵國へさることもやあらんずらん。若しさあらば軍やぶるべしとてあやぶむ。爰に彼の母も我が子もし我れによりて我が國へ來ることもやあらんかとおもひ。誠めていはく。われによりていくさの忠をゆるくすることなかれ。我れもしいきていたらば汝二た心もやあらんと云ひて。劔に身をなげてうせてけり。其の子本より二た心なかりしかば。其のいくさに忠節を致す志深かりけると云ふ。況や衲子の佛道を存するも。必ず二た心無き時。まことに佛道に契ふべし。佛道には。慈悲智慧本よりそなは



る人もあり。設ひ無き人も。學すれば得るなり。只身心を俱に放下して。佛法の大海に廻向して。佛法の教に任せて。私曲を存ずることなかれ。亦漢の高祖の時。或る賢臣の云く。政道の理亂は。なはの結ほれるを解くが如し。急にすべからず。能くくむすびめを見てとくべしと。佛道も亦かくの如し。能くく道理を心得て行ずべきなり。法門を能く心得る人は。必ず強き道心ある人。よく心得るなり。いかに利智聰明なる人も。無道心にして。吾我をも離れえず。名利をも棄てえぬ人は。道者ともならず。正理をも心得ぬなり。

示して云く。學道の人は。吾我の爲めに佛法を學することなかれ。只佛法の爲めに佛法を學すべきなり。其の故實は。我が身心を一物ものこさず。放下して。佛法の大海に廻向すべきなり。其の後は。一切の是非管することなく。我が心を存することなく。なし難く忍び難きことなりとも。佛法の爲めに。つかはれて。しひて。此れをなすべし。我が心に強ひて。なしたきことなりとも。佛法の道理なるべからざる

事は。放捨すべきなり。穴賢。佛道修行の功を以て。かはりに善果を得んと思ふことなかれ。只一度佛道に廻向しつる上は。再び自己をかへりみず。佛法のおきてに任せて行じゆいて。私曲を存することなかれ。先證皆かくの如し。心にねがひ求むることなければ。即ち大安樂なり。世間の人も。他にまじはらず。己れが家ばかりにて生長したる人は。心のまゝにふるまひ。己が心を先として。人目をしらず。人の心を兼ねざる人は。必ずあしきなり。學道の用心も亦かくのごとし。衆にまじはり。師に順じて。我見を立せず。心をあらためゆけば。たやすく道者となるなり。學道は先づすべからず。貧を學すべし。名をすて利をすて。一切諂ふことなく。萬事なげすつれば。必ずよき道人となるなり。大宋國によき僧と人にも知られたる人は。皆貧窮人なり。衣服もやぶれ。諸縁も乏しきなり。往日天童山の書記。道如上座と云ひし人は。官人宰相の子なり。しかれども親族をも遠離し。世利を貪らざりしかば。衣服のやつれ。破壊したること。日もあてられざりし



かども。道德人に知られて。名辯大寺の書記とも成られしなり。予あるとき如上座に問うて云く。和尚は官人の子息にて。富貴の種族なり。何ぞ身にちかづくる物。皆下品にして貧窮なるや。如上座答へて云く。僧となればなり。

一日示して云く。俗人の云く。實はよく身を害する怨なり。昔も是れあり。今も之れ有り。と云ふこゝろは。昔一人の俗人あり。一人の美女をもてり。時に威勢ある人は是れを請ふ。彼の夫是れを惜む。終に兵を起して其の家を圍めり。既に奪ひ取られんとする時。夫が云く。我れ汝が爲めに命を失ふと。女が云く。我れも夫の爲めに命を失はんと云ひて。高樓より落ちて死す。そのうち彼の夫うちもらされて。後に物語りにせしとなり。亦云く。昔一人の賢人。州吏として國政を行ふ時に。息男あり。官事によりて父を辭し。拜して去る。時に父一疋の縑を與ふ。息の云く。君は高亮なり。此の縑いつくよりか得たるや。父云く。俸祿のあまりなり。と息さりて。皇帝に奉りまいらせて。その由を

奏す。帝太だ其の賢なることを感じたまふ。息男申さく。父は名をかくす。我れは名を顯はす。眞に父の賢勝れたり。此の心は。一疋の縑は。是れ少分なれども。賢人は私用せざること聞へたり。亦寔の賢人は名をかくす。俸祿なれば使用するよしを云ふなり。俗人猶ほ然り。況や學道の衲子。私を存することなかれ。亦寔の道を好まば。道者の名をかくすべきなり。亦云く。仙人ありき。或る人問うて云く。如何して仙を得ん。仙人の云く。仙を得んと思はば。仙道を好むべし。然れば學人も。佛祖の道を得んと思はば。須く佛祖の道を好むべし。示して云く。昔國王あり。國を治めて後に。諸の臣下に問ふ。我れ好く國を治む。よく賢なりや。と諸臣みな云く。帝甚だよく治む。太だ賢なり。と。時に一臣ありて云く。帝は賢ならず。と。帝の云く。故は如何。臣が云く。國を治めて後。帝の弟に與へずして。息に與ふ。と。帝の心にかなはずして。をひ立られて後。亦一臣に問ふ。朕よく仁なりや。臣が云く。甚だ仁なり。帝の云く。其の故いかに。臣が云く。仁君には必ず忠臣あ



り。忠臣は直言あるなり。前の臣太だ直言なり。是れ忠臣なり。仁君に  
あらずんば得じと。帝是れを感じて。即ち前の臣をめしかへさるゝ  
なり。亦云く。秦の始皇のとき。太子の花園をひろめんと。玉ふ。臣の  
云く。最もよし。花園ひろうして。鳥獸多く集りたらば。鳥獸を以て隣  
國の軍を防ぐべし。やと。是れに依つて。其の事止まりぬ。亦宮殿を作  
り。柱を漆にぬらんと。言ふ。臣の云く。最も然るべし。柱をぬりたらん  
には。敵とゞまらんかと。然あれば。其の事も止りぬ。儒教の心は。かく  
のごとく。たくみに言を以て。悪事をとゞめ。善事すゝめしなり。衲子  
の人を化する意巧も。其の心有るべきなり。  
一日僧問うて云く。智者の無道心なると。無智の有道心なると。始終  
いかん。

答へて云く。無智の有道心は。終に退すること多し。智慧ある人は無  
道心なれども。終には道心を起すなり。當世も現證是れ多し。然あれ  
は先づ道心の有無を云はず。學道を勤むべきなり。道を學せば只だ

貧なるべし。内外の書籍を見るに。貧うして居所もなく。或は滄浪の  
水に浮び。或は首陽の山にかくれ。或は樹下露地に端坐し。或は塚間  
深山に卓菴する人もあり。亦富貴にして財多く。朱漆をぬり。金玉を  
みがきて。宮殿等を造るもあり。俱に典籍にのせたり。然りといへど  
も。後代をすゝむるには。皆貧にして財なきを以て本とす。誦りて罪  
業を誠むるには。富みて財多きを。驕奢の者と云ひて。誹れるなり。  
示して云く。出家人は必ず人の施を受けて喜ぶことなかれ。亦受け  
ざることなかれ。故僧正の云く。人の供養を得て喜ぶは。佛制にたが  
ふ。喜ばざるは。檀越の心にたがふ。此の故。實用心は。我れに供養する  
に非ず。三寶に供養するなり。かるがゆゑに。彼の返事には。此の供養  
は三寶定めて納受有るべしと言ふべきなり。  
示して云く。古に謂ゆる君子の力は牛に勝れり。然あれども牛とあ  
らそはずと。今の學人。我が智慧才學人に勝れたりと存するとも。人  
と諍論を好むことなかれ。亦惡口を以て人を呵嘖し。怒目を以て人



を見ることなかれ。今時の人多く財をあたへ恩を施せども。嗔恚を現じ。悪口を以て謗言する故に。必ず逆心を起すなり。昔眞淨文和尚衆に示して云く。我れむかし雲峰とちぎりをむすんで學道せしとき。雲峰。同學と法門を論じ。衆寮にてたがひに高聲に論談し。つひには互に悪口に及び誼譁しき。諍論已にやんで。雲峰我れに謂ひて云く。我れと汝と同心同學なり。契約淺からず。何が故ぞ我れ人とあらそふに。口入をせざるやと。我れその時揖して恐惶せるのみなり。其の後彼れも一方の善知識たり。我れも今住持たり。往日おもひらく。雲峰の論談。畢竟無用なり。況や諍論は定まりて僻事なり。諍うて何の用ぞと思ひしかば。我れは無言にして止りぬと云云。今の學人も。最も是れを思ふべし。學道勤勞の志あらば。時光を惜みて學道すべし。何の暇まありてか人と諍論すべき。畢竟して自他共に無益なり。法門すらしかなり。いかに況や世間の事において。無益の論をなさんや。君子の力牛にも勝れりといへども。牛と諍はず。我れ法を知れ

り。彼れに勝れたりと思ふとも。論じて人を掠め難ずべからず。若し眞實の學道の人ありて法を問はば。法を惜むべからず。爲めに開示すべし。然あれども猶ほそれも三度問はれて。一度答ふべし。多言閑語することなかれ。我れも此の眞淨の語を見しより後。尤も此の答は我か身にもあり。是れ我れをいさめらるゝと思ひし故に。以後終に他と法門の諍論せざるなり。

示して云く。古人多くは云ふ。光陰空しく度ること莫かれ。亦云く。時光徒らに過すことなかれと。今學道の人。須く寸陰を惜むべし。露命消えやすし。時光速にうつる。暫も存する間餘事を管することなかれ。唯須く道を學すべし。今時の人。或は父母の恩を捨て難しと云ひ。或は主君の命に背き難しと云ひ。或は妻子眷屬に離れ難しと云ひ。或は眷屬等の活命存じ難しと云ひ。或は世人誹謗しつべしと云ひ。或は貧うして。道具調ひ難しと云ひ。或は非器にして學道に堪へがたしと云ふ。かくのごとく識情を廻らして。主君父母をも離れえず。



妻子眷屬をもすてえず。世情に随ひ。財寶を貪ほるほどに。一生空しく過こして。正しく命終の時に當りては後悔すべし。須く靜坐して道理を案じ。速に道心を起さんことを決定すべし。主君父母も我れに悟を與ふべからず。妻子眷屬も我が苦しみを救ふべからず。財寶も我が生死輪廻を截斷すべからず。世人も我れをたすくべきにあらず。非器なりと云ひて修せずんば。何れの劫にか得道せんや。只須く萬事を放下して。一向に學道すべし。後時を存することなかれ。示して云く。學道は須く吾我を離るべし。設ひ千經萬論を學し得たりとも。我執を離れずんば。終に魔坑に落つべし。古人の云く。若し佛法の身心なくんば。いづくんぞ佛となり祖と成らんと云云。我を離るゝと云ふは。我が身心を佛法の大海に抛向して。苦しく愁ふるとも。佛法に随うて修行するなり。若し乞食をせば。人は是れをわるしみにくしと思はんずるなれど。かくの如く思ふ間は。いかにしても佛法に入り得ざるなり。世の情見をすべて忘れて。唯道理に任せて學

道すべし。我か身の器量を顧み。佛法に契ふまじなど思ふも。我執を持ちたる故なり。人目を顧み人情を憚るは。即ち我執の本なり。只佛法を學すべし。世情に随ふことなかれ。

一日契問うて云く。叢林勤學の行履と云ふは如何。示して云く。只管打坐なり。或は樓上或は閣下に定を營み。人に交はりて雜談せず。聲者の如く。瘧者の如くにして。常に獨坐を好むべきなり。

一日參の次に示して云く。泉大道の云く。風に向ひて坐し。日に向ひて眠る。時の人の錦を被たるに勝りたりと云云。是の言は。古人の語なりといへども。少し疑あり。時の人と云ふは。世間貪利の人を云ふか。若し然らば敵對最も下れり。何ぞ云ふに足らん。若しは學道の人を云ふか。然らば何ぞ錦を被たるに勝れりと云ふや。此の心を察するに。猶ほ錦を重んずる心有るか。と聞へり。聖人は然あらず。金玉と瓦礫と。齊く執することなし。故に釋迦如來。牧牛女が乳粥を得て食



し。馬麥を得て食す。いづれも等くす。法に輕重なし。人に淺深あり。當世金玉を人に與ふれば重しとして取らず。亦木石などをば輕しとして是れを受けて愛す。金玉本より土の中より得たり。木石も大地より生ぜり。何ぞ一つをば重しとて取らず。一つをば輕しとて愛せん。此の心を案ずるに。重きを得ては執する心あらんか。輕きを得ても愛する心あらば。答は等しかるべし。是れ學人の用心すべき事なり。

示して云く。先師全和尚入宋せんとせし時。本師叡山の明融阿闍梨重病起り。病床にしづみ。既に死せんとす。其の時の師云く。我れ既に老病起り。死去せんこと近きにあり。今度暫く入宋をとまりたまひて。我が老病を扶けて。冥路を弔ひて。然して死去の後。其の本意をとげらるべしと。時に先師弟子法類等を集めて。議評して云く。我れ幼少の時。雙親の家を出てより後。此の師の養育を蒙りて。今成長せり。其の養育の恩最も重し。亦出世の法門。大小權實の教文。因果を

わきまへ是非をしりて。同輩にもこえ名譽を得たる事。亦佛法の道理を知りて。今入宋求法の志を起すまでも。偏に此の師の恩に非ずと云ふことなし。然るに今年すでに老極して。重病の床に臥したまへり。餘命存しがたし。再會期すべきにあらず。故にあなたがちに是れを留めたまふ。師の命もそむき難し。今身命を顧みず。入宋求法するも。菩薩の大悲利生の爲めなり。師の命を背きて。宋土に行かん道理有りや否や。各の思はるゝ處をのべらるべしと。時に諸弟人人皆云く。今年の入宋は留まらるべし。師の老病死已に極れり。死去決定せり。今年ばかり留まりて。明年入宋あらば。師の命を背かず。重恩をもわすれず。今一年半年。入宋遅きとても。何の妨げかあらん。師弟の本意相違せず。入宋の本意も如意なるべしと。時に我れ末臘にて云く。佛法の悟。今はさてかうこそありなると思召さるゝ儀ならば。御留まり然あるべしと。先師の云く。然あるなり。佛法修行これほどにてありなん。始終かくのごとくならば。即ち出離得道たらんかと存ず



と。我が云く、其の儀ならば御留まりたまひてしかあるべしと。時にかくのごとく各の總評し了りて、先師の云く、おのおの、評議いづれもみな留まるべき道理ばかりなり。我れが所存は然ならず。今度留まりたりとも。決定死ぬべき人ならば其れに依りて命を保つべきにもあらず。亦我れ留まりて看病外護せしによりたりとて、苦痛もやむべからず。亦最後に我れあつかひすゝめしによりて、生死を離れらるべき道理にもあらず。只一旦命に隨ひて、師の心を慰むるばかりなり。是れ即ち出離得道の爲めには一切無用なり。錯りて我が求法の志をさへしめられれば、罪業の因縁とも成りぬべし。然あるに若し入宋求法の志をとげて、一分の悟をも開きたらば、一人有漏の迷情に背くとも、多人得道の因縁と成りぬべし。此の功德もしすぐれば、すなはちこれ師の恩をも報じつべし。設ひ亦渡海の間にして本意をとげずとも、求法の志を以つて死せば、生生の願つきるべからず。玄奘三藏のあとを思ふべし。一人の爲めにうしなひやす

き時を空く過ごさんこと。佛意に合ふべからず。故に今度の入宋一向に思切り畢りぬと云ひて、終に入宋せられき。先師にとりて眞實の道心と存せしこと。是れらの道理なり。然あれば今の學人も、或は父母の爲め、或は師匠の爲めとて、無益の事を行じて、徒らに時を失ひて、諸道にすぐれたる佛道をさしをきて、空しく光陰を過ごすことなかれ。時に契問うて云く、眞實求法の爲めには、有爲の父母師匠の恩愛の障縁を一向にすつべき道理は、まことに然あるべし。たゞし父母師匠の恩愛等のかたは、一向に捨離すとも、亦菩薩の行を存せん時は、自利をさしをきて、利他を先きとすべきか。然あるに老師重病切にして、亦他人のたすくべきもなく、幸に保護の我れ一人、其の仁に當りたるを、自らの修行ばかりを思ひて、渠を扶けずんば、菩薩の行に背けるに似たるか。たゞ大士の善行をきらふべからず。縁に隨ひ事に觸れて、佛法を存すべきか。もしこれらの道理によらば、亦止まりてたすくべきか。何ぞ獨り求法を思ひて、老病の師を扶け



ざるや。いかん。示して云く。利他の行も自利の行も。たゞ劣なる方を捨て、勝なる方をとらば。大士の善行なるべし。老病を扶けんとて。水菽の孝をいたすは。只今生暫時の妄愛。迷情の喜びばかりなり。迷情の有爲に背いて。無爲の道を學せんは。設ひ遺恨は蒙ることありとも。出世の勝縁と成るべし。是れを思へ。是れを思へ。

一日示して云く。世間の人多く云ふ。某師の言を聞けども。我が心に叶はずと。此の言は非なり。知らず其のこゝろいかん。若しは聖教等の道理の我が心に違背して非なりと思ふか。これは一向の凡愚なり。亦は師の云へる言が。我が心に契はざるか。若し然らば。なんぞはじめより師に問ふや。亦日來の情見を以て云ふか。もし、かあらば。是れは無始よりこのかたの妄念なり。學道の用心と云ふは。我が心にたがへども。師の言は聖教の言理ならば。全く其れに隨ひて。本の我見をすて、あらためゆくべし。此の心が學道第一の故實なり。われ昔日我が朋輩の中に。我見を執して知識をとふらひける者あ

りき。我が心に違するをば心得ずと云ひて。我見にあひかなふをば執して。一生空くすぎて。佛法を會せざりけり。我れそれを見て。智發してしりぬ。學道は然あるべからずと。かく思ひて師の言に隨ひて。全く道理を得て。其の後看經の次に。或る經に云く。佛法を學せんと思はゞ。三世の心を相續することなかれと。誠に知りぬ。さきの諸念舊見を記持せずして。次第にあらためゆくべきなりと云ふことを。書に云く。忠言逆耳。いふこゝろは。我が爲めに忠有るべきことばハ。必ず耳に違するなり。違するとも強ひて隨ひ行せば。畢竟して益有るべきなり。

一日雜談の次に。示して云く。人の心木より善惡なし。善惡は縁に隨ひて起る。喩へば人發心して山林に入る時は。林下はよし。人間は惡ししとおほゆ。亦退屈の心にて。山林を出る時は。山林は惡ししとおほゆ。是れ即ち決定して心に定相なし。縁に隨ひて兎も角もなるなり。かるが故に善縁にあへば心よくなり。惡縁に近づけば心惡しく



なるなり。我が心本より悪ししと思ふことなかれ。只善縁に随ふべきなり。

亦云く。人の心は決定人の言に随ふと存ず。大論に云く。喩へば愚人の手に摩尼珠をもてるが如し。人は是れを見て。汝下劣なり。自ら手に物をもてりと云ふを聞きて。おもはく。珠はをし。名聞は深し。我れは下劣ならんとおもふ。思ひ煩うて。猶ほ只名聞にひかれ。人の言について。珠を捨て他人にとらしめんと思ふほどに。終に珠を失ふと云云。人の心はかくのごとし。一定此の言我れが爲めによしと思へども。名聞にさへられて。それに順はざるもあり。亦一定我が爲めに。あしき事と思ひながらも。名聞の爲めなれば。先づ随ふ人もあり。悪にも善にも随ふときは。心は善悪につるゝなり。故にいかにもとより。悪しき心なりとも。善知識に随ひ。良人に馴るれば。自然に心もよくなるなり。悪人に近づけば。我が心にも初めは悪ししと思へども。終にその人のこゝろに随ひ。馴るるほどに。おぼえずやがて實に悪

しく成るなり。亦人の心決定して。他に物をとらせじと思へども。他人強ひてこひぬれば。にくしとおもひ。いやながらも。與ふるなり。亦決定して。與へんと思へども。便宜なく。時すぎぬれば。亦やむ事も有るなり。然あれば。學人たとひ道心なくとも。良人に近づき。善縁にあうて。同じ事をいくたびも聞き見るべきなり。この言一度聞きたらば。重ねて聞くべからずと思ふことなかれ。道心一度起したる人も。同じ事なれども。聞くたびごとに。心みがゝれて。いよく精進するなり。亦無道心の人も。一度二度こそつれなくとも。度度聞きぬれば。霧露の中に行くが如く。いつぬるゝとも。覺えざれども。自然に衣のうるほふが如く。良人の言をいくたびも聞けば。自然にはづる心も起り。實の道心も起るなり。故に知りたる上にも。聖教をばいくたびも見ると。師の言も。聞きたる上にも。重ねて聞くべし。いよくふかき心有るべきなり。學道の爲めに。さはりと成りべき事を。ば重ねて。是れに近づくべからず。善友には。くるしく。わびしくとも。近づ



きて行道すべきなり。

示して云く。大慧禪師ある時尻に腫物出ぬれば。醫師此れを見て。大事の物なりと云ふ。慧の云く。大事の物ならば死ぬべきや否や。醫師云く。ほとんどあやうかるべし。慧の云く。若し死ぬべくんば。彌よ坐禪すべしと云ひて。猶を強ひて坐しければ。其の腫物うみつぶれて。別の事なかりき。古人の心かくのごとし。病をうけては。彌よ坐禪せしなり。今の入病なりして。坐禪ゆるくすべからず。病は心に隨ひて。轉ずるかと思ゆ。世間にしやくりする人に。虚言してわびつべき事を云ひつげぬれば。それをわびしつべき事に思ひ心に入れて。陳ぜんとするほどに。忘れて其のしやくり留りぬ。我れもそのかみ人宋の時。船中にて。痢病せしに。惡風出來て。船中さはぎける時。やまふ忘れて止まりぬ。是れを以て。思ふに。學道勤勞して。他事を忘るれば。病も起るまじきかと覺ゆるなり。

示して云く。俗の野諺に云く。啞せず聲せざれば。家公とならずと。云

ふこゝろは。人の毀謗をきかず。人の不可をいはざれば。よく我が事を成ずるなり。かくのごとくなる人を。家の大人とするなりと。是れ野諺なりといへども。是れを取りて。衲僧の行履に用ゆへし。他のそしりにとりあはず。他の恨みにとりあはず。他の是非をいはずして。如何が道を行せん。徹骨徹髓の者は。是れを得べきなり。

示して云く。大慧禪師の云く。學道は須く人の千萬貫の錢を債ひけるが。一文をも持たざるに。乞ひ責めらるゝ時の如くすべし。若しこの心あれば。道を得ることやすしといへり。信心銘に云く。至道かたきことなし。唯だ揀擇を嫌ふと。揀擇の心だに。放下しぬれば。直下に承當するなり。揀擇の心を放下すると云ふは。我をはなるゝなり。佛道を行じて。代りに利益を得ん爲めに。佛法を學すと思ふことなから。只佛法の爲めに。佛法を修行すべきなり。縦ひ千經萬論を學し得て。坐禪の床を坐破するとも。此の心なくんば。佛祖の道を得べからず。只すべからく。身心を放下して。佛法の中に置きて。他に隨ひて舊



見なければ。即ち直下に承當するなり。

示して云く。古人の云く。所有の庫司の財穀をば。因を知り果を知る。知事に分付して。司を分ち局を列ねて。是れを司らしむと。いふこと。主人は寺院の大小の事都べて管せず。只管工夫打坐して。大衆を勸むべきゆゑなり。亦云く。良田萬頃よりも薄藝身に隨はんには。しかず。施恩は報をのぞまず。人に與へて悔ゆることなかれ。口を守る。こと鼻の如くすれば。萬禍も及ばずと云へり。行高ければ人自ら重んじ。才多ければ人自ら歸伏するなり。深く耕して浅くうゆる。猶ほ天災あり。己を利して人を損する。豈に果報なからんや。學道の人。話頭を見る時。目を近づけ力を盡して。能くく見るべし。

示して云く。古人の云く。百尺の竿頭にさらに一步をすゝむべしと。此の心は。十丈の竿のさきにのぼりて。なほ手足をはなちて。すなはち身心を放下するが如くすべし。是れに付きて。重々の事あり。今時の人は。世をのがれ家を出ぬるに似たれども。其の行履をかんがふ

れば。なほ實に出家の遁世にてはなきなり。いはゆる出家と云ふは。第一まづ吾我名利を離るべきなり。是れを離れずんば。行道は頭燃を拂ひ。精進は翹足をしるとも。只無理の勤苦のみにて。出離にはあらざるなり。大宋國にも離れ難き恩愛を離れ。捨て難き世財を捨て。叢林にまじはり。祖席をふる人あれども。審細に此の故實を知らずして。行ずる故に。道をも悟らず。心をも明めずして。徒らに一期を空しく過ごすもあり。その故は。人の心も初めは道心を起して。僧にもなり。知識にも隨へども。佛となり祖とならん事をば。思はずして。身の貴く我が寺の貴きよしを。施主檀那にも知られ。親類眷屬にもいひきかせて。人にたふとびられ。供養せられんと思ひ。剩へ衆僧は皆無常不善なれども。我れ獨り道心もあり。善人なる由を方便して云ひきかせ。思ひしらせんとする様もあり。是れ等は云ふに足ざるもの。五闍提等の惡比丘のごとし。決定地獄に落つる心ばへなり。これをものもしらぬ一向の在家人は。道心者貴き人なりと思へり。此れ



を少したちいで、施主檀那をも貪らず。父母妻子をも捨てはて、叢林に交りて行道するもあれども。本性懶惰懈怠なる者は、ありのままに懈怠する事も慙かしければ。長老首座等の見る時は、相ひかまへて行道するよしをなして。見ざる時は、事に觸れて怠り。徒らにおくも。猶ほ吾我名利を捨得ざるなり。亦總じて師の心もかねず。首座兄弟の見るをも見ざるをも顧ず。常に思はく。佛道は人の爲めならず。身の爲めなりとて。我が身心こそ佛となり。祖とはならんと眞實に勤め營む人もあり。是れは以前の人人よりはまことの道者かと思ゆれども。これも猶ほ我が身よくならんと思ひて修する故に。なほいまだ吾我を離れず。亦諸佛菩薩に隨喜せられんことを思ひ。佛果菩提を成ぜんことを思ふも。我欲名利の心をほすて得ざる故なり。此等までは。いまだ百尺の竿頭を離れず。とりつきたるが如し。只身心を佛法になげすて、更に悟道得法までをも望むことなく修

行するを以て。是れを不汚染の行人とは云ふなり。有佛の處にもとゞまることをえず。無佛の處をも急に走過すと云ふは。此の心なり。示して云く。衣食の事は。兼ねてより思ひあてがふことをなかれ。若し失食絶煙せば。其の時に臨んで乞食せん。その人に用事いはんなど思ひ設けたるも。即ち物を貯ふる邪命食にて有るなり。衲子は雲の如く定まれる住所もなく。水の如くに流れゆきて。よる處もなきをこそ僧とは云ふなり。縦ひ衣鉢の外に一物も持たずとも。一人の檀那をも頼み。一類の親族をも頼むは。即ち自他ともに縛住せられて。不淨食にてあるなり。かくのごとくの不淨食等を以て。やしなひもちたる身心にて。諸佛清淨の大法を悟らんと思ふとも。とても契ふまじきなり。たとへば。藍にそめたる物は青く。麩にそめたる物は黄なるが如く。邪命食を以てそめたる身心は。即ち邪命身なるべし。此の身心を以て佛法をのぞまば。沙を壓して油を求むるが如し。只時にのぞみて。兎も角も道理に契ふやうには。からふべきなり。かねて



とかく思ひたくはふるは皆たがふことなり。能くく 思量すべきなり。

示して云く。學人各知るべし。人大なる非あり。憍奢是れ第一の非なり。内外の典籍に是れを等しく戒めたり。外典に云く。貧うして詔らはざるはあれども。富んで奢らざるはなしといひて。なほ富を制して。奢らざらんことを思ふなり。最もこれ大事なり。よくく 此れを思ふべし。我が身下賤にして。高貴の人におとらじと思ひ。人に勝れんと思ふは。憍慢のはなはだしきものなり。しかあれど。是れは戒めやすし。亦世間に自體財寶に豊かに福分もある人は。眷屬も閑逸し。人もゆるす。それを是とし。憍るゆゑに。傍の賤き人は。これを見て。うらやみ。いたむべし。人のいたみを。自體富貴の人。いかやうにかつゝしむべきや。かくの如き人は。戒めがたく。その身も慎むことならざるなり。亦心に憍心はなけれも。ありのまゝにふるまへば。傍の賤き人は。うらやみ。いたむべきなり。是れをよくつゝしむを。憍奢をつ

つしむとは云ふなり。我が身の富は果報にまかせて。貧賤の人。見てうらやむを。はゞからざるを。憍心と云ふなり。外典に云く。貧家の前を車に乗りて。過ぐることをなかれと。しかあれば。我が身朱車にのるべくとも。貧人のまへをばはゞかるべしと云云。内典も亦かくの如し。然あるに今の學人僧侶は。智慧法門を以て人に勝つべきと思ふなり。必ず是れを以て憍ることなかれ。我れより劣れる人のうへの非義を云ひ。或は先人傍輩等の非義をしりて。いひ誹謗するは。是れ憍奢のはなはだしきなり。古人の云く。智者の邊にしてはまくと。も愚者の邊にして勝つべからずと云云。我れがよく知りたる事を。人の悪しく心得たりとも。他の非を云ふは。亦是れ我れが非なり。法門をいふとも。先人先輩を誹らず。亦愚癡朦昧なる人のうらやみ。ねたみつべきところにては。能くく 是れを思惟すべし。予も建仁寺に寓せし時。人多く法門等を問ひき。その中には非義も過患も有りしかども。此の儀をふかく存じて。只ありのまゝに法の徳を語りて。



他の非をいはず。無爲にしてやみにき。愚者の執見ふかきは、我が先徳の非を云ふとて。かならず嗔恚を起すなり。智慧ある人の眞實なるは。佛法の道理をだにもこゝろえぬれば。人はいはざれども。我が非及び我が先徳の非をも思ひしりて。あらたむるなり。かくのごとき等の事。よく思ひしるべし。

示して云く。學道の最要は。坐禪。これ第一なり。大宋の人多く得道すること。みな坐禪のちからなり。一問不通にて。無才愚癡の人も。坐禪をもはらすれば。その禪定の功によりて。多年の久學聰明の人にも勝るゝなり。しかあれば。學人は。祇管打坐して。他を管することなかれ。佛祖の道は。只坐禪なり。他事に順ずべからず。ときに契問うて云く。打坐と看讀とならべて。此れを學するに。語録公案等を見るには。百千に一つも。聊か心得ることも。出來るなり。坐禪には。それほどのこと。の驗もなし。然あれども。猶ほ坐禪を好むべきか。答へて云く。公案話頭を見て。聊か知覺有る様なりとも。それは佛祖の道にとをさ

かる因縁なり。無所得無所悟にて。端坐して。時を移さば。即ち祖道なるべし。古人も。看讀祇管坐禪ともに。勧めたれども。猶ほ坐をもはらにすゝめしなり。亦話頭に依りて。さとりをひらきたる人あれども。其れも坐の功に依りて。さとりのひらくる因縁なり。まさしき功は。坐によるべし。

正法眼藏隨聞記第五終



## 正法眼藏隨聞記第六

侍者 懷奘 編

示して云く。人を愧づべくんば。明眼の人を愧づべし。予在宋の時。天童の淨和尚。侍者に請するにいはく。元子は外國人たりといへども。器量人なりと云ひて請す。予堅く此れを辭す。其の故は。和國に聞へん爲めにも。學道の稽古の爲めにも。大切なれども。衆中に具眼の人ありて。外國人として。大叢林の侍者たらんこと。大國に人なきに似たりと難ずることやあらん。最もはぢつべしと思ひて。書狀を以て。此の旨をのべしかば。淨和尚聞きて。國を重んじ人を愧づることを感じ。許して更に請し。玉はざりしなり。

示して云く。或る人の云く。我れは病者なり。非器なり。學道にはたへず。法門の最要を聞きて。獨住隱居して。身をやしなひ病をたすけて。一生を終へんと思ふと。これはただ非なり。先聖必ずしも金骨にあらず。古人豈に咸く皆上器ならんや。滅後を思へば。いくばくならず。

在世を考ふるに。人人みな俊なるにあらず。善人もあり。惡人もあり。比丘衆の中に。不可思議の惡行なるもあり。最下品の器量もあり。しかあれども。卑下し。やめりなんと稱して。道心をおこさず。非器なりと云ひて。學道せざるはなし。今生に若し學道修行せずんば。何れの生にか器量の人となり。無病の者と成りて。學道せんや。只身命を顧ず。發心修行すること。學道の最要なれ。

示して云く。學道の人。衣食を貪ることなかれ。人人皆食分あり。命分あり。非分の食命を求むるとも得べからず。況や學佛道の人には。おのづから施主の供養あり。常乞食たゆべからず。亦常住物もこれあり。私の營みにあらず。果齋と乞食と信心施との三種の食は。皆是れ清淨食なり。其餘の田商土工の四種の食は。皆不淨の邪命食なり。出家人の食分にあらず。昔一人の僧あり。死して冥途に行く。閻王の云く。此の人は命分いまだつきず。かへすべしと。冥官云く。命分つきずといへども。食分すでに盡く。王の云く。荷葉を食せしむべしと。し



かりしよりその僧よみかへりて後。人中の食物。食することをえず。只荷葉のみを食して。殘命を保てり。しかあれば出家は學佛のちからによりて。食分も盡くべからず。白毫の一相。二十年の遺因。歴劫に受用すとも盡くべきにあらず。たゞ行道を専らにして。衣食を求むべきにはあらざるなり。身體血肉だによくもてば。心も隨ひてよくなる。と。醫方等にも見えたり。いはんや學道の人。持戒梵行して。佛祖の行履に任せて。身を治むれば。心も隨ひて。調ふなり。學道の人。言を發せんとする時は。三度顧て。自利利他の爲めに。利あるべくんば。是れを云ふべし。利なからん。言語は止まるべし。かくのごときの事も。一度には得がたし。心にかけて。漸々に習ふべきなり。雜話の次に。示して云く。學道の人。衣食にわづらふことなかれ。此の國は邊地小國なりといへども。昔も今も顯密の二教に名を得。後代にも人にも知られたる人おほし。或は詩歌管絃の家。文武學藝の才。其の道を嗜む人もおほし。かくの如き人人。未だ一人も衣食に豊か

なりと云ふことを聞かず。皆貧を忍び。他事を忘れて。一向に其の道を好むゆゑに。其の名をも得るなり。いはんや祖門學道の人。は。渡世を捨て。一切名利に走らず。何としてか豊かなるべきぞ。大宋國の叢林には。末代（時）なりといへども。學道の人。千萬人ある中に。或は遠方より來り。或は郷土より出でたるも有り。いづれも多分は貧なり。しかあれども。いまだ貧をうれひとせず。只悟道の未だしきことをのみ愁ひて。或は樓上。或は閣下に坐して。考妣に喪するが如くにして。一向に佛道を修するなり。まのあたり見しことは。西川の僧。遠方より來りし故に所持の物なし。纔に墨二三丁もてり。そのあたひ兩三百文。此國の兩三十文にあたるを持ちて。唐土の紙の下品なる。極めて弱きを買ひとりて。襖。或は袴などに作りて。きぬれば。起ち居に破るゝおとして。あさましきをも顧ず。うれひざるなり。或る人の云く。汝郷里にかへりて。道具裝束と。のへよと。答へて云く。郷里遠方なり。路次の間。に光陰を空うして。學道の時を失せんことを憂ふ



と云ひて。猶ほ更に寒をも愁みずして學道せしなり。しかある故に大國にはよき人も出來るなり。示して云く。傳へ聞く。昔日雪峰山の開山の時は。寺貧窮にして。或は絶煙し。或は綠豆飯をむして食して。日を送りて學道せしかども。後には一千五百人の僧常に斷えざるなり。昔の人はかくのごとし。今もまたかくのごとくなるべし。僧の損ずることは。多く富貴より起るなり。如來在世。調達が嫉妬を起せしことも。日に五百車の供養より起れり。唯自らを損ずるのみに非ず。亦他をして惡をなさしむる因縁なり。實の學道の人。何としてか富貴なるべき。たとひ淨信の供養も。多くつもらば。恩の思ひを作して報を思ふべし。此の國の人は。亦我が爲めに利を思ひて施をいたす。笑ひて向へる者によく與るは。さだまれる世の道理なり。只他の心にしたがはんとしてなさば。これ學道の障りなるべし。只飢を忍び寒を忍んで。一向に學道すべきなり。

一日示して云く。古人の云く。聞くべし。見るべし。得るべし。亦云く。得ずんば見るべし。見ずんば聞くべしと。云ふ心は。聞かんよりは見るべし。見んよりは得るべし。未だ得ずんば見るべし。未だ見ずんば聞くべしとなり。

亦云く。學道の用心は。只本執を放下すべし。まづ身の威儀をさきとして。あらたむれば。心も隨うて改まるなり。先づ律儀戒行を守れば。心も隨うて改まるべし。宋土には。俗人等の常に習ひに。父母に孝養の爲めに。宗廟にて各各聚會し。泣くまねをするほどに。終には實に泣くなり。學道の人も。初めより道心なくとも。只しひて佛道を好み學せば。終には實の道心も起るべきなり。初心學道の人。只衆に隨うて行道すべきなり。はやく用心故實等を學し。知らんと思ふことなかれ。用心故實等のことも。只獨り山にも入り。市にもかくれて行せん時。あやまりなく。能く知りたるは。好きことなり。衆に隨うて行ぜば。道を得べきなり。たとへば船にのりて行くには。我れは漕ぎゆ



くやうをも知ざれどもよき船師に任せてゆけば知りたるも知ざるも彼の岸に至るが如し。善知識に随ひて衆と共に行じて私なれば自然に道人となるなり。學道の人たとひ悟を得ても今は至極と思つて行道をやむることなかれ。道は無窮なり。悟りても猶ほ行道すべし。むかし良遂座主の麻谷に參ずる因縁を思ふべし。示して云く。學道の人。後日をまちて行道せんと思ふことなかれ。たゞ今日今時をすごさずして。日日時時を勤むべきなり。爰にある在家人長病せしが。去年の春のころ。予にあひちぎりて云く。當時の病療治せば。必定妻子を捨て。寺の邊に庵室をかまへむすんで。一月兩度の布薩にあひ。日日行道法門談義を見聞して。隨分に戒行を守りて。生涯を送らんと云ひき。その後種々に療治せしに依りて少き減氣あり。しかれども亦再發ありて。日月空しくすごしき。今年正月より俄に大事になりて。苦痛次第にせむるほどに。日來支度する庵室の道具をはこびて。作るほどのひまもなき故に。先づ人の庵室

をかりて住せしが。わづかに一兩月の中に死し去りぬ。前夜に菩薩戒をうけ。三寶に歸して。臨終よくして終りぬれば。在家にて妻子に恩愛を惜み。狂亂して死せんよりは。尋常ならねども。去年思ひよりたりし時に。在家を離れて寺にちかづき。僧になれて行道して。をはりたらば。すぐれたらましと存するにつけても。佛道修行は後日を待つまじき事と覺ゆるなり。身の病者なれば。病を治して後より修行せんと思ふは。無道心のいたす所なり。四大和合の身は。誰か病無からん。古人必ずしも金骨にあらず。只志に至りぬれば。他事を忘れて行ずるなり。大事身の上に来れば。必ず小事を忘るゝ習ひなり。佛道は一大事なれば。一生に窮めんと思ひて。日日時時を空しくすごさじと思ふべきなり。古人の云く。光陰虚しく度ることなかれと云云。病を治せんと營むほどに。除かずして増氣し。苦痛いよゝせめば。少しも痛のかるかりし時に。行道せんと思ふべし。強き痛みを受けては。尙ほ重くならざるさきにと。思ふべし。重く成りては。死せざ



るさきにと思ふべきなり。病を治するには減ずるもあり増するもあり。亦治せざれども減じ。治するに増するもあり。これを能く思ひ分くべきなり。行道の人。居所等を支度し。衣鉢等を調へて。後に行道せんと思ふことなかれ。貧窮の人。衣鉢資具にともしくして。調ふを待つほどに。次第に臨終ちかづきよるはいかん。ゆゑに居所を待ち。衣鉢を調へて。後に行道せんと欲せば。一生空しく過ぐすべきなり。只衣鉢等はなけれども。在家も佛道は行ずるぞかしと思ひて行すべきなり。亦衣鉢等は只有るべき僧體のかざりなればなり。實の佛道行者はそれにもよらず。より來らば有るに任すべし。あながちに求むることなかれ。有りぬべきを持たじとも。思ふべからず。病も治しつべきをわざと死せんと思ひて治せざるも。外道の見なり。佛道の爲めには命を惜むことなかれ。亦惜まざることなかれ。より來らば。灸治一處煎藥一種など用ゐん事は。行道の障りともならじ。行道をさしおきて。病を治するをさきとして。後に修行せんと思ふ

は非なり。

示して云く。海中に龍門と云ふ處ありて。洪波しきりにたつなり。諸の魚ども彼の處を過ぎぬれば。必ず龍となるなり。故に龍門と云ふなり。いま思ふ彼の處。洪波も他所にことならず。水も同じくし。わはゆき水なり。然れども定まれる不思議にて。魚ども彼の處を渡れば。必ず龍と成る。魚の鱗もあらたまらず。身も同じ身ながら。たちまちに龍となるなり。衲子の儀式も亦かくのごとし。處も他所にことならねども。叢林に入りぬれば。必ず佛と成り祖となるなり。食も人と同じく喫し。衣も同じく服し。飢を除き寒を禦くことも齊しけれども。只髮を剃り。袈裟を着して。食を齋粥にすれば。忽ちに衲子と成るなり。成佛作祖遠く求むべきにあらず。只叢林に入ると入らざるとは。彼の龍門を過ぐると過ぎざるとの別の如し。亦俗の云く。我れ金を賣れども人の買ふなしと。佛祖の道も亦かくのごとし。道を惜むにはあらず。常に與ふれども人の得ざるなり。道を得ることは。根の



利鈍にはよらず。人人皆法を悟るべきなり。精進と懈怠とによりて。得道の遲速あり。進怠の不同は。志の至ると至らざるとなり。志の至らざることは。無常を思はざる故なり。念念に死去す。畢竟して且くも留まらず。暫く存せる間。時光を空しくすごすことなかれ。古語に云ふ。倉にすむ鼠食に飢ふ。田を耕す牛草に飽かずと。云ふ心は。食の中にありながら食にうゑ。草の中に住しながら草に乏し。人もかくのごとし。佛道の中に有りながら。道にかなはざるものなり。名利希求の心止まざれば。一生安樂ならざるなり。

示して云く。道者の行は。善行悪行につき。皆おもはくあり。凡人の量る所にあらず。昔慧心僧都。一日庭前に草を食ふ鹿を。人をして打ち追はしむ。時に或る人問うて云く。師慈悲なきに似り。草を惜みて畜生を惱ますか。僧都の云く。しかあらず。吾れ若し是れを打ち追はずんば。此の鹿つひに人になれて。悪人に近づかん時は。必ず殺されん。この故にうちおふなりと。これ鹿を打ち追ふは。慈悲なきに似たれ

ども。内心は慈悲の深き道理かくのごとし。

一日示して云く。人ありて。法門を問ひ。或は修行の法要を問ふことあらば。衲子はかならず實を以て是れを答ふべし。若くは他の非器を顧み。或は初心末學の人にて。心得べからずとして。方便不實を以て答ふべからず。菩薩戒の心は。縦ひ小乗の器ありて。小乗の道を問ふとも。只大乘を以て答ふべきなり。如來一期の化儀も亦同じ。方便の權教は實に無益なり。只最後の實教のみ實に益あり。しかあれば他の得不得を論ぜず。只實を以て答ふべきなり。若し箇中の人を見れば。實徳を以て是れを見るべし。外相假徳を以てこれを見るべからず。昔孔子に一人あり來りて歸す。孔子問うて云く。汝何を以て來りて我れに歸するや。云く。君子參内の時。此れを見しに。顛々として威勢あり。故に歸す。ときに孔子弟子に命じて。乗物裝束金銀財物等を取り出して。此れを與へて。汝は我れに歸するにあらずと云ひてかへせり。亦云く。宇治の關白殿。ある時鼎殿に到りて。火を焚く所を



見玉へば。鼎殿是れを見て云ふ。いかなる者ぞ。案内なく御所の鼎殿へ入ると云ひて。追ひ出されて後。關白殿先きの悪しき衣服等をぬぎかえて。顛々として装束して出てたまふ時。さきの鼎殿はるかに見て。恐れ入りてにげにき。時に殿下。装束を竿の先きにかけて拜せられけり。人これを問ふ。答へて云く。吾れ他人に貴びらるゝこと。我が徳にはあらず。只此の装束ゆゑなりと云へり。おろかなる者の人を貴ぶことかくのごとし。經教の文字等を貴ぶことも。亦かくのごとくなり。古人の云く。言は天下に滿つれども口過なく。行天下に遍けれども怨害なしと。是れ即ち云ふべき所を云ひ。行ふべき事を行ふ故なり。是れは至徳要道の言行なり。世間の言行も。私曲を以てはからひ行ふは。おそらくは過のみあらん。衲子の言行は。先證是れ定まれば。私曲を存ずべからず。佛祖行じ來れる道なり。學道の人。各各自ら己身を顧るべし。身を顧ると云ふは。吾が此の身心。いか様に持つべきぞと顧るべし。然るに衲子は。すでに是れ釋子なり。如來の風儀

を慣ふべきなり。身口意の威儀は。先佛行じ來れる作法あり。各各其の儀に隨ふべし。俗すら猶ほ服は法に應じ。言は行に隨ふべしと云へり。況や衲子は。一切私を用ふべからず。

示して云く。當世學道する人。多分法を聞く時。先づ能く領解する由を知られんと思ひ。答の言のよからん様を思ふほどに。聞くことばが耳を過ごすなり。總じて詮ずる處。道心なく。吾我を存するゆゑなり。只須く先づ吾我を忘れて。人の云はんことを能く聞き得て。後に靜に案じて。難もあり不審もあらば。追うても難し。心得たらば。重ねて師に呈すべし。當座に領する由を呈せんとするは。法を能くも聞き得ざるなり。

示して云く。唐の太宗の時。異國より千里の馬を獻せり。帝これを得て喜ばずして。自ら謂へらく。縱ひ我れ獨り千里の馬に乗りて。千里を行くとも。隨ふ臣なくんば。其の詮なきなりと。故に魏徵を召して。此を問ひ。玉へば。徵云く。帝の心と同じと。依りて彼の馬に金帛をお



ほせて返さしむ。世間の帝王だにも無用のものをば畜へたまはずしてかへせり。況や衲子は衣鉢の外は決定して無用なり。無用の物は是れを貯へてなに、かせん。俗すら猶ほ一道を専らに嗜むものは田苑莊園等を持することを要とせず。只一切國土の人を百姓眷屬ともするなり。相法橋遺囑子息たゞすべからく當道をもつばらばげますべしと云へり。況や佛子は萬事を捨て専ら一事を嗜むべし。是れ第一の用心なり。

示して云く。學道の人。參學聞法の時に能く、極めて聞き重ねて聞きて決定すべし。問ふべきを問はず。云ふべきを云ずして過ごしなば。必ず我れが損なるべし。師は必ず弟子の問を待ちて言を發するなり。心得たることをも。いくたびも問ひて決定すべきなり。師も弟子に好く心得たるかと問うて。云ひきかすべきなり。

示して云く。道者の用心は常の人に異なることあり。故建仁寺の僧正在世の時に。寺中絶食することありき。時に一人の檀那僧正を請

じて絹一疋を施す。僧正歡喜して。人にももたしめず。自ら取りて懷中して。寺に歸りて知事に與へて云く。明旦の淨粥等に作すべしと。然るに或る俗人の所より所望して云く。愧づかましき事有りて。絹二三疋入用あり。少々にてもあらば給はるべき由を申す。僧正即ちさきつかたの絹を取り返して。すなはちこれを與ふ時に。知事の僧も衆僧も思ひの外に不審するなり。後に僧正云く。各は僻事とこそ思はるらん。然れども吾が思はくは。衆僧は而々佛道の志有りて集れり。一日絶食して。餓死するとも苦しかるべからず。世に交れる人の。さしあたりて事缺くる苦惱を扶けたらんは。各の爲めにも利益すぐれたるべしと云へり。まことに道者の案じ入りたること。かくの如し。

示して云く。佛々祖々。皆本は凡夫なり。凡夫の時は必ず惡業もあり。惡心もあり。鈍もあり。癡もあり。然あれども盡く改めて。知識に隨ひて修行せしゆ。系に。皆佛祖と成りしなり。今の人も然あるべし。我が



身愚鈍なればとて卑下することなかれ。今生に發心せずんば何れの時を待ちてか行道すべき。今強ひて修せば必ず道を得べきなり。示して云く。帝道の故實の諺に云く。虚襟に非ざれば忠言をいれずと。云ふ心は己見を存せずして忠臣の言に隨ひて。道理にまかせて。帝道を行はるゝなり。衲子の學道の用心故實も亦かくのごとくなるべし。わづかも己見を存せば師の言耳に入らざるなり。師の言耳に入らざれば師の法を得ざるなり。只法門の異見を忘るゝのみにあらず。世事及び飢寒等を忘れて。一向に身心を清めて聞く時。親しく聞き得るなり。かくのごとく聞く時は道理も不審も明らかめらるゝなり。眞實の得道と云ふは。從來の身心を放下して。只直下に他に隨ひゆけば。即ちまことの道人となるなり。是れ第一の故實なり。

正法眼藏隨聞記第六終

光明藏三昧

懷 奘 記

正法眼藏中に光明の卷あり。今更に此の一篇を示すことは。偏に佛家の面目は。光明藏三昧なることを脱體ならしめんとなり。これ久參入室の人の自行化他の潛行密用なり。それ光明藏とは。諸佛の本源。衆生の本有。萬法の全體にて。圓覺の神通大光明藏なり。三身四智。普門塵數の諸三昧も。みな此の中より顯現す。

華嚴經第十六。升須彌山頂品。偈云。燃燈如來大光明。諸吉祥中最無上。彼佛曾來入此殿。是故此處最吉祥。云云。

この燃燈佛の大光明は。周遍法界にして。凡聖の異同なきが故に。彼佛曾來入此殿なり。如是一聞の承當。これすなはち入此殿なり。是故此處最吉祥の故に。釋迦如來は。燃燈佛より授記を得たまふ時に。無所得とのたまへり。是の故に燃燈佛より授記を得たまふ。是れ一段光明亘古今の故に。若し纔も所得あらば。二段なるべし。



大毘盧遮那成佛神變加持經。入眞言門住心品第一云。時薄伽梵告金剛手言。菩提心爲因。大悲爲根本。方便爲究竟。祕密主云。何菩提。謂如實知自心。祕密主。是阿耨多羅三藐三菩提。乃至彼法。少分無有可得。何以故。虛空相。是菩提。無知解者。亦無開曉。何以故。菩提無相故。祕密主。諸法無相。謂虛空相。

又云。祕密主。大乘行發無緣乘心。法無我性。何以故。如彼往昔如是修行者。觀察蘊阿賴耶。知自性如幻。陽焰影響。旋火輪。乾闥婆城。祕密主。彼如是捨無我。心主自在。覺自心本不生。何以故。祕密主。心前後際不可得故。如是知自心性。超越二劫。瑜祇行。

所謂前後不可得とは。自心本不生なるか故に。是れ毘盧の大智光明如是なり。

又華嚴經十一卷偈云。佛身普放大光明。色相無邊極清淨。如雲充滿一切土。處處稱揚佛功德。光明所照咸歡喜。衆生有苦悉除滅。各令恭敬起慈心。此是如來自在用。同經光明覺品第九云。爾時光明。過百千世界。徧

照東方百萬世界。南西北方。四維上下。亦復如是。彼一一世界中。皆有百億閻浮提。乃至百億色究竟天。其中所有。悉皆明現。乃爾時一切處。文殊師利菩薩。各於佛所。同時發聲。說此頌言。如來最自在。超世無所依。具一切功德。度脫於所有。無染無所著。無想無依止。體性不可量。見者咸稱歎。光明徧清淨。塵累悉蠲滌。不動離二邊。此是如來智。しかあれば如來智は光明なり。凡聖眞俗の二邊を離卻する。不動智の光明三昧なり。大智文殊の無分別智光なり。是れ只管打坐の無造作に現成し來る。是故に毘盧遮那告祕密主言。大乘行發無緣乘心。法無我性。三祖大師云。不用求真。唯須息見。あきらかにしる無緣乘の光明藏裡には。我性もなく見解もなし。我と見とは。神頭鬼面の異名なり。初め吾我的見より。乃至佛見法見をも立せず。只此光明のみなり。般若波羅蜜。譬如大火聚なるを諦聽すべし。

法華經云。爾時佛放眉間白毫相光。照東方萬八千世界。靡不周徧。下至阿鼻地獄。上至阿迦尼吒天。



大毘盧遮那成佛神變加持經。入眞言門住心品第一云。時薄伽梵告金剛手言。菩提心爲因。大悲爲根本。方便爲究竟。祕密主云。何菩提。謂如實知自心。祕密主。是阿耨多羅三藐三菩提。乃至彼法。少分無有可得。何以故。虛空相。是菩提。無知解者。亦無開曉。何以故。菩提無相故。祕密主。諸法無相。謂虛空相。

又云。祕密主。大乘行發無緣乘心。法無我性。何以故。如彼往昔如是修行者。觀察蘊阿賴耶。知自性如幻。陽焰。影響。旋火輪。乾闥婆城。祕密主。彼如是捨無我。心主自在。覺自心本不生。何以故。祕密主。心前後際不可得故。如是知自心性。超越二劫。瑜祇行。

所謂前後不可得とは。自心本不生なるか故に。是れ毘盧の大智光明如是なり。

又華嚴經十一卷偈云。佛身普放大光明。色相無邊極清淨。如雲充滿一切土。處處稱揚佛功德。光明所照咸歡喜。衆生有苦悉除滅。各令恭敬起慈心。此是如來自在用。同經光明覺品第九云。爾時光明。過百千世界。徧

照東方百萬世界。南西北方。四維上下。亦復如是。彼一一世界中。皆有百億閻浮提。乃至百億色究竟天。其中所有。悉皆明現。乃爾時一切處。文殊師利菩薩。各於佛所。同時發聲。說此頌言。如來最自在。超世無所依。具一切功德。度脫於所有。無染無所著。無想無依止。體性不可量。見者咸稱歎。光明徧清淨。塵累悉蠲滌。不動離二邊。此是如來智。しかあれば如來智は光明なり。凡聖眞俗の二邊を離卻する。不動智の光明三昧なり。大智文殊の無分別智光なり。是れ只管打坐の無造作に現成し來る。是故に毘盧遮那告祕密主言。大乘行發無緣乘心。法無我性。三祖大師云。不用求真。唯須息見。あきらかにしる無緣乘の光明藏裡には。我性もなく。見解もなし。我と見とは。神頭鬼面の異名なり。初め吾我の見より。乃至佛見法見をも立せず。只此光明のみなり。般若波羅蜜。譬如大火聚なるを諦聽すべし。

法華經云。爾時佛放眉間白毫相光。照東方萬八千世界。靡不周徧。下至阿鼻地獄。上至阿迦尼吒天。



しかあれば此光瑞は佛所成就第一希有の靈光なり。文殊大士答彌勒問云。此本光瑞。往昔日月燈明佛。說大乘經時。入於無量義處三昧。まします。今の釋迦牟尼佛。說妙法蓮華教菩薩法。佛所護念。まします。ならんと。當知此光明無量義を圓滿せる。無二無三の大光普照なりと云ふことを。文殊大士は。其時妙光菩薩といひき。即爲師。日月燈明佛八子。令其堅固無上道。最後成佛者。名曰燃燈佛。此知我門の坐禪は。燃燈釋迦。嫡嫡相承の光明藏三昧なり。何更有餘義耶。是凡聖不二。今古一乘の光明なり。内不放出。外不放入。誰か尊卑親疎に於て。みだりに退屈せんや。取不得。捨不得。那ぞ取捨憎愛の情識に苦しまんや。しかのみならず。安樂行品において。告文殊師利言。若菩薩摩訶薩。住忍辱地。柔和善順。而不卒暴。心亦不驚。又復於法無所行。而觀諸法如實相。亦不行不分別。是れ只管打坐なり。只管經行なり。亦不行不分別にして。大光明に隨順しもて。ゆくなり。同品の偈曰。顛倒分別諸法有無。是實非實。是生非生。在於閑處。修攝其心。安住不動。如須彌山。觀一切法。皆無

所有。猶如虛空。無有堅固。不生不出。不動不退。常住一相。是名近處。是れは正直捨方便。但說無上道の直示なり。

震旦國にして。達磨大師對梁帝聖諦第一義問言。廓然無聖。是れ祖師禪の光明大火聚なり。八面玲瓏にして。無一物なり。光明の外に。無別行。無異法。況有智境哉。豈有修證對治造作哉。帝云。對朕者誰。磨云。不識。是れ廓然たる一段の光明のみなり。後來雪竇顯禪師讚して云く。聖諦廓然。何當辨的。對朕者誰。還曰不識と。此の話に參じて。脱落せば。通身光明なり。遍界光明なり。

世尊三十九世。雲門山匡眞大師上堂示衆云。人人盡有光明在。看時不見。暗昏昏。作麼生。是諸人光明。衆無對。師自代云。僧堂佛殿廚庫山門。いま大師道の盡有光明は。後に出現すべしといはず。過去にありしといはず。傍觀現來といはず。人人盡有光明と道取するなり。これ大智惠光明の的的の大意なり。皮肉骨髓に聞持すべし。歡喜奉行すべし。光明は人人なり。釋迦彌勒は他の奴なり。在諸佛不增。在衆生不減は。



這個の靈光なり。故に盡有なり。大地一團火なり。師云。作麼生是諸人光明時。大衆無對なり。たとひ百千の道得ありとも無對なり。雲門自代云。僧堂佛殿廚庫山門と。此の自代は。人人に自代し。光明に自代し。暗昏昏に自代し。衆無對に自代して。光明開發する。光明藏三昧なり。しかあれば衆生諸佛をとはず。有情非情を分別せず。光明遍照せること久くして。其の始めもなく方處もなし。故に暗昏昏なり。作麼生なり。夜裡行なり。億億萬劫不可思議なり。

又僧問。光明寂照徧河沙。問未了。師却急問。是非張拙秀才語也。僧云。是。門云。話墮也。南無雲門古佛。眼流星。機掣電。此の僧此において無語。たれかわはぢをしらざらん。雪峰存禪師示衆云。三世諸佛。向火焰裡轉大法輪。雲門云。火焰爲三世諸佛說法。三世諸佛立地聽。しかあれば火焰光明は。三世諸佛の道場なり。諸佛の師なり。是の故に一切如來は。大寂滅光の本道場裡にましまして。萬象之中に常恒說法しました。す。貴耳莫賤眼なり。一堆の火焰。これ前にあらず。これ後にあらず。脱

體現成なるのみなり。しかあるを各自に分別を生じて。それがしは本より暗昧の衆生なり。無智の凡夫なりとのみ。卑下し自限し去るは實に是れ如來の正法輪を謗する無間の業なり。今雪峰の示衆。雲門道の火焰說法は。正直捨方便なり。但說無上道なり。一代時教を擧揚するなり。雪峰恁麼の說話。早く是火焰に燒却し了らる。汝諸人回避せんと要すや。誦經禮拜。擧足下足。悉皆光明の大用現前なり。誰が恩力によるとか習學する。此の玄旨をしらずして。徒に念靜に勞するものあり。亦さはあらじと狐疑して。鬼窟に活計するもあり。入海筭砂の類もあり。蚊虻の紙窓をやぶるが如くなるあり。話墮且置。諸大德。如何便是。さらに泥裡洗土塊にいとまあらずといへども。參禪の徒は。發問には。先づ話頭を可知なり。既に寂照といひ。遍河沙といふ。何んぞ秀才が語ならんや。何んぞ世尊の語ならんや。何んぞ汝が語ならんや。畢竟何人の語ならん。僧堂佛殿。廚庫山門。諦聽諦聽。長沙招賢大師。上堂示衆云。盡十方界。是沙門眼。盡十方界。是沙門家常



語。盡十方界。是沙門全身。盡十方界。是自己光明。盡十方界。無一人不是自己。

しかあれば佛道の參學かならず勤學すべし。信得すべし。生生佛家に結縁するにあらずば。いかてか如是の示衆を聴取せん。かへすかへすも轉疎轉遠なるべからず。今長沙道の盡十方界は。參學當人の一隻眼なり。盡虚空界。盡全身心なり。いまだ聖をとらず。凡をすてず。迷人不是といはず。悟人如是といはず。是自己光明と直示す。長沙大師にゆづることなかれ。此上堂說法は。諸人鼻孔裡の横説豎説なり。各各眼睛裡の横拈倒用なり。別に古則公案を拈提して。死に至るまで返照せず。しらざるもあり。個個無禪の長者子なり。亦光明の言を聞いて。愚人思はく。螢光のごとく。燈火のごとく。日月金玉の光の如く。摸索計較して。かゝやきを見んとし。心に縁め意根下に卜度して。空空寂寂の境界と趣向するゆゑに。動を止めて止に歸し。或は實有の見。有所得の妄見すて難く。或は不思議玄妙の思ひたえず。只難値

難遇とのみ。深く思ひすぎたる開眼瞋睡の飯袋子のみ多し。實に不思議玄妙の大事ならば。何ぞ思惟を以て到らんと妄想するや。これ識神の靜慮を佛坐と解了したる魔類なり。このゆゑに鼻祖大師。廓然無聖。不識と開示します。恁麼の開示にあづかること難値難遇なり。

長沙禪師云。學道之人。不識眞。祇爲從前認識神。無量劫來生死本。痴人喚作本來人。

しかあれば自心をはかり。所得をたて、修證するは。生死の本をやしなふなり。いま眞といひ。本來人と示すは。本有圓成の光明廓然なり。光明廓然の外。何物をか貪求せんと擬するや。故に無聖不識。無孔鐵鎚。大火聚なるのみなり。

趙州問南泉。如何是道。泉云。平常心是道。州云。如何應趣向。泉云。擬向便背。州云。不擬爭知道。泉云。道不屬知。不屬不知。知是妄覺。不知は無記。若眞達不疑之道。猶如大虛廓然洞豁。豈可強是非哉。



是故古人以修力造作。錯て趣向する者をあはれみて、叮嚀に接引するに云く。道以有心不可得。以無心不可得。以言語不可通。以寂默不可至。纔涉擬議。隔千萬程と。諸人。出世間一切事理。この有心無心の外。修心の想あるべきや。既に有心を以ても。無心を以ても。不可得といふ。何ぞ早く求心捨心の妄想を放下し來らざる。或は亦此の機にも及ばざる。不信懈怠の凡夫は。幻化の我相に貪著し。夢幻泡影の世間をいかめしく奔走して。世智辨聰の鬼につかれぬることを知らず。才覺休むときなく。只つたへ聞きたる光明とは佛の眉間より火星の出づるがごとく。ならんと妄察し。依文解義して。諸聖の眞實を窮明せんと思ひ立つ日なし。久參達人。世に出づることあれども。上參する分なし。況や通身光明。法界光明。蓋天蓋地と決定せんや。あはれむにたらざる著相の賣僧なり。

釋迦牟尼佛言。光非青黃赤白黑。非色非心。非有非無。非因果法。諸佛本原。行菩薩道之根本。是大衆諸佛子之根本也。

しかあれば如來既に體性虚空華光三昧より出でたまひて。金剛千光王座に坐したまふ。一戒光明を。如是演説したまふ。あきらかにしりぬ。此の光明は。青黃赤白黑にあらざることを。唯是丙丁童子通身紅なり。泥牛海底走なり。鐵牛無皮骨なり。非色非心。なんぞ求心を曾間にさしはさみて。頻りに内心に喘ぐべけんや。又是れ因果の法にあらず。豈に修證によりて造作せんや。眞に是れ諸佛の本原。乃至諸佛子の根本なり。しかのみならず。虚遮那佛。初發心より受持しますます。一戒光明なり。ゆゑに心地品と云ふ。一切の名相を離れたり。是を心地戒光と云ふなり。

釋迦如來曰。若說法之人。獨在空閑處。寂寞無人聲。讀誦此經典。我爾時爲現清淨光明身。若忘失章句。爲說令通利。

しかあれば讀誦此經典の時。我爾時爲現清淨光明身なり。諸佛の身心は光明なり。一切如來の國土は常寂光なり。淨土身心ともに光明にあらざるなし。故に八萬四千乃至無量の光明と云ふなり。



保寧勇禪師。舉火焰說法話。示頌云。一堆猛焰亘天紅。三世如來在此中。轉大法輪今已了。眉毛之上起清風。

佛家の堂奥に參學するに。をのづから火焰說法を徹見すること如是。しかあれば一堆の猛焰は。即ち三世に熾然として。其所生もなく。相貌もなく。差別もなし。ゆゑにつひに所滅もなし。一切無差別なるがゆゑに。これ森羅萬象。衆生諸佛の本地の風光なり。今時の學人。何によりてか護念し信解せざる。これを信解せざるゆゑに。下愚の凡夫となり。惡趣輪回をまぬかれず。過いづれの處にかあると。我れにたちかへりて徹見すべし。世諦流布の族は。幻化無常の諸法を。實に常住と計較して。世利の得失にいとまを得ず。明日までもたもちがたく。出づるいき入るいきを待たざる。風前暫時の燈に。深く久くたのみをかけて。違順に隨て。或は喜び或は愁ふ。汝が四大五蘊さへ。東岱北邙の露と消ゑ失せて。我物と執するもの微塵ばかりもなきものを。我れありがほに悠然としてあかしくらす。況や身より外の國

城妻子。田宅莊園。金玉衣服にいたるまで。我物と思ひ留まるほど。あさましきことはあらじ。此のさかひを實と信得せず。ひたすら蓄求し執心する人も。皆残らずうせはて。あとかたもなくなりゆくぞかなしき。是れ經文のをしへをまたず。眼前の道理なり。既に一堆の猛焰なり。故に三世の如來も在此中。四生の群類も在此中。此に生佛の異同あることは如何ぞや。云く。吾我を妄執するものは。光明を信ぜずして。我れと生死に浮沉して在此中。亦光明を徹見するものは。平等の無碍の大智現成して在此中。故に永嘉云。不離當處常湛然。覓則知君不可見。取不得捨不得。不可得中只麼得。龍樹祖師讚般若曰。般若波羅蜜。譬如大火聚。四邊不可取。大家恁麼の大教を聞くといへども。見るといへども。他の境界とのみ習學して。通身脱落せず。全體に參徹せず。却て云く。我はこれ非器也。初心也。晚學也。或は一惑未斷の凡夫なりとのみ。舊見己見を放下せず。竟日竟夜。般若の大光明藏中に居して。自ら客作の賤人となり。跼蹐辛苦。五十餘年の窮子とな



る。是れ我れと卑下慢を起し。元來長者子たる。父勅を忘れたる者なり。かなしいかな。自執除糞之器。常令除糞の賤人となりて。清淨光明身を。苦果の穢身と思ひなせる事。かなしみの中の悲み。これよりもすぎたることなし。早く己見の私を可改。たとひ大小權實顯密の事理。五家七宗の妙旨を談ずるも。己見を存する時は。畢竟生滅に歸す。故に云く。生滅の心を以て實相を解すれば。實相却て生滅となる。我見。人見。衆生見。壽者見とは己見なり。身見。偏見。邪見。見取見とは己見なり。乃至等覺より妙覺に至るに。塵沙羅穀の無明と云ふも己見なり。初めは我見と喚び。或は知解習氣。法執悟跡。無事の見。平地上の見と云ふも。みな己見の多少輕重によつて喚ひ換えたる異名目なり。所以者何。最初大惡邪僻の見より。羅穀一點の無明に至るまで。己見無き時。何物をか佛見とも。法見とも云ふべき。誰れあつてか羅穀を存せん。是故に開山曰く。宜く先づ吾我を盡くす可し。吾我を盡くさんと欲せば。無常を觀す可しと。是極大至誠心の直示なり。少林大師

安心法門曰。問世間人。種種學問。云何不得道。答。由見己故不得道。己者我也。至人逢苦不憂。遇樂不喜。由不見己故。又古佛偈曰。佛不見身。智是佛。若實有智。別無佛。智者能知罪障空。坦然不懼於生死。生死を懼れざるは。不見身故なり。身を見ざるは。己見なきなり。大智光明。如是无私故。云智是佛と。しかあるに。艸露浮泡の身を愛するとして。汝が本身たる大光明をは。わきさまのことを批判をする如く思ひ。是れより今ひとつ。いかめしきことのあるべきやうに思ひて。いたづらに國土の治亂。供養の好惡を談じ。只むなくすぎゆく此身の落居。いかにも思ひ定めたる行李なし。若し此光明藏中に。纔も信得行得の分あらば。何ぞ只我身一つの得脱のみならんや。上報四恩。下資三有。山河大地。自身他身。皆如如の光明遍照して。きはまりなかるべし。曹山本寂大師頌云。覺性圓明無相身。莫於知見強疎親。念異即於玄體昧。心差不與道相隣。情分萬法沉前境。識鑑多端失本真。如是句中全曉會。了然無事舊時人。



是れ即ち光明藏中の直指直説にして。しかも妙修本證を開示したまふ所なり。是僧是俗。初心後心を不問。利根鈍根を揀擇せず。多聞多知の差異なく。只是覺性圓明無相身と直指して。無二無三なり。覺性とは佛性なり。圓明は一段の大光明なり。汝が即今の幻身無相の寂光なり。故に古徳云。通身無影像。偏界不覆藏。若し汝未會ならば。更に爲汝可問。即今汝が渾身四大を擊碎し。皮肉骨髓を燒却して。爲我一物を持し來れ。正當與麼の時。古今の生佛。三界の凡聖。萬象森羅。都來無相身にあらざるなし。臨濟義玄和尚云。四大不說法。聽法。脾胃肝膽不說法。聽法。虛空不說法。聽法。且道。何物解說法。聽法。これ聽法無依の靈光無相の身なり。古人爲人の故に且く立名云く。聽法無依の道人と。今云く覺性圓明無相身と。此一句に分明に説き了る。更に老婆心の故に。妙修を示して云く。於知見強て疎親すること莫れとなり。惡知識に親近の者は。ひたすら見解を習學して便ち云く。我れ參學の得力に依て。超佛越祖の禪を得たり。他のすべて知見する處

にあらず。禪機に親き者。外に亦誰れかあらんと。是れ便ち魔王所著の邪心なり。未得謂得の外道なり。次に計我著相の輩は。我は是れ鈍器なり。非學性なり。學性に疎遠なりとのみ。退屈してすゝまず。是謾起知見なり。此の兩般の知見起て憎愛し。是非すること。皆心念情識の四情慮と變ずるゆゑに。一刀兩段して云く。念異即於玄體味。心差不與道成隣。まことにこれ捨惡知識。親近善友なるべきものをや。邪師の説法によりて見解を習ひ。親と思ひ疎と思ふ。謾起知見なり。此の道と玄體とは。光明覺性の日面月面なり。然るに此の光明中より不覺の一念おこりて。妄心邪想を増長す。これ圓明の心月を障礙する浮雲なり。故に云ふ不成隣となり。情分萬法。沉前境。如來すてに心佛及衆生。是三無差別と説く。亦た云く。唯有一乘法と。恁麼の大教を聞くといへども。見るといへども。汝が分上においては。謾りに人我を起し。貴賤凡聖を分別し。聲色の好醜。貧福損益のために。前境に奪ひもち去らる。是れ汝が知見をたのみて。修證に染汚する。憍慢不信



者の致す所なり。識鑑多端失本眞。佛法もと萬差の機類に應じて。大  
小權實。半滿偏圓。顯密禪教。證道淨土。多端なきにあらず。意根攀緣す  
れば。つひに本眞を失す。如是句中全曉會。了然無事舊時人。この舊時  
人は。修證用心の造作なく。兀坐不疑の無相身なり。若し一切の知解  
を。毫釐も心頭におかば。無事にはあらず。舊時人にはあらざるなり。  
釋迦如來曰。我於燃燈佛處。無有法得阿耨多羅三藐三菩提。是れは燃  
燈佛。相見の一句子なり。一句了然超百億なり。この無所得の光明。參  
學すべし。今如來の末流として。剃髮染衣のともがら。燃燈にてらさ  
れて。過日送月といへども。燃燈佛とはいかにあるらんとも疑著せ  
ず。ゆゑに參學の分なし。いたつらに出家の相をかりて。四事の供養  
をむさぼる。實に遊民なり。若し否也といは。且く問ふ。汝作麼生か  
是れ燃燈佛相好なる。不得有語。不得無語。速道速道。かなしいかな。燃  
燈佛とは過去の佛とのみ習學して。亘古輝今ことをしらず。況や汝  
が鼻孔裡。眼睛裡の說法涅槃なることをいかに。か信得せんや。今一

隊の下品の聲聞ありて。しきりに生死をいとひ。涅槃を急に求むる  
として。實有有所得の憤志を起し。汝が我慢上に。法欲を増加して。求  
心死にいたるまでやむ時なし。無眼師これを信心ある善人と譽む  
るゆゑに。此の我執。有所得を却て精進修行の道人なりと自慢して。  
つひには餓鬼道を成就す。抑亦た佛家に常精進と參學し。熾然堅固  
の大定と單傳しきたるは。汝が邪定のごとく。修と證と二段に趣向  
して。知解を求るを云ふにはあらぬなり。

百丈和尚云。靈光獨耀。迴脫根塵。體露眞常。不拘文字。心性無染。本自圓  
成。唯離妄緣。卽如如佛。

この靈光は過去久遠劫來より。盡未來際に至るまで。間斷なき。これ  
を常精進と云ふ。迴に根塵を脱して。體露眞常なる。是れを熾然常堅  
固と云ふ。この靈光にまかせて。安住不動なるを。只管打坐の三昧王  
三昧と云ふなり。しかあれば有所得と云ふにも。深淺輕重あるべし。  
只執事相。有相行を修し。向外求他。文字言句上に。辨眞僞。或は住相の



布施を行し。積功累徳を邪解して。滅罪生善のために身心をくるしめて。是を精進とほこるのみを。有所得と云ふにあらず。たとひ筆硯を放下し。人事を斷し。空谷に獨坐し。木食艸衣。長坐不臥すといへども。汝が心頭において。止動歸止。斷妄つくして。外偏に眞理に住し。生死涅槃を取捨し。増愛するは。都來是れ有所得なり。このゆゑに永嘉大師云。棄有著空病亦然。還如避溺而投火。捨妄想取眞理。取捨之心成巧僞。學人不了用修行。眞成認賊將爲子。損法財滅功德。莫不由斯心意識。しかあれば。學人身心を以て。光明藏裡に歸投して。佛光明に通身を脱落して。坐臥經行なるべきをや。是故に世尊の曰く。佛子住此地。即是佛受用。常在於其中。經行若坐臥。この金言を佛子たるもの片時も忘ることなかれ。此地とは光明藏なり。唯一佛乘なり。この佛受用を。背覺合塵の一念によりて。忽ち畜生受用。餓鬼受用に變作することなかれ。且く道へ。燃燈佛及釋迦大師乃至此の燈燈續焰七佛列祖の相好。さて涅槃しまします。道場は久遠なりとや。參學する。常住不

滅なりとや。聞思する。寂光の寶城にましますとや。いはん。佛眞法身。猶若虛空とや。了解する。若し恁麼の分齊にて。學得計校の窟宅を透脱せずば。何ぞ佛光明相承の師家といはんや。著師子皮の野干鳴なり。若し向自己眼睛裡參究する分なくば。假令剃染衣するといへども。可憐愍の衆生なり。千經萬論を解釋するも。算計隣家珍寶なり。海人知貴不知價なり。且道汝即今屙屎放尿。著衣喫飯。畢竟これ誰が受用ぞや。しかのみならず。水色山光。暑往寒來。春花秋月。千變萬化。これ何の致す處ぞや。實に是れ容顏甚奇妙。光明照十方なり。生死涅槃。猶如昨夢なり。有即是無。無即是有なり。若し不如是は。常在靈山と説くも。假法なり。戲論なり。不生不滅常寂光と聞くも。只だ言説のみ有て。すべて實義なしといはん。

釋迦如來。一戒光明の金言に云く。計我著相者。此法不能信。滅壽修證者。亦非下種處。欲長菩提。苗光明照世間。應當靜觀。察諸法眞實相。不生亦不滅。不常亦不斷。不一亦不異。不來亦不去。至於學於無學。勿生分別



想しかあればこの光明照世間の金言を徹骨徹髓に聞取すべし。三世諸佛の大用現前の妙身なり。頂戴奉行し。皆大歡喜せざらんや。しかあるに今時參學の人を見るに。痴暗の因地に處して。朝夕に磨磋して。而後に光明は見徹するならんと待ちくらす。或は復た熾然清淨の光明を。紛飛雜念と習禪して。頻りに焰火を拂ひ盡くして。常寂光を見んとす。若しすべて起らざるを是と云はば。木石土塊是ならんや。みなこれ火をさけて。溺に入る。下品の聲聞なり。愚なるかな。二乗の坐をよび。凡夫の趣向を執して。無上の大道を悟らんと要す。痴鈍邪行の是よりもすぎたるなし。是故に云く。二乗精進無道心。外道聰明無智惠。又愚又癡。又小駭。空拳指上生實解と。恁麼の修心求心。計校卜度にさへられて。本具圓成の光明を埋没するのみならず。如來の正法輪を謗するなり。無間の業なり。又少智愚蒙の族のみ。諸叢林の主として。我執有所得の衆盲を接引すること。漢土の隋唐宋より今に至るまで。如稻麻竹葦。あはれまざらんや。悲まざらんや。問々其

の窠窟を出たる者も。見神見鬼。偷心未死却。或は一期の勇に。謾りに印可をなし。亦は一時憤志起て。長坐不臥し。心識困勞して。萬事一片となる。動用纔に止て。念慮靜なる。虛虛靈靈として。獨朗のごとくなるところ。是即内外打成一片のところ。自己本分の田地ならんと邪解して。此の見解を以て。無眼の禪師に向て呈其見解。師見人眼なし。故に來者の語に隨て。挨拶し。冬瓜の印を許容し。罷參の衲僧と自稱す。淺識少聞の道流は。此の毒に墮落する者。あげてかぞへがたし。誠に是れ末法といひながら。都て悲きことにあらずや。謹て實參同志の人に白す。一機一境をとることなく。見解聰明をたのむことなく。長連牀上の學得をたづさへず。身心を以て上來の大光明藏中に放下し了て。二度かへり見ず。悟を求めず。迷を拂はず。念の起るを嫌はず。また念を愛して相續せず。當軒大坐すべし。汝が念をつがざるに。念ひとりおこるものにあらず。只一座の虚空の如く。一團火のごとく。出息入息に打ちまかせて。萬事にとりあはず坐斷すべし。たとひ



八萬四千の雜念起滅するも當人とりあはず捨てはてぬれば一念一念悉く般若の神通光明となるべし。たゞ坐中のみにあらず歩歩光明の運歩なり。一步一步分別するにあらず。十二時中大死人のごとくなり。一切已見分別なし。しかあれども出息入息聞性觸性無知無分別にて身心一如の寂照光明なり。故に喚へは即ち應諾す。是れ凡聖迷悟一如の光明なり。動用中にありても動用にもさへられず。林花艸葉人畜大小長短方圓。汝が心念作意の分別をからず。一時に現成す。是光明の動用にさへられざる現證なり。虛明自照。不勞心力なり。此光明は從本無所住。諸佛出世すれども出世せず。涅槃すれども涅槃せず。汝が生る時光明生ぜず。汝が死する時光明滅せず。佛に在ても増さず。衆生に在ても減せず。乃至迷ふ時もまよはず。悟る時もさとらず。方處もなく。相名もなし。これ萬像森羅の全體なり。取不得。捨不得。不可得なり。不可得にして通身におこなはる。上至有頂。下至阿鼻まで。如是圓明なり。神妙不思議の靈光なり。此の玄旨を信受

すれば。向他不用問眞僞。市中如逢阿爺ならん。向他善知識。印可を願ひ。授記得果をこのむことなかれ。何ぞ況や衣食住處。色欲愛執の畜生の所行においてをや。此三昧は初めより諸佛果海の道場なり。故に單傳の佛坐佛行なり。既に佛子たるものは唯佛座に安坐すべし。地獄坐。餓鬼坐。乃至畜生修羅人天坐。聲聞緣覺坐にかならず坐すべからず。如是に只管打坐して。光陰莫虛度。是を直心道場。不思議解脱の光明藏三昧と云ふなり。此の篇は門下入室の人にあらずば。見せしむることなかれ。是れ自行化他において。邪僻の見あらざらしめじとの護法の一片心なり。

弘安元年戊寅八月二十八日

懷英謹記

光明藏三昧終



# 曹洞教會修證義

## 第一章 總序

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり。生死の中に佛あれば生死なし。但生死即ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし。是時初めて生死を離るゝ分あり。唯一大事因縁と究盡すべし。

人身得ること難し。佛法値ふこと希れなり。今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず遇ひ難き佛法に値ひ奉れり。生死の中の善生最勝の生なるべし。最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。

無常憑み難し。知らず露命いかなる道の草にか落ちん。身已に私に非ず。命は光陰に移されて暫くも停め難し。紅顔いづくへか去りにし。尋ねんとするに蹤跡なし。熟觀する所に往事の再び逢ふべからざる多し。無常忽ちに到るときは國王大臣親暱。從僕妻子珍寶たす



くる無し。唯獨り黄泉に趣くのみなり。已れに隨ひ行くは。只是れ善惡業等のみなり。  
今の世に因果を知らず。業報を明らめず。三世を知らず。善惡を辨へざる邪見の黨侶には群すべからず。大凡因果の道理。歴然として私なし。造惡の者は墮ち。修善の者は陞る。毫釐も忒はざるなり。若し因果亡じて虚しからんが如きは。諸佛の出世あるべからず。祖師の西來あるべからず。

善惡の報に三時あり。一者順現報受。二者順次生受。三者順後次受。これを三時といふ。佛祖の道を修習するには。其最初より斯三時の業報の理を効ひ驗らむるなり。爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり。但邪見に墮つるのみに非ず。惡道に墮ちて長時の苦を受く。當に知るべし。今生の我身二つ無し。三つ無し。徒らに邪見に墮ちて。虚く惡業を感得せん。惜からざらめや。惡を造りながら惡に非ずと思ひ。惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて。惡の報を感得せ

ざるには非ず。

### 第二章 懺悔滅罪

佛祖憐みの餘り。廣大の慈門を開き置けり。是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり。人天誰か入らざらん。彼の三時の惡業報。必ず感ずべしと雖も。懺悔するが如きは。重きを轉じて輕受せしむ。又滅罪清淨ならしむるなり。

然あれば誠心を専らにして。前佛に懺悔すべし。恁麼するとき。前佛懺悔の功德力。我を拯ひて清淨ならしむ。此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり。淨信一現するとき。自佗同く轉ぜらるゝなり。其利益普く情非情に蒙らしむ。

其大旨は。願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて。障道の因縁ありとも。佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖。我を愍みて業累を解脱せしめ。學道障り無からしめ。其功德法門普く無盡法界に充滿彌綸せらん。哀みを我に分布すべし。佛祖の往昔は吾等なり。吾等が當來



は佛祖ならん。

我昔所造諸惡業。皆由無始貪瞋癡。從身口意之所生。一切我今皆懺悔。是の如く懺悔すれば。必ず佛祖の冥助あるなり。心念身儀發露白佛すべし。發露の力。罪根をして銷殞せしむるなり。

### 第三章 受戒入位

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし。生を易へ身を易へても。三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし。西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。

若し薄福少徳の衆生は。三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり。何に況や歸依し奉ることを得んや。徒らに所逼を怖れて。山神鬼神等に歸依し。或は外道の制多に歸依すること勿れ。彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し。早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて。衆苦を解脱するのみに非ず。菩提を成就すべし。

其歸依三寶とは。正に淨信を専らにして。或は如來現在世にもあれ。

或は如來滅後にもあれ。合掌し低頭して口に唱へて云く。南無歸依佛。南無歸依法。南無歸依僧。佛は是れ大師なるが故に歸依す。法は良藥なるが故に歸依す。僧は勝友なるが故に歸依す。佛弟子となること必ず三歸に依る。何れの戒を受くるも。必ず三歸を受けて。其後諸戒を受くるなり。然あれば則ち三歸に依りて得戒あるなり。

此歸依佛法僧の功德。必ず感應道交するとき成就するなり。設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も。感應道交すれば。必ず歸依し奉るなり。已に歸依し奉るが如きは。生生世世在在處處に増長し。必ず積功累徳し。阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。知るべし三歸の功德。其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと。世尊已に證明しましませ。衆生當に信受すべし。

次には應に三聚淨戒を受け奉るべし。第一攝律儀戒。第二攝善法戒。第三攝衆生戒なり。次には應に十重禁戒を受け奉るべし。第一不殺生戒。第二不偷盜戒。第三不邪淫戒。第四不妄語戒。第五不酤酒戒。第六



不說過戒。第七不自讚毀佗戒。第八不慳法財戒。第九不瞋恚戒。第十不謗三寶戒なり。上來三歸三聚淨戒。十重禁戒。是れ諸佛の受持したまふ所なり。

受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提。金剛不壞の佛果を證するなり。誰の智人か欣求せざらん。世尊明らか一切衆生の爲に示します。衆生佛戒を受くれば。即ち諸佛の位に入る。位大覺に同し。已ん眞に是れ諸佛の子なりと。

諸佛の常に此中に住持たる。各々の方面に知覺を遺さず。群生の長へに此中に使用する。各々の知覺に方面露れず。是時十方法界の土地草木。牆壁瓦礫。皆佛事を作すを以て。其起す所の風水の利益に預る輩。皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて。親き悟を顯はす。是を無爲の功德とす。是を無作の功德とす。是れ發菩提心なり。

#### 第四章 發願利生

菩提心を發すといふは。己れ未だ度らざる前に。一切衆生を度さん

と發願し營むなり。設ひ在家にもあれ。設ひ出家にもあれ。或は天上にもあれ。或は人間にもあれ。苦にありといふとも。樂にありといふとも。早く自未得度先度佗の心を發すべし。

其形陋しといふとも。此心を發せば。已に一切衆生の導師なり。設ひ七歳の女流なりとも。即ち四衆の導師なり。衆生の慈父なり。男女を論ずること勿れ。此れ佛道極妙の法則なり。

若し菩提心を發して後。六趣四生に輪轉すと雖も。其輪轉の因縁皆菩提の行願となるなり。然あれば從來の光陰は。設ひ空く過すといふとも。今生の未だ過ぎざる際に。急ぎて發願すべし。設ひ佛に成るべき功德熟して。圓滿すべしといふとも。尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり。或は無量劫行ひて。衆生を先に度して。自らは終に佛に成らず。但し衆生を度し。衆生を利益するもあり。

衆生を利益すといふは。四枚の般若あり。一者布施。二者愛語。三者利行。四者同事。是れ則ち薩埵の行願なり。其布施といふは。貪らざるな



り。我物に非ざれども。布施を障へざる道理あり。其物の輕きを嫌はず。其功の實なるべきなり。然あれば。則ち一句一偈の法をも。布施すべし。此生佗生の善種となる。一錢一草の財をも。布施すべし。此世佗世の善根を兆す。法も財なるべし。財も法なるべし。但彼が報謝を貪らず。自らが力を頌つなり。舟を置き。橋を渡すも。布施の檀度なり。治生産業。固より布施に非ざること無し。

愛語といふは。衆生を見るに。先づ慈愛の心を發し。顧愛の言語を施すなり。慈念衆生。猶如赤子の懷ひを貯へて。言語するは。愛語なり。徳あるは。讚むべし。徳なきは。憐むべし。怨敵を降伏し。君子を和睦ならしむること。愛語を根本とするなり。而ひて。愛語を聞くは。而を喜ばしめ。心を樂しくす。而はずして。愛語を聞くは。肝に銘じ。魂に銘ず。愛語能く廻天の力あることを。學すべきなり。

利行といふは。貴賤の衆生に於きて。利益の善巧を廻らすなり。窮龜を見。病雀を見しとき。彼が報謝を求めず。唯單へに。利行に催ほさる

ゝなり。愚人謂はくは。利佗を先とせば。自からが利省れぬべしと。爾には。非ざるなり。利行は一法なり。普ねく。自佗を利するなり。

同事といふは。不違なり。自にも不違なり。佗にも不違なり。譬へば。人間の如來は。人間に同ぜるが如し。佗をして。自に同ぜしめて。後に。自をして。佗に同ぜしむる道理あるべし。自佗は。時に隨ふて。無窮なり。海の水を辭せざるは。同事なり。是故に。能く水聚りて。海となるなり。大凡菩提心の行願には。是の如くの道理。靜かに思惟すべし。卒爾に。すること勿れ。濟度攝受に。一切衆生皆化を被ふらん。功德を禮拜恭敬すべし。

### 第五章 行持報恩

此發菩提心。多くは。南閻浮の人身に發心すべきなり。今是の如くの因縁あり。願生此娑婆國土し來れり。見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや。靜かに憶ふべし。正法世に流布せざらん時は。身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも。値ふべからず。正法に逢ふ今日の吾等を願



ふべし。見ずや佛の言はく。無上菩提を演説する師に値はんには。種姓を觀ずること莫れ。容顏を見ること莫れ。非を嫌ふこと莫れ。行を考ふること莫れ。但般若を尊重するが故に。日日三時に禮拜し恭敬して。更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。

今の見佛聞法は。佛祖而面の行持より來れる慈恩なり。佛祖若し單傳せずば。奈何にしてか。今日に至らん。一句の恩尙ほ報謝すべし。一法の恩尙ほ報謝すべし。況や正法眼藏無上大法の大恩。これを報謝せざらんや。病雀尙ほ恩を忘れず。三府の環能く報謝あり。窮龜尙ほ恩を忘れず。餘不の印能く報謝あり。畜類尙ほ恩を報ず。人類爭か恩を知らざらん。

其報謝は餘外の法は中るべからず。唯當に日日の行持。其報謝の正道なるべし。謂ゆるの道理は。日日の生命を等閑にせず。私に費さざらん。と行持するなり。

光陰は矢よりも迅かなり。身命は露よりも脆し。何れの善巧方便ありてか。過ぎにし一日を復び還し得たる。徒らに百歳生けらんは。恨むべき日月なり。悲むべき形骸なり。設ひ百歳の日月は。聲色の奴婢と馳走すとも。其中一日の行持を行取せば。一生の百歳を行取するのみに非ず。百歳の佗性をも度取すべきなり。此一日の身命は。尊ぶべき身命なり。貴ぶべき形骸なり。此行持あらん身心。自らも愛すべし。自らも敬ふべし。我等が行持に依りて。諸佛の行持見成し。諸佛の大道通達するなり。然あれば。則ち一日の行持。是れ諸佛の種子なり。諸佛の行持なり。

謂ゆる諸佛とは。釋迦牟尼佛なり。釋迦牟尼佛。是れ即心是佛なり。過去現在未來の諸佛共。に佛と成る時は。必ず釋迦牟尼佛と成るなり。是れ即心是佛なり。即心是佛といふは。誰といふぞと。審細に參究すべし。正に佛恩を報ずるにてあらん。

曹洞教會修證義終

承陽大師聖教全集第三卷終



明治四十二年四月二十日印刷  
明治四十二年四月廿五日發行

承陽大師聖教全集與附

定價金參圓



編輯者 福井縣吉田郡志比村壹番地  
永平寺

右代表者

弘津說三  
東京市芝區芝公園五號地永平寺出張所

印刷者 太田音次郎  
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所 永平寺出張所  
東京市芝區露月町十八番地

發賣元 鴻盟社  
東京市芝區露月町十八番地

(振替口座東京貳九七九)

發賣所

東京市麻布區  
飯倉町五丁目  
東京市芝區  
愛宕町二丁目  
東京市本郷區  
春木町

森江書店  
佛教館  
森江分店

東京市神田區  
駿河日本橋區  
東京市日本橋區  
箱根町  
東京市神田區  
表神保町

光融館  
前川書店  
東京堂  
京都市三條通  
高都市  
京都市  
木津市  
大阪市東區  
北久太郎町

出雲寺書店  
貝葉書院  
積文社







24305

(曹洞宗の一大寶典 宗乘研究者の指南)

故永興經豪禪師著 豐後泉福寺御藏版

# 正法眼藏御抄

全貳冊

- ▲原本七拾五卷參拾壹冊
- ▲菊版洋綴總クローズ金文字入
- ▲紙 數 千 八 百 頁
- ▲定 價 金 四 圓
- ▲郵便小包料貳拾錢

『正法眼藏』は我が高祖大師の暖皮肉なり一大藏經なりされば後世の高僧碩學之が註釋を試みたるもの尠からざるも最も高祖道の眞面目を御抄とす抑御抄は經豪禪師が乾元二年(762)延慶元年に至る六年の歲月を遺憾なく發揮したるものを 御抄 費し全力を擧げて高祖道の特色を發揮し猶ほ高祖大師の法嗣たる證慧禪師の『御開書』を揚げて之 梵網經略抄 を附し以て禪戒の端的を示されたるものなれば御抄を繙が證左に供し更に加ふるに 經豪抄影室抄なるものにして宗内の一大寶典宗乘研究者の羅針盤と云ふべきものなり然るに本抄は古來豐後泉福寺の影室に深く秘藏せられて容易に拜覽を許されずたゞ一世紀に二三の寫本なるもの傳はるもその眞偽是非の如きは多言を要せざる所茲に於て泉福山主之を遺憾とし數年前より種々經營の結果期漸く茲しこゝに世に公にするの機運に到れりあゝ數百年來闍宗有道の士が渴仰して猶ほ得ざりし秘藏の眞本今や開版の機を得る實に闍宗の一大幸福と云はざるべからず

發行所

東京芝區露月町十八番地  
(振替口座二一九七九)

鴻

盟

社